

---

# 嘘と獣の終末論

松ノ山

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘と獣の終末論

### 【Nコード】

N4093X

### 【作者名】

松ノ山

### 【あらすじ】

巨大生命体が闊歩する世界で生きる少年達の話。

森で共に暮らす三人にはそれぞれ隠す過去があり、街で暮らす少女には知らされない過去があった。

嘘で上書きされた歴史の中で、人々は疑問を胸に生きていく。

そして、一人の少年が森を出たその日から、世界の嘘と獣の終末が幕を開けた。

自分が好きそうな話を書いています。気になって、読んでくれれば

幸いです。

## プロローグ

視界を埋め尽くす深緑の色は、空の蒼と対照的にどこか危険を感じさせる。

幹の直径が二〇メートルにも及ぶ巨木が、天を突き刺すように群生する森は、どんなに凶暴な生物の命も捕らえて放さぬようだ。木々の間を埋めるようにシダ植物が生え、剥き出しの岩肌は無数の苔に覆われている。枝を大きく広げた巨木は光を遮断し、その下を夜のごとく染めている。

そんな森の中を疾駆していく影があった。

ソレが踏みつける根は裂け、土は抉られた。そして、黒光りする鱗と白光りする数多の牙を生やしていた。

ソイツは、この森では「タイラント」と呼ばれる巨大生物の一種で、まるで恐竜のような体長八メートルほどの二足歩行の爬虫類であった。

しかし、疾走しているのは、この怪物だけではなかった。

タイラントが過ぎた後、軽快に走る音と共に紅梅色の残像と、地面に踏まれた痕が残されていた。

突然、甲高くタイラントは鳴き、声がその場にこだました。同時に身体を回転させ、追跡者を迎え撃った。

が、タイラントは今にも噛み砕かんとする口と、まっすぐ見つめた瞳の顔を剥製にして、頭部が重力に従ってずり落ちていった。

ずしん、と重く響いた。そして、沈黙が訪れた。

タイラントが崩れた場所よりも先、この哀れな爬虫類が、走り抜けたかもしれない木々の間に遠ざかっていく後姿があった。少し長

めの漆黒の髪が揺れていた。

その後ろで森の掃除屋が肉に群がり、その場に生物がいた証拠を消し去った……。

これは枯れた星から飛び立った人間たちの話。

何億年もの間、生き物たちが繁栄し続けた惑星があった。

大気に覆われ植物が生い茂り、水資源に恵まれていた星だった。

しかし、その世界で勃発した大戦によって緑に覆われた地表は褐色に変わり果て、生き物を繁栄させるにいたらしめていた水も枯渇し、死の星へと加速度的に変貌した。

その惑星で優れた知能を備えていた生き物は自らを人間と呼び、都市を造り国を造ったが戦火に焼かれ、破壊され見る影もなくなつた。

戦いがもたらしたのは、星の死だった。

大戦後、彼らは技術を結集し荒廃した母星を飛び出し、新天地を求め始めた。

そして宇宙に飛び出し四方に散つた彼らの行方を知るものは、もはや荒廃した惑星にはいなくなった。

太陽系から離れた宇宙にまるで蒼い宝石のような惑星があった。

かつて新天地を求めた人間が運よく辿りつき、原生物との共存を図りつつ、科学を急速に発展させた星だった。

そんな惑星で人々がかつての故郷を忘れた頃、人間は同じ過ちを繰り返した。

北方の大国、雪の国を中心とした《フリックラッド北大陸大協栄圏》とそれに対抗した国々による《対北方戦線》との間で大戦が勃発したのだった。

新たな資源の確保を目論んだ北の大国は周辺国家を侵略し、世界各地で抵抗がなされた。そしてこの戦争は短期決戦することはなく持久戦へと纏れ込んでいった。戦争は膠着状態に陥り、人々は終わりの見えない不安に怯えた。

しかし、凶らずも戦争は終わりを告げることになった。

突如世界七カ所に隕石が衝突したのだった。戦場や森林、海や大都市など無差別に隕石は大きな傷跡を起こしていった。

世界中の情報通信がパンクし、世界は混乱の渦へと放り込まれた。

事実上、戦争は終わりを迎えた。

国家総力戦によって既に膨大な資源を失った世界各国には、戦線を維持できるだけの財も兵力も残されていなかった。

世界が落ち着きを取り戻し、隕石の調査を本格的に始めるまでには時間がかかった。ようやく始まった頃には世界中で異変が感じられるようになっていた。

もはや止められないカウントダウンが開始していた。

隕石が落ちた場所では地形が大きく歪み、窪み、砕けた。

そして世界中で生態系に著しい変化が生じていた。

特に顕著であった地域は生態系に恵まれた森林で、落下地点付近の植物などに畸形が見られるようになった。本来よりも倍以上成長したり、葉が巨大化し色が変色するもの、異常に枝や茎が増えたものなどが確認された。しかし、それらはまだ序の口であった。

各国の調査団が隕石に含まれる高濃度の放射性物質を報告した頃には、世界中で異変が確認されていたのだ。最も目を引く異常として揚げられたのが、隕石衝突地点に近い森の肥大だった。森林が急速に世界に広がっていった。

人々は墜落した隕石を《デフォメトロイド》と呼び、最優先事項

としてこの除去をめざした。世界各国は森の侵食を抑えるために隕石の撤廃を行ったが、異常な成長をし複雑に絡み合った森では思うように作業は進まず、次々と都市が緑に包まれていった。

そして、異変は植物だけに留まらず、森に住んでいた生物たちにも及んだ。それらにも畸形が生じ、除去に向かった軍人や周辺の人々を襲うようになった。

巨軀をもつて生まれた生命体。タイラント

人々は抵抗を続けた。より進んだ科学技術を行使し、異型の生物たちに抗った。

だが、小さな人間はあまりに無力であった。

消耗戦になるにつれて、既存の兵器がいくら進んでいたものでも人間側がジリ貧になっていった。

そして、世界各国は敗北を認めた。

もはや人々は地表を捨て、新天地に逃げるしかなかった。

いや、世界のどこにも安息の地はなかった。惑星から逃げようにも、全人類を運ぶだけの箱舟は存在しなかった。

そのため人々は、>アンダーヘル<と呼称するアークロジを世界各地に形成した。無い安息の地を自らの手で創ったのだった。

人々が消えた多くの地表は、瞬く間に緑に飲み込まれていった。

それは隕石衝突から僅か一〇年足らずであった。

だが、それから数十年後の世界で人々は虐げられる存在ではなかった。

アンダーヘル、第三の楽園で人々は再起を図り、かつての繁栄を取り戻していった。

だが、すぐに暗黒の時代が訪れる……。

多くの科学が失われ、多くの楽園が地獄へと変貌し、多くの血が流され……そして多くの嘘が生まれた。

## プロローグ（後書き）

初投稿です。おかしな所や誤字脱字などあれば指摘願います。

とりあえず、自分が好きそうな話を暇つぶしに、退屈しのぎに書き始めました。

## 終わる平穩 1

災厄と災禍、世界は暗く狭くなった。人は嘔吐きの獣になった。

うつそうとした森が、地平線まで続く濃緑の世界に人間の居場所  
はなかった。存在を赦されたのは、異常なほどの巨軀を有した生物  
たちであった。

苔に覆われ、草木が茂る森の中には四角くり抜かれたかのような  
岩や、掘ることの不可能なひび割れた地面、茶褐色で表面がざらつ  
いた『止まれ』の文字が寂れた風にして無造作にされている。

この土地にあった筈の、人間が我が物顔で闊歩していた住宅街も  
天をめざした高層ビルも、そのほとんどが森に同化していた。

この世界で人間が安心して生活できる土地は人類の最盛期の五分  
の一にまで減り、人はそんな世界でその様相を変えることで生き延  
びていた。

人々はかつての栄光に夢を馳せ、日々を過ごしていた。その想い  
が平和への願いからか、はたまた自身の利潤のためであるかは別に  
して……。

大陸につながる本土と、周辺の小島からなる タルニア 島の国。か  
つて『季節の国』と呼ばれた場所で、海に囲まれた森で確かな生活  
の煙が上がっていた。

「ふあゝあ、腹が減ったな」

大きなあくびをし炎に薪をくべる男が声に出す。その姿はまるで人間と蛇が合わさったかのように、この世界では竜人<sup>リゼンライ</sup>という種族の男。男は長髪を後ろで束ね一つに纏めていた。顔を覆う淡青の鱗が炎の揺らめきを反射して、黄金の眸が眩しそうに細められる。上下共に袖の長い服装をしていた。

「おせえ……リントの奴どこほつつき歩いてんだよー!!」

その横で苛立ちを隠さないのは、頭部に力強い巻き角を生やした角獣族>レプリコン<の少年。

軽装な身なりと短く切られた髪で爽やかに見えるも、その口からついて出るのは粗暴な言葉遣いである。ギシギシと歯軋りを繰り返していた。

彼らはこの危険な森の中を生活の場としていた。開拓者とは別に、彼らには森で生きる訳があった。人の社会から遠く隔離されたこの世界で、生きなければならぬ理由があった。

そんな彼らは太陽がちょうど真上にやってきたこの森で昼食を取ろうとしていた。

のだが、

「喰いモンがなきや駄目じゃん！　なあ、ペール。何か喰いもんねえの?」

ぎゅるると腹が鳴り、ヴァンは今も向こうで炎の相手をしている、ペールに問いかける。問いかけたところで何も出てこない事は分かりきっていた。

「それで五度目めだぞ、ヴァン」

飽き飽きとした声が返る。ヴァンが腹を空かしたように、ペールもまた同じであった。

空腹を紛らわすように炎に薪を足す。薪が爆ぜ、火の粉が舞う。

「あー腹減ったな。てか、帰りが遅いだろ。あーもう、リントのばかやろー!!」

ヴァンの怒声は森に吸い込まれていく。

「にしても、帰りが遅いよなリント」

ペールはこの場に居合わせていないもう一人の森の住人に対してぼやく。その声色はヴァン同様、相手の安否を心配するような気配は皆無であった。

「道にでも迷ったか、リントのバカ。早く食料集めて帰って来いよ」  
「喋っていると余計に腹が減るぞ……」

「くっ……」

ヴァンはペールに如何<sup>いか</sup>わしい視線を送るも黙って従う。そんなヴァンを見ることなく、ペールはひたすら焚き火を凝視する。

会話の無くなった森の野営地。

パチパチと火花の散る音だけが、その場を満たしていた。

## 終わる平穩2

やっぱ、二人ともおこってるだろうなあ。

はあー、ついつい口から溜息がこぼれる。

袋を肩に担いだ少年が一人、森を徘徊はいかいしていた。身に纏まとっているのは酷ひどくくたびれた鳶色とびいろの外ぐ套。裾は所々が擦り切れている。下には平服に革のベルトを巻き、腰に小太刀を差していた。

少年は、木の根元で土を掘り返したり、枝の間を仰ぎ見るといふ行動を幾度となく繰り返す。

その顔立ちは、こんな薄暗い森には不似合いな端正な容貌をしている。少し小柄ともいえる体つき、一見すると少女のように見えなくもない。

ふうー、木に体重を預けて一息つくと汗が頬を伝い、地面に黒くシミを残した。

少年はだいぶ長い間森を歩き続けた。足は疲れ、棒のように感じられる。

よしっ、という掛け声で少年は袋を担ぎなおし、歩みを再開する。しかし身の丈の倍はある木の根が入り組み、蔦つたが絡らみあう森に歩を進めるほどに、たちまちその表情は沈んでいった。

一人森を流浪する少年の名はリント・ミウネといった。

本日の食料担当にされ、人里など存在しない陰気な樹海で食料となるものを探していた。

つい今しがた高台に登って時刻を確かめると、時は既に昼時。

燦燦<sup>さんさん</sup>とした太陽がちょうど真上に来ていた。

それでもリントは未だに帰ることが出来なかった。今すぐ帰りたかったがそれが出来ない訳があった。

食材を入れるために持ってきた麻袋には、朝早くから探しているにもかかわらず、液果が二個と地味な色をした手のひらサイズの茸が三本ほどあるだけであった。三人分の食料としては少なすぎだった。

リントは重さを確かめるように袋を片手で上下させる。その軽さが落ち込みに拍車をかけていく。

「このまま帰ると何を言われるか……」

沈んでいく気持ちを押さえつけて、帰路を急いだ。湿った地面に足を取られぬように木々の間を抜けていく。時折、甲高い奇声や低い唸り声がどこからか上がる。

森の中は人にとって死の世界であり、常に人は狩られる側であった。

歩を進めるリントの周囲一帯は、身丈をゆうに超す木の根が複雑に絡んでいる。

それらを越えるたびに左右に首を振り安全を確かめる。

いつどこで森の住人に遭遇するか分からない緊張感。

そろそろ諦めて、潔く罵られようかと考え始めたところで、ふいに周囲を探っていたリントの聴覚は弱弱しい咽び声を捉えた。消え

入るように短く、繰り返し発せられる。

近い。死にかけの奴がいるみたいだ。

声のした方の様子を確かめようと向かう。その声の主が食用可であればその血肉を分けて貰うつもりだった。森で生きていくためには自分たちも、狩る側にならなければならないのだ。

身長の上にある根の壁を軽快に跳び上がっていく。その度に胸に淡い期待感が募る。だが、それもつかの間であった。

根の頂上に辿り着き、開けた視界は鮮やかなシヨッキングピンクで埋め尽くされていた。

はあああああ、今日最大の溜息と共にリントのモチベーションは底まで急落した。

森に生息する生き物たちは皆、人間よりもはるかに巨大で頑丈な体軀をしている。己の自重で押し潰されぬように発達した骨格。人々は彼らを怪物>タイラント<と呼び恐れた。

人間にとって彼らは敵うことのない存在であった。その昔人類が戦ったという記録が残っているが結果は見ずとも明らかである。

森を闊歩する彼らにも多種多様な種族があり、優劣が存在した。

彼らはピラミッド型に食物連鎖を繰り返している。その頂点には王獣種という文字通りの森の王が存在し、比類無き戦闘能力を誇る。その下には順々に脅威種、中位種、劣系種と大きく分類されている。その中では獣型の爬虫類や植物型の藻類といった細かい分類がなされる。

森の中で王獣に遭遇することは皆無で、見つけることも非常に難しかった。そのため森で最も危険視されているのが脅威種だった。巨軀を有し、銃や爆発物などの既存兵器にも怯むことがない。

かつて人類が戦って敗北した相手であった。

しかし、それらタイラントよりも危険な怪物がいた可能性をリントは知っていた。少なくともこの時代には存在していないだろう生き物を……。

今、目の前に現れたのは脅威種植物型の食肉植物、オルプラントであった。

まるで、巨大な落とし穴のように葉をつけるオルプラントは、目立つその色とある条件下で発する匂いで獲物を誘う。そして穴に落ちた獲物をそこに溜まった液体で溶かし養分を吸収する。

そのため、その周辺には常にタイラントがおびき寄せられている。

今日も例外でなく、光を反射し白光に染まる青緑色の鱗に覆われた、まるで巨大な四足歩行の爬虫類であるリトワプスが二頭集まっていた。

いや、すでにオルプラントに捕縛されたリトワプスがいたため三頭であった。

ただし穴に落ちている一頭はとうに事切れていた。その身体には、抜け出そうとして出来た新しい切り傷が窺える。先ほどまでの声は



ギシツ、ミキツ、まだ一〇〇メートルほどしか、離れられていないリントの後方で突然、木の軋む音が鳴った。  
根の上に立つと反射的に後ろを振り返った。

しかし音の発信源を見上げる前に、風を切る音を伴って黒い影が降下してきた。

着地で地面が揺れ、木々がざわめく。全身に鳥肌が立った。

木の根から見下ろすようにして見えたのは、見たことのない黒い体毛と赤眼、しなやかな四肢と強靱な翼を持ったタイラントであった。

『危険レベル上の下。森のルール、人はデザート!!』

以前、ヴァンが脅威種に遭遇したときに冗談めかして言った言葉が頭に浮かんだ。

「冗談にならないって……」

ウオオオオオオオン。

その声に応えたのは獣の野太い咆哮だった。ビリビリと体が震え、心拍数が上がる。

リントは袋が空しいほど軽いことを、もはや気にしていられなかった。

汗が滲む手で枝から下がる鳶を掴み、二、三度強く引つ張り強度を確かめる。

横目で見やると、獣の四肢の鋭い爪がリトワプスの片割れをしつかりと地面に縫い付けていた。

現れた脅威種はオルプラントに見向きもせず、リトワプスを強襲していた。

もう片割れは必死にその肢体に噛み付いてはいたが、獣は気にも留めていないようだった。見もせず、助け出そうと肢に噛み付いていたリトワプスを尻尾で薙ぎ払う。

押さえつけられたリトワプスは、血を流し続けながらも必死に抵抗を続けていた。

獣はそれを一瞥すると白光りする牙を突き立てた。ひきつれた叫び声が短く響き、途絶えた。

顔を上げた黒毛の獣が一瞬こちらを向いたが、すぐに食事を再開する。

見つかったかのような錯覚。背中には脂汗が滲んでいた。血が騒いでいるかのように鼓動が耳元で聞こえる。

どうやらこちらには気付かなかったみたいだ。

それを確認すると、リントはもう振り返らずいつきに根を下り、野営地の方角へ走った

木々の中に姿を溶け込ませたその背後で、咆哮が森を揺らしていた。

それから一刻して……。

やっとのことで野営地に辿り着くと、すでに太陽は日の出と反対

に傾き、目の前にはしかめ面が待っていた。

「おせーんだよ！どこまで行ってたんだよ！！」

半ば覚悟していた罵声が飛んでくる。

いきなり食料探しに行かされて、危険な目に遭わされたただけ  
ど。

リントはこめかみをひくつかせつつも、なるべく穏便に済まそう  
と表情を取り繕った。

「いや、ごめん。ちょっと遠くまで行ったら、遅れちゃって……」

と申し訳なさそうに言ってみせる。

「ちょっと遠くだ？ 日は傾いてんぞ！」

ヴァンは空腹のため少しキレ気味だった。明らかに業を煮やした  
顔で睨みつけてくる。

「ああ、いい夕日だね。」

間髪いれずリントは返した。その表情は笑顔を浮かべてはいるが、  
内心は怒り心頭である。外套の袖から覗く拳を痛いほど握り締める。

「ここからじゃ見えないけどな！！」

すかさずヴァンが吼え、それまで必死に耐えていたリントも我慢  
の限界だった。

「こつちだつて、好きで行ったわけじゃないし、脅威種に見つかりそうになつたし、命がけだつたんだよ！！ てゆうかなんだよ、喰いもんじゃないから探して来いって……少なかつたんなら早く言えよ！」

声を荒げヴァンを見据える。ギスギスした空気が場に漂う。

「知るかそんなこと。俺は料理当番じゃねーし。しかもなんだよ袋しぼんだままじゃねーか！！」

ヴァンも負けじと反論し、両者共に一步も引かない様子だった。それを傍から見ていたペールが仲立ちに入った。

「リント、ヴァン、あんま騒ぐなよ。これでやっと飯にありつけるんだからな」

『もともとの原因は食料当番の（てめー・あんた）だろ！！』

二人の声が見事にシンクロし、ペールは困り顔を浮かべ苦笑した。

リントがテントで服を着替え、外に顔を出すと野営地から見える空がはつきりと、茜色に染まりだしていた。

ガチャ、ガタ、ガタ。

ペールがヴァンを連れて遅い昼食……いや、夕飯作りを始めていた。

「……なんだコレ？ 少ないうえに、やけに地味なモンばつかじゃねーか」

どうやらヴァンが食料袋に取り掛かったようだった。時折、これ

は喰えるのか、などと声が聞こえる。  
その度にむっとし、眉をひそめる。

しかし、あれで何が出来るのだろうかなどと、思うのは罪だろうか。

一人何もせずにいるのは落ち着かず、厚布の砂っぽい外套を羽織り二人の元へと向かった。

森の開けたこの場所を吹き抜ける風に木々はざわめき、野営地に茂る草がなびく。

リントは風の心地よい涼しさを感じ、今日も生きていることを実感した。

かつての人間、猿人は大きく分けて、獣人>ヴィースト<と風人>フューマ<という人型に分けられた。

その理由は、土地開発のために体の丈夫な獣人が、かつての形を残したいがために風人が創られたという程度のものであったのかもしれない。

しかし、かつての人間ではこの世界ではまともに生活することは出来なかっただろう。

一部沙漠地域や凍土地域を除き、大陸の実に85%を森が占め、空气中の酸素濃度は濃くなった。

大きく変化した環境で生きるために、人は変わることを余儀なくされたのだ。

そして、外見に様々な生物的特徴を持つペールもヴァンも、獣人というカテゴリに分類されている。獣人といってもその中で、細かい種族分けが為されている。

けれども、見た目こそ風人であるリントは、そのどちらとも言え

なかった。

漆黒の瞳、色白の皮膚、耳も華奢な体つきも、どれをとっても風人といえるにもかかわらず……。

誰にもいえない秘密。言えば、この日常を壊してしまう秘密。

それを隠すようにリントはフードを深々と被った。

茸と果実を一緒に炒めた存外まともな夕食を取ると、ヴァンは寝てしまい、ペールは周囲の見回りに行った。

今、リントは一人、焚き火の前に姿勢を崩し刀の手入れをしている。黒一色の質素な鞘から伸びる堅木の柄を引き抜くと、黒く光を放つ鋼の刀身が顔を出す。それをボロボロに擦れた布で丹念に拭き、刃を磨いていく。

ちゃんと手入れをしてあげたいけど……。

こんな森の奥では上質な油も手に入るわけがなく、最低限錆びないようにするのが限界だった。

一連の動作を終え、刀を腰に指すと膝を抱えこみ、焚き火を凝視した。

目の前で煽られた炎が揺らめく。森が開けたこの場所は、風が流れ込み、夜になると少し肌寒く感じさせる。

リントは目の前の炎から目を逸らすと、首に掛けたペンダントを取り出し、それを掌の上で転がした。その先に付いているものは、正六角柱の透明な鉱石だった。表面にいくつもの凹凸があり、まるで何か鍵のようであった。

これにくれた人はもういない。

『ふりかえるな。辛い時は笑ってみせろ』

それが最後の教え。八年間共に過ごし、本当の父親のように接してくれた。

僕に剣術も知識も、生きる術も教えてくれたあの人はいない。結局最後まであの人がなんの仕事をしていたのか、家族はいたのか、聞きたいことは聞けなかった。いつも一緒にいて、おどけては笑わせてくれた。辛い時も……。

形見は、このペンダントと腰に差した簡素な小太刀だけだった。バロック・ディア・ソニエ。その名しか知らなかった。

ふと、背後に人の気配を感じ振り返った。見ればペールが近づいてくるところだった。

「見回りは異常なしだ。ただ空気が冷たく感じられるようになったからな、冬も近くなってきたみたいだ。注意するに越したことは無い」

ハスキーがかった声で言うと、ペールは隣に腰を下ろし、手を炎にかざす。

冬が近づけば、森の食料となるものが少なくなる。いくらここが木々で囲まれ、中獣種であつても入って来れないように油断は禁物であつた。過去に一度、木々をなぎ倒してまで侵入してきたこともあつた。

「俺たちも食料を蓄え始めないとな。冬に今日みたいなことをして

かしたら、森でミイラにでもなっちまう」

ペールは白い歯をこぼして言った。

「まあ、今日の件は誰かさんが、事前に報告しとけば回避できたんだけどなあ」

そうやって横を見やると、ペールが顔の前で手を合わせ「ほんと、悪かった」と詫びた。

すっかり暗く染まった空には、無数に星が輝いていた。

ふあゝあ、反射的に欠伸がでる。

ペールにそろそろ寝ると告げるとリントは腰を上げた。ペールも「俺も寝るかな」といって一緒に立ち上がる。

テントに入って寝床に潜り込むと、遠くで鳴き声が聞こえた。夜行性の住人たちが活動を始めたらしい。

あちこちで獣の遠吠えや虫たちの鳴き声が聞こえる。

それらはまるで子守唄のように鼓膜を揺らした。

眠りに落ちる直前、今日初めて見た黒毛の獣の姿がリントの脳裏をかすめていった。

### 終わる平穩3

「くうつ、ふあ〜」

ぐつと、背を伸ばして欠伸をする。

リントは上体を起こしテントから顔を覗かせる。見上げれば、空は白んでいた。

夜明けの涼しさが心地く身体に沁みる。

今の季節は仲秋に差し掛かったあたり、森に覆われた後も温帯に属するこの島には四季が残っていた。

「ふあ〜ああ、木の葉の色が褪せてきたよな」

ヴァンが目を擦りながら、薪を集めている。主にヴァンは、材木集め担当に任命されていた。

ヴァンに料理を任せれば、いかに前衛的な料理を出してくれることだろうか。

ちなみにリントは、撃退要員であった。

近づいた怪物退治を任されるが多かった。

「褪せてるじゃなくて紅葉が始まったんだ、趣がでてきたとでも言え」

すぐ横から声が飛ぶ。

見れば、ペールが起きたところだった。欠伸をかみ殺し、寝床から這い出てくる。

寝起きのペールは髪を束ねていないため、別人に変貌を遂げる。リントにとっては悔しいほどに、ペールの顔立ちは整っている。

女性にモテる美青年であった。

「おはよう、ペール」

「おう、おはよう、リント」

「ヴァンはつと、薪集めの仕事をやってくれるのか……んじゃ飯の準備でもするか」

上半身を左右に伸ばしたペールは辺りを見渡し、冬も近いなど呟いた。

リントにとって、今年で四年目になる森での冬越えであった。

それまで街で過ごしていたリントにとって、森での生活は毎日が冒険のようだった。だがそれも最初のうちだけ、そんな冒険の終わりはバロツクの死と共にやって来た。

バロツクが逝った年、リントは一人雪が降り積もった白銀の季節を越えた。

寒さに凍え、食料だけでなく人の温かさにも飢えた日々……毎日がリントにとっては地獄に感じられた。

「ヴァン、それが終わったら食料見つけに行つてこい」

「リントが暇してんじゃん。俺は一生懸命に枝集めだから」

「一生懸命って……」

ヴァンとペールのやり取りを見て笑みをこぼす。

今では、どんなに寒くとも心だけは温かくなれる。それが嬉しく感じていた。

願わくば、この平穏が続くことを切に祈っていた。

「食料を蓄えだしておかないとな……昨日までみたいはその日凌ぎじゃ、冬を越せないからな」

ましなモノを喰いたいと、せつつくヴァンを黙らせるのに一苦勞した。

結局昨日残った茸や木の実を調理しながら、ペールが憂愁の色が濃い顔で言った。

「たく、冬なんて来なきやいいんだ。春、夏、秋で十分じゃねーか」

ヴァンが口を尖らせる。手に持った木の枝を細かく折り曲げる。ポキッポキッと、軽やかな音が鳴る。

「四季じゃなくて三季か……なんか物足りないな」

そう零して笑うペール、リントも釣られて笑顔になる。

それからヴァンが、今日も飯が地味だなどと騒ぎ、今日は始まっていく。

簡単な朝食……を済ますと、今日は皆で食料探しに行くことになった。ヴァンが行くことを拒み、ならばとリントに声が掛かるとヴァンが却下させたためだった。

生活の拠点にしている場所は、周りを隙間無く木々が囲っているような場所で、生物が全く入り込んでこないものの、周辺には食料となるものが皆無だった。

冬も近くなり、今のうちに木の実や、干し肉など蓄えられるもの

は蓄えておかないとならなかった。昨日を冬に繰り返すことは禁物であった。

食糧不足はかなり死活的な問題である。にもかかわらず三人で行動することはほとんどないために、どこか遠足に行くみたいな雰囲気になっていた。

「なあ、ペール。今日は河にでもいかねえ？」

何か期待するように、ヴァンが尋ねた。

「そうだな。この時期ならちようど戻ってくる頃だな。よし、今日は河を中心に食料集めをするか」

目を輝かせたヴァンを一目見るなり、その心中を理解したペールは提案を承諾した。

「え……………」

その横でリントは無表情に凍りついた。

そんな様子には気付かないように、二人は出発の準備を始めていた。石になったままのリントを置いてすぐに準備が整う。

「よし、しゅっぱーっ!!」

ヴァンの威勢のいい掛け声と共に一行は、河を目指した。

鼻歌を歌い軽やかに道を進むヴァンとは裏腹に、リントの表情には翳りがあった。

河かあ……はあー。

去年の記憶が胸をかすめ、心の中で溜息をついた。ヴァンが河に行きたがる理由はリントにもすぐ分かった。

秋になると産卵のために河を上る生物がいるのだ。かつて河に生息した魚類の巨大版にあたるその生き物は、サーモスと呼ばれ秋の味覚として知られている。サーモスは回帰性が強く、毎年多くが母川に遡上してくる。それは秋の風物詩としても知られていた。

しかし、リントにとってはあまり歓迎したくない相手であった。去年、人生初めてのサーモスとの対面は最悪だった。ヴァンにされるがままにして地獄を体験した。

浮き足立つヴァンとは対照的に、リントはずしりと重く鉛のような足を引きずるようにして先を進む。

三人は絡みあった根の道を進んでいく。その途中、森のいたるところで秋が感じられた。

「へえー、だいぶ紅葉が進んでいるみたいだ」

憂鬱を忘れ、リントは驚きの声を上げた。昨日は食料探しに必死で、全く気付かなかった。

「そうだな。早くしないと、森の住人に全部喰いもん持ってかれちゃうな」

そういつてすぐ横を進むペールが笑う。片手には肩に担ぐようにして長い木の棒が握られている。それをどうするのか尋ねようと口を開きかける。

「おい、河が見えたぞ」

ヴァンの声で前に向き直る。

上機嫌のヴァンは二人のだいぶ先を進んでいた。振り返り手を振る顔には満面の笑みが浮かんでいる。

リントとペールは苦笑しつつ、歩みを速めた。

二人してヴァンが立つ所まで辿り着くと、川幅が三〇メートルはありそうな雄大な河が広がっていた。澄んだ透明な水で、川底までも見渡せる。

しかし、その河で黒い何か巨大なものが水面を盛り上げて進んでいた。水の透明さでいつそう黒く映る。

ざっと一望すればいくつも、河を上っていく影が見て取れた。

その正体がヴァンが待ち望んでいるサーモスだった。時折、ヒレで掻かれた水が水滴となって飛ぶ。

サーモスの身は、秋の味覚と言われるだけあって脂が乗り、生でも焼いても美味。そして、その身を干して干物にしておけば保存も利く。

ただ、この森には高性能なつり道具は存在しない。

そして、サーモスも例外ではなく数メートル級の大魚だ。

捕まえるには素手にしろ、道具を作るにしても一筋縄にはいかない。

目の前を過ぎていく水面の山を見ていると、リントの憂鬱に拍車がかかる。

今年ももしかしたら……。リントの中でヴァンへの疑いが強くなる。

それに追い討ちを掛けるように先ほどからヴァンが意味ありげな視線を寄越していた。

ふっ、ふっははは、二度も同じ手が通用すると思うなよ。

リントの心の中にまるで復讐心に燃える悪魔が目覚め、腹黒く染め出す。

去年、ヴァンは何も知らなかったリントを縛り上げ、餌にしておびき寄せるといふ人道から外れた方法で見事サーモスを捕らえてみせた。その過程を傍から見た人はまさに阿鼻叫喚の図であると思っただことだろう。

味をしめたヴァンは、今年も同じ手をおうと考えているのかもしれない。いや、あの顔は考えている顔だった。

「絶対に嫌だ」

「いやまだ何も言っただけ」

突然のリントの拒否姿勢に、ヴァンは戸惑いの色を浮かべた。

「いきなりどうしたんだよ。俺が何かしたか？」

「何かしようと企んでない？ まさかとは思っけど、今年も僕を餌にしようなんて考えてないよね？」

黒い笑みを貼り付け、ヴァンを見やる。

ヴァンは明らかな動揺を示し、頬を掻きながら「そんなことするハズねーじゃん」と言った。その視線は泳ぎ、どこか余所を見ている。

「……………」

リントは懐から、どこから持ってきたのか蔦を取り出すと、素早い身のこなしでヴァンを縛り上げた。

ヴァンは抵抗する間もなく地面に転がされる。

「リント、俺が悪かった。去年のは出来心だったんだ。今年もいけるかもとは考えていたけど、改心します！！ だから許してくれ！！」

悲痛な声を上げるヴァンに示される答えは「許すから餌になって、報復の意思表示だった。

リントが目を光らせてヴァンに近づく。ヴァンは必死に身をよじり抜け出そうとするも、蔦は緩む気配を見せない。どうやったらこゝも固く縛れるのか不思議なほどである。

「<sup>かじ</sup>齧られないように上手くやるから」

「待った、待った！！ ホントに待って！！」

『そんなことはするなよリント』

青くなるヴァンに救いの手を差し出したのは、一人河の様子を確かめに行ったペールだった。

リントは訝しそうに眉をひそめペールに視線を送る。

ペールは去年のヴァンの横暴を不問にし黙認していたのだった。

リントにとってはヴァンと同罪も当然だった。

「今年はこれを使ってみようかと思う」

リントの視線を意に介さずペールが見せたのは、彼がここまで運んできた木の棒だった。しかし、いつのまにかその先が細く尖り、槍のような形になっている。

「……野蛮族ごっこ？」

リントはそう口に出す。全く予想が付かない。……槍投げでもするのだろうかなどと考える。

「こいつを銚として使っただよ」

困惑顔のリントに苦笑を浮かべたペールが告げ、二人を連れてサームスに挑んでいった。

その結果がどうであれ、河に来た時点でもはや平穏な日々が終わりが決まっていたとは知らずに。

## 終わる平穩 4

西日が森を朱く染め出した中、岸边に座る三人の姿があった。その横では陸に揚げられたサーモスが一匹、日の光を反射しながら横になっていた。

「『『疲れた……』』」

三人の口をついて出た言葉は、その一言だった。

サーモスを銚で捕まえる方法は、案外うまくいくように思われた。欲をだし大物に目をつけたヴァンが、それを突き刺すまでは……。

何でヴァンが銚を使ってるんだよとか、いきなり大物なんか狙うなよなどと言う暇はなかった。息もつかせぬ早業でヴァンは銚を突きつけていたのだった。

その結果サーモスが予想以上の抵抗を見せ、結局三人がかりで押さえ込んで陸に揚げたときには、皆疲労で座り込んでしまった。

この場に重々しい空気が流れる。

「まあ、一匹でも捕まえられたから上出来だろ。しかも大物だ」

場の空気に耐え切れなくなったヴァンが立ち上がった。疲労の色が濃い顔に無理やり笑みを作る。

そうだ、そうだと口々に言うと二人も重い腰を上げて、巨大なサーモスの解体作業に着手しようとした。サーモスの巨体を運ぶには、小さく分けなければ重過ぎるためだ。

リントが大きく伸びをする隣で、ペールが何気なく向こう岸を見

やった。瞬時に目を睜り、『身を隠せ！』と指示を飛ばし木陰に走る。リントとヴァンも条件反射的に根の後ろに身を潜めた。

ペールの視線は対岸に広がる深い森から離れず、眦は鋭く細められていた。ペールの直感が全員に何か異変を訴えていた。森での生活でそれに気付かなければ死に直結する。

何かがいる、何か大きな奴が……正体は掴めずとも全員がそう感じていた。

リントも根に身を隠し聴覚で周囲を探った。少なくともリントの聴覚はこの三人の中で卓越していた。

だが、耳を澄まして河で水が流れる音しか聞こえてこない。

ペールにどうしたのかと尋ねようと腰を浮かせた、同時に明らかにサーモスではない何か河を進む音が響き、場の沈黙を破った。

水の中を進む音がザバツザバツ、と濁音を上げている。

リントはペールが視線を送る先を確かめようと、根の端から顔を覗かせた。その黒い瞳に映り込んだのは、昨日目撃した黒毛の獣であった。日の光を吸収しているかのような漆黒の色に息をのむ。

獣は河の真ん中で一旦立ち止まると、狗のような細長い顔を水面に向けた。

河から伸びる四肢の間をサーモスが通り抜け、悠々と泳ぎ去っていた。

数秒間、水面を注視した獣は目にも止まらんぬ速さで、ちょうど鼻先に来たサーモスを鋭い歯牙で捕らえた。

バシツバシツ、逃れようとサーモスが暴れるも、その拘束は微塵も弛む気配をみせない。小さいものでも男手三人は必要なサーモスの身体が軽々と持ち上げられる。

そのヒレから滴る雫が水面にいくつもの波紋を作った。

「すげえー」

リントの隣でヴァンが感嘆の声を上げる。  
しかし、依然ペールは険しい表情を浮かべ獸を見ていた。

「昨日森で見た奴だよ」

リントは誰に話しかけた訳でもなく、声を発した。無意識のうちに根にかけた手には力がこもっていた。

「俺は今日初めて見た。あんなのがこの森にいたのかよ」

ヴァンがリントに答えた。獸に向けられている視線がキラキラと輝いているのは気のせいであろうか。

リントは目の錯覚だとして触れずにおいた。

「以前……森での生活を始める前に……見たことがある……」

急にペールは歯切れの悪い口調で言った。

歯切りをし、握りこぶしを作っている。その視線は仇敵（あいつ）に向けられたような、抜き身の刀身のような鋭さを伴っていた。

「はあ？ それって、森の外でアレを見たって事かよ」

ヴァンが今度は驚きの声を上げ、視線をペールに戻す。

「ああそつだ。しかもある街の中で……俺の記憶が確かなら、あの獸は皇国軍の」

『バイル！ そろそろ戻るぞー！』

突然の男の声にペールは口を閉ざした。

対岸を見やれば、獣と同じ漆黒の服装に身を包んだ男が、木々の間から姿を現したところだった。

しかし遠目では男の出で立ちの細部までは分かりかねた。

だが、それをみた瞬間ペールは息をのみ、2人にこの場から離れるよう急かした。

ヴァンがサーモスを置いて行けないと言い張ったが、ペールに鋭く睨みを利かせられると渋々指示に従った。

「ペール、何を知ってるの？」

疑問を口にしたリントに対し、「ヴィンセルトの兵士だ……」そうペールは呟いた。

三人は身を翻し、森の奥を目指した。

またこの感覚だ。

リントは血が騒ぐような動悸に戸惑っていた。それはまるで本能が戦いを求めているようであった。

ガールルルルルルル。

突然、空気を震わし、獣のうなり声が響き渡る。

後ろを振り向けば、黒い影が大きな水しぶきを上げて、宙に浮いたところだった。

ペールが『二人とも急げ』と鼓舞する。それもすぐに焦る声に変わった。

「ヴァン、やめろー！！」

ペールが止めに入るもヴァンはそれをかわし、目の前を横切る。その手には、愛用のスリングショットが握られていた。走りながらヴァンはゴムを目一杯引き絞った。その中央には小石がセットされている。

「このままじゃ追いつかれちまうだろ！！」

ヴァンは川岸まで戻ると立ち止まり、向かってくる影に狙いを定める。

ヒュウツ、風を切る音と同時に石が飛ばされる。

リントの目は、石が見事命中した瞬間を捉えた。しかし獣は全く怯む気配を見せず、その距離を詰めてくる。

「くそっ、くそっ」

ヴァンは休まず、放ち続ける。無駄であろうとなかろうと、その手を休めるつもりはなかった。

注意を自分に引き付けて、二人を逃がそうと決意していた。

ヴァンのバカやる。

リントは身を翻し、ヴァンの元へ走った。根を飛び越えて、最短ルートを突っ切る。

途中、ペールの静止の音が掛かったが無視した。頬や手の甲に無数の切り傷が出来るのも気に留めなかった。必死の抵抗を続ける友

を助きたい一心であった。

間に合え!!

未だに石を撃ち続けるヴァンに飛びかかり、一緒に地面を転がる。直後、背後でズザザザと地響きが鳴る。

一瞬で訪れる静寂。

顔を上げて見れば、先ほどまでヴァンが立っていた場所がもうもうと土煙を上げ、深々と削り取られていた。

ヴァンを立ち上げらせ、周囲を警戒するリントの耳に声が飛び込んできた。咄嗟に身構え、相手を待った。

「なんだ？ 子供か……」

落ち着いた低めの声だった。見れば木々の間から黒毛の獣に跨った人間が現れたところだった。

狐色の髪をした男。先ほど対岸でこの獣をバイルと呼んだ人物であった。

身に纏った黒装束。腰に佩いた一振りの軍刀。

不思議であったのは、男は右手にのみ純白の手袋を嵌めていたことだった。

「てつきり、王獣にでも出くわしたのかと思ったんだがな。子供には用はない」

興味を失くしたように吐き捨て、男は何事もなかったかのようにこの場を後にしようと獣に指示をする。

しかし獣は未だ牙を剥き出し、睨みを利かせていた。その視線は

ヴァンではなくリントに向けられている。

男は何か思い当たった顔をして口を開いた。

「バイル、確かなのか？」

男の声に答えるように、獣は短くうなり声を上げた。男の口からは自然と笑みが漏れ、その眸がリントを捉えた。リントは全身に戦慄が走ったように感じた。体感時間が引き延ばされたように遅緩ちかんしていた。

「こんなところで思いがけないシロモノにであつたものだ」

「まさか人型生体兵器の血を流す、呪ドミナントわれた子供に遭遇するとはなチルドレン」

男の言葉を聞いた瞬間、リントは見ていた景色が暗転し身体が石のように固まった。耳鳴りがひどく、心臓の音がやけに近く聞こえる。呼吸することさえ難しく感じた。

その横ではヴァンがひどく動揺した様子を見せていた。

「なんだよそれ。なあ、リント。あんな奴が言ってる事なんて嘘だろ？ お前が呪われた子供だなんて嘘なんだろ！！」

ヴァンが興奮気味に問いただす。気が動転したようにリントに詰め寄り、その手でリントの両肩を揺さぶる。

「……………」

それ対してリントは沈黙するしか出来なかつた。

「嘘ではないさ。バイルは対王獣用に造られた戦闘獣だ。本能的に敵を見つげ出す。王獣の遺伝子を組み込まれたパーパメントの血を

受け継ぐ子供も、例外ではないのさ」

「くっ」

突然、ヴァンはリントを置いて走り出し、森の中へと消えてしまった。リントは喪失感がじわりとこみ上げるのに、奥歯を噛み締めた。

「おや、内輪もめか？ まあいいさ、用があるのは君だけだからな。……どうやら私の部下が集まってきたみたいだ。」

見渡せば、空から黒い点がいくつも近づいてくるのが確認出来た。この場所は開けた岸边であるため、向こうからも視認されていることだろう。

「無駄な抵抗はしないでもらおうか」

そういうと男は獣の背から飛び降り、近づいてくる。片手には抜き身の剣が握られ、冷たく光を放っている。

男に射るような眼差しを向けながら、リントは懐に手を伸ばし小太刀の柄に触れた。

バロツク。僕は人にはなれないのかな。

二度、三度の瞬きの後、固く閉じた眸を開けると蒼い眼光が放たれる。

咄嗟に身を引いた男が指を鳴らした。

刹那、視界の隅に黒い影が映りこんだ。咄嗟に鞘ごと刀を抜き、

身体と影との間に挟む。

瞬くまもなく骨を軋ませ、脳を激しく揺らす衝撃が走った。獣の強靱な尻尾がリントを弾いていた。

「があっ」

短く呻き声を上げ、リントの肢体は宙に浮く。

ザアアアア。

仰向けに倒され、その首に下げているペンダントが露わになる。

「残念だが、能力は使わせんよ」

男が歩を進めるほどに、ザアッザアッと音が大きく迫る。

男は充分リントに近づくと、そのペンダントに視線を落とした。その目が見開かれ、発せられる声に熱がこもる。

「まさか本来の目標とは別に、二つも失われた科学が手に入るとは

……」

「この石も……ロストギミックだっけ？」

「おや？ 知らずに持っていたのか。愚かな子供だ」

失笑しながら男はジャラリと鳴る枷を取り出した。その手がだらりと投げ出された腕に伸ばされる。

「おいおい、俺の兄弟を汚い手で触るなよ」

森の中から突然声が響いた。

ぼうつとする意識の中、声の方に顔を向けた。その視線の先にはよく知った竜人の男が懔然として立っていた。

「くらっときな!!」

ペールは手にした包みをこちらに投げつけた。地面に当たったそれは、中の灰を撒き散らし、周囲を白濁はくたくさせる。

ペール特製の緊急回避爆弾だった。主な用途は脅威種から逃げるための離脱用である。それ故強力に作られていた。

「くそ！ 何も見えん」

男の悪態が響く。その姿は完全に真っ白な世界に飲み込まれている。

「リント大丈夫か。俺に掴まっとけよ」

不意に耳元で声がし引き起こされた。ペールの偉丈夫な身体が見えた。リントは何とか肩を組み、引きづられるようにしてその場から逃げ出す。

「バイル！ はばたいて灰を吹き飛ばせ！」

背後で男の怒声と獣のくぐもった呻き声が続いていた。

## 終わる平穩5

「まったく、二人とも無茶すぎだったぞ」

ペールはリントを責める口調で言った。逃げる途中解けた髪をかき上げ、座り込んだリントを見下ろしていた。

二人は無事に野営地まで逃げおおせていた。ただその場にはヴァンの姿は見当たらない。

既に暮れかかった日の茜色が、常に木々を拾い集めていたヴァンの存在を思い出させる。

リントがどこか心ここにあらずといった様子なのに気付くと、ペールは表情を幾分和らげて切り出した。

「ヴァンのことなら心配するな。あいつが呪われた子供を嫌悪するにも相応の理由があるんだ。それに、きつと今頃、お前を見捨てたことを後悔してるだろうしな」

「……ペールは別に怖がらないんだ。僕が『呪われた血』を流していることに」

リントは重い口を開いた。自分自身が発した声が酷く冷たく聞こえ驚く。

「覚えてないか？ 森で初めて遇ったとき、お前はその力を使っただろ」

そう言われてリントは、どこか隅に追いやっていた記憶を思い返した。

確か一人冬を越え、春になった森を彷徨っていたときだった。飢えていたため、森で出くわしたペールを森の住人だと錯覚し、力を使ったのだった。

「だからな、詳しくは知らなかったし……別に知ろうともしなかったが、お前の事情は把握していた」

深く頷いたペールは懐から折りたたまれ、黄色く変色した紙を取り出した。

目の前で広げられたその紙は一枚の大陸図であった。

「単刀直入にいう。お前はこの森から離れる。どこか人の多い街に向かうんだ」

ペールはそう告げて、その大きな手でリントの髪を掻き乱した。

「軍に目をつけられたなら、この場に留まるのは得策じゃない。まして奴らが求めているものが二つも揃っているならなおさら……」

ペールは視線を落とし、リントが首に下げているペンダントを見つめた。口元に手を運び、沈思する素振りをした。

「それがなんなのかは知らないが、奴らが求めるロストギミックの関係物なんだろう。いいか、街へ辿り着いたら、そのペンダントについて調べる。それに世界情勢について。何故軍がこんなところにいるのかが気がかりだ」

視線をリントに戻したペールが、その手に地図を握らせた。その目に宿る決意をリントは理解した。

この森での共同生活の終わりが来たのだ。

「その丸印がついている街に向かえ。ここから少しばかり遠いが、国境を越えればあの軍もなかなか手が出せないはずだ」

リントは「俺のお墨付きだ」と続けた。ペールの顔に翳<sup>かげ</sup>が見えた気がした。

「でも歩いて向かう途中で、軍に捕まる可能性は？」  
「誰も歩いていけとは言っていないさ」

不敵に笑いながらそう告げたペールは、リントを連れて準備に取り掛かった。

夜、森は無明の闇が支配し、森の住人達が餌を求め活発に徘徊し始める。そんな森に人間が生き長らえて、生活することはほぼ不可能。森に生活拠点を置けることは奇跡であった。

そんな人間にとって地獄ともいえる環境で、夜空を明るく染める場所があった。

森が切り開かれ、倒された巨木がバリケードのように周りを囲い、その中央では大きく炎が燃え上がって火花を散らしている。いくつにもテントが連なって建ち、男達がその中と外を出入りしている。

そこはまるで軍の駐屯所であった。いくつも並んだ鍋からは、湯気がもうもうと上がっている。男たちが皿を持って鍋の前に列を作り、その中身を分けてもらっている。

そんな様子を観察する二つの影が森の闇に潜んでいた。

「奴らが寝静まったら、あの宿舎に繋がられているハコビドリを拝借する。あの生き物は人を乗せたまま何百キロも飛べるからな。それに、どうやらあの黒い獣はいないみたいだ」

そう男の声が隣の一回り小さな影に告げる。

「了解」

小さな影は声に出さず右手で丸を作り、男の声に答えた。

それからしばらくして男たちの喧騒けんそうが止み、おのおのがテントに入ると夜の闇がその空間を満たした。

月夜の下、静まった駐屯所を地面に伸びる二つの影が、音を立てずに横断していく。途中、影が二手に分かれた。

一つは高床式の建物に辿り着くと、音を立てず登っていく。

そして、もう一つの影がハコビドリを繋いだ宿舎に辿り着いた。人影がハコビドリに鞍を乗せようと手を掛けると、けたたましく泣き声が発せられた。その声に目を覚ました兵士たちが武器を片手にテントから飛び出してくる。

「賊だ！ 捕らえる！」

よく通った大声が響き、次々と明かりが灯される。その光が照らし出したのは、鱗に覆われた男と黒髪の少年だった。

「ちっ、まずいな。リント、早くしろ」

そう齒軋りするペールは、膨れた袋を担ぎ走ってくる少年を見つけた。その背中を五人、筋骨隆々（きんこつりゅうりゅう）の獣人の兵士たちが追いかけている。

「リント！ こっちだ！」

そう言うと、ペールはリントの後方に向かって包みを投げる。包みは男に当たって、白い灰を撒き散らす。

「ぎゃあっ」男が悲鳴を上げ、何かがぶつかり合うような鈍い音が響く。

「言われたとおりに……食料を持ってきたよ……」

ペールの元にたどり着くと、リントは息を切らしながらそう告げた。

「よし早くこいつに乗るんだ！ 鞍は乗せてある」

「どうしてこの鳥のことを？」

「経験者は語るんだよ。まあ、今回はちと失敗したが……ほら急げ」

急かされるままにハコビドリの背に跨る。そこで気付いた。

「ペールはどうするんだよ!？」

ペールは口に笑みを浮かべ、

「ヴァンを連れて後から追いかけるさ。あとでヴァンには雑用係にでも転属してもらおうか」そういってリントを乗せたハコビドリの縄を解く。

「西に向かえ！ 手綱を引けばこいつは従ってくれる」

リントの眼下ではペールがどんどん小さくなり、周囲の明かりがどんどん近づく。

下唇をきつく噛み、言われたとおり手綱を引き、西へ向かう。風を切ってハコビドリは飛んだ。

甲高い泣き声が聞こえ、振り返れば追ってが迫ってきていた。バイルと呼ばれた黒い獣がいないのは幸いだったが、相手の軍人はハコビドリの扱いに慣れ、どんどん間を縮めてくる。

迎え撃とうと、柄に手を伸ばすリントの耳にヒュウ、ヒュウ、と風を切る音が聞こえた。と同時に後ろで悲鳴が上がり、男がハコビドリの背から落ちかけていた。

はっとし、リントは、夜の森に見慣れた巻き角の少年の姿を探したが見つからなかった。目の端に涙が浮かび、慌てて滲んだ視界を拭う。

追っ手を引き離し、見えなくなるまで急いだ。

一人の少年は四年間過ごした森を後にし、西へ西へと飛んだ。

## 巡る日常、染まる心

「やっとだ。やっと見えた」

四日以上西へと飛んだリントは、眼下に真っ白な外壁が周囲を囲っている街を見つけた。外壁の厚さも高さも人が粒に見えるほどに大きい。視界に全ての街の全貌は収まりきらない。

リントは近くの森にハコビドリを降り立たせた。

街の外にいた頬に爪痕を残す商人と交渉し、袋いっぱい硬貨とハコビドリを取引すると街の門を潜り抜けた。外壁は全て鉱石質な素材で造られていた。触れるとひんやりと冷たさが伝わる。その門を抜け、街に入ったリントはその喧騒に驚かされた。

街では家々の壁に『翠森祭』とかかれたポスターが貼られ、屋台が通りの両端に所狭しと並べられている。辺りには肉の焼ける香ばしい匂いや、香辛料の香り、何か甘ったるい匂いなどが漂っている。通りの両側からは威勢のいい掛け声が飛び交い、人込みが延々と続いている。どこもかしこも精彩を放っていた。

どうやら今日この街では年に一度の祭が行われているらしかった。

リントは本来の目的を置いて、祭の雰囲気を楽しんだ。リントにとって人の住む街に来るのは四年ぶりだった。懐かしさに胸を躍らせ、屋台を歩き渡り両手を食べ物で塞ぐ。リントは久しぶりのご馳走に歓喜溢れんばかりに喜んだ。

お腹が満たされた頃にリントはペールに言われたことを思い出し、

とりあえず街の中心の方角へ足を向けた。

「ん、何だろ。アレ」

歩を進めていくと前方に屋台を囲むようにして人だかりが出来ていた。リントは興味を持ちつつ、本来の目的の遂行を優先しその前を通りすぎる。

「その君！ 止まって食べていきなさい。年に一度しか食べれないビュウの実のゼリーよ。これを食べれば一年間風邪を引かずにいられるわよ！」

リントが威勢のいい声に振り向けば、とてつもなく目立つ色がその眸に映る。台にでも乗っているのか、毒々しい色彩の服を着込んだ女性が見下ろすようにこちらに手を振っていた。

近づこうとしたリントの前で人だかりが二手に分かれた。同時に隠れていた店の前で起きている惨劇が目に飛び込み、足を止めた。

「重症者だ！ 早く気付け薬をもってこい」

「キヤー、あなた死んじゃ駄目よ」

悲鳴と怒声が入り乱れている。

「……………」

リントは足早にこの場から離れようとした。がしっ！ ふいに骨が軋むほど右腕を強く掴まれた。

見れば先ほど屋台にいたおばさ…………いや、女装したおっさんだった。

「なんでしょうか……あの、手をはな、うわっ」

最後まで言えず、リントは屋台の前までひきづられていった。

「あらあらあら、よく見ればかわいい坊ちゃんじゃない。ふふふ、これを食べれば健康そのもの、かわいさにも磨きがかかるわよ」

いやいやいや、リントは首を全力で横に振る。

「かわいくなりたくないし！！ てか、食べたなら病人になるって！！」と心の中で叫ぶ。

この屋台一帯での惨状の原因が、そのゼリーであるのは間違いないかった。

半透明な黄緑色の塊が目の前で揺れる。

「怖がることないわよお。あんなの一時的で直るからあ。それにい〜デザート風だからそれほどでもないわよお」

ねっとりとした口調と、凄みを利かせた顔でおじさんが言う。ゼリーも怖い、この人の顔もとてつもなく怖い。

リントの足は岩のように固まり、その場から逃げ出せない。

おじさんは、そんなリントを屋台横に並べられたテーブルに引きずっていくと、目の前に例のゼリーを置いた。

周りから盛大な憐れみの視線が送られてくる。

うつうつ、食べるしかないのか。

意を決意して、リントは木製のスプーンを手取る。恐怖に手が震えながらも、ひとすくい口に放り込む。

「がっ……………ぐっ……………」

口に入れた途端、苦しそうに呻くとリントはテーブルに突っ伏した。

工夫すればどうにかなるといふレベルではなかった。非常に苦い。舌がひどく痺れ、麻痺しているように感じる。次第に身体も痙攣し始める。

「うっっ、うっっ、うっっ」

必死に水と言おうとするリントの口からは、亡者の声のような呻きしか出てこない。

「患者が増えたぞ！ 早く誰か水をもつてこい」

薄れていく意識の中、誰かが叫ぶのが聞こえ、リントの視界は暗転した。

それからしばらく、リントは昏睡した。

「うっ……………うっは？」

気が付き、目を開けた視界は西日で朱く染まっていた。

未だに祭りの盛況は止まず、ますます賑やかになっていくようだった。

リントは身体を起こすと自分の今の状況を確認した。口の痺れは残っているものの、気分はだいぶ良好になっている。どうやら、寝かされていたのは、例のゼリー屋の屋台のすぐ後ろのようだった。

『うとうとうう……水をくれ』 『ああああ、うわあああ……』  
……。

いまなお、店には被害者が続出中のようだ。

「目が覚めたのねえ。元気になったなら祭りを楽しんでらっしゃい」  
目覚めたリントに気付いた屋台のおじさんが詫びれもなく言う。

「毎年、恒例になってんだよ……この……店でゼリーつぶ……を  
喰って倒れるのが」

眉を潜めるリントにテーブル角で苦しそうにしていた男性が話した。どうやら、この街ではこれが常識であるらしいかった。

リントは呻き声を上げ続ける男性を見て、こんな苦しい思いを毎年しなくても……そう思わずにはいられなかった。

去る前に、リントは屋台のおじさんにどこか調べものの出来る場所はないか尋ねた。

すると、「調べるものによるけど……」といつつつ差し出された紙には《白東財団資料館》と《紋朱蝶》と書かれてあった。

2つ目の《紋朱蝶》とは何かと尋ねると、「所謂何いわずでも屋よね」と興味の薄い視線を向けられた。

お礼を言っただけで通りに戻ろうとしたリントの背中に「今日は祭りだから休業中よお。明日にしない」と声が掛かる。それじゃあと、予定を変更して宿探しに向かった。

実際のところ、リントは今日はもう休みたいと思っていた。旅は想像以上に身体的にも精神的にも疲弊させた。

そして、今。リントは、こじんまりとし、見た目がだいぶ寂れている二階建て木造建築の宿の前に立ち尽くしていた。大通りから外れ、人が並んで通れないような枝道を通って辿り着いた。

リントは屋台のおばさ……おっさんに安い宿泊場所はないかと新たに尋ね、描いてもらった地図に従ったのだった。ここまでの道はかなり人通りが少なく不安にさせられ、途中で幾度となく引き返したくもなかった。

宿を前にしても不安が解消されないリントは、オドロオドロしく入り口の扉に手を掛けていた。立て付けが悪く、ギイ、ギイーと軋む音が発せられる。そんな戸外とは裏腹に意外にも中は風情ある造りで、一面に木の香りが広がった。

呼び鈴を鳴らすと、太縁眼鏡を掛けた温厚そうな初老の男が現れた。どうやらこの宿はそこそこ客足があるようで、この主人も忙しそうにしている。

「部屋は空いてますよ。何泊の予定ですか？」

この時期の急な宿泊は珍しくもないのか、主人は丁寧に対応した。

うーん。あまり長居してもお金が足りないだろうし……どうしようか。

リントは決めあぐねていた。

「えーっと、それじゃ　すみません、これで何泊出来ますか？」

考えた末リントが出した答えは、持っているお金の四分の一を出すことだった。

「それなら三泊四日になります。……いや、五泊六日でもいいよ。うちが食事が付いてこないし、君は独り身のようだからね」

そういつて優しく微笑んだ主人はリントを部屋に案内しようとした。

「あ、ありがとうございます」

リントは主人のご厚意に素直にあやかろうと思いい、感謝を口にした。

「いやいや、私は君からお金を貰う側だし、出来て二日しか延長出来ない非力な人間だから感謝なんて……」

ホントにいい人だ、この人は。

リントは謙遜する主人に口には出さず再度感謝した。

主人は「狭いところだけど、くつろいでいてください」と告げ、リントを丁寧に二階の空き部屋に案内してくれた。

去り際に『もう浴場は使用可能だからね。ご自由にどうぞ』と言うと、主人は床を軋ませ下へ降りていった。

リントが案内された部屋は六畳ほどの広さで、日に焼けて小麦色に変色した畳が張つてある。家具はテーブルと座布団がある程度でがらんとしている。一つだけある窓から顔を覗かせると大通りの祭りの賑わいまで見渡せた。

とりあえず、風呂にでも入つてこよう。

外套をたたみ、リントは久々の入浴に与ろうと思つた。

浴場は宿一階の奥に設けられていた。リントは『男』と大きく達筆で描かれた暖簾のれんをくぐり、脱衣場へ踏み入る。

七畳程の脱衣場は壁際に小さな棚と中央には長椅子が置かれていた。

まだ他の宿泊客は祭りに出かけているのか、棚に用意された籠はどれも埋まっていなかった。

リントは手早く服を脱ぎ、風呂場への扉をスライドさせる。仄かに硫黄の匂いが立ち昇る。

どうやら源泉を引いた温泉のようである。

四席しかない木製の椅子に腰掛け、リントは全身の汚れを洗い流していく。

はあああ……………。

西へ向かっている最中では簡単な水浴び程度しかしていなかった。しばらくぶりのお湯に感激する。

リントは頭からお湯を被り、閉じた眼を明けると鏡に映つた男らしさに乏しい少年と目が合う。

少年の濡れて水が滴る髪の間から覗くのは碧眼であった。

リントは二、三度まばたきを繰り返した。もう一度見た鏡には、黒髪に同じく黒の瞳の少年がリントを見つめ返していた。踵を返し、リントは湯気を上げる湯の中に踏み込んだ。

「極楽だ~~~~~」

温泉がじわりと身体の芯まで暖めてくれる。肩まで浸かり、半無重力感を味わった。

しばらくすると、複数の人々の声が聞こえてきた。出かけていた宿泊客が帰りだしたようだ。

そろそろ出るかな。

貸しきり状態の温泉を心ゆくまで堪能し、リントは火照る身体を湯船から出した。

「はぁー、幸せだー」

そう言っつて、部屋に敷かれた布団に飛び込む。

久しぶりの風呂は、身体の疲れをだいぶ取り除いてくれた。リントはあの屋台のおじさんに初めて感謝した。布団の上を転がっていると、先ほどまでの賑やかさが和らいでいるのに気付いた。どうやら祭りは終わっていたようだ。それでも街はまだ余韻を残し、人々は談笑を続けていた。

森で毎晩聞こえていた遠吠えも羽ばたきも聞こえてこない。

人の声だけが存在する夜の街。

そのままうつ伏せに倒れていると目蓋が重くなり、リントは眠り

に落ちていった。

ねえ、バロックはどうしてこんな森の奥に行きたがったの？  
ただの気まぐれだ、気にすんな。んでも、別に悪い所じゃないだろ？

うん！！　すごいよ。毎日が冒険みたいだし。

幼い声と泣く落ち着いた声。

鬱蒼として怖ろしく、近寄りがたい空気を纏う森の中でその二人の周囲だけ、光が射しているような暖かさがあった。

恐怖を知らない屈託のない笑顔を浮かべる子供。

何に対しても動じないであろう男。

全てを飲み込んでしまったかのような、果てしなく続く深緑の樹海。

先の見えないその闇が二人の未来を暗示しているようであった。

「……………」

暗がりです身を起こした少年が窓際に歩み寄る。

どうして今頃になって夢に見たのだろう。

少年は心臓に手を当て、服に皺を刻んだ。

「バロック……………」

その声は儚く、闇に消えた。

## 巡る日常、染まる心2

はあ、はあ……はあ、はあ……くつ。

月が重たい雲に隠れた夜の街中を疾駆しゅくしていく影があった。それから発せられるのは切れ切れの呼吸音だった。

影は細い街路樹に駆け込み、その輪郭を闇にぼかす。

その後方。複数の人影が前方の影を追っていた。

「このまま追い込め」

その声に従って影は四方に散る。

先に行く影はスピードを緩めず、建物の間を縫っていく。勢いよく角を曲がると進路を塞ぐようにして、木箱がうず高く積み重ねられた影は止まらずに突っ込み、山の崩落音を響かせる。短い悲鳴がそれにシンクロする。

それでも影はすぐに散乱し埋もれた山から這い出て先を急ぐ。

だが、足を痛めたのかその動きは緩慢である。もはや、追いつかれるのは時間の問題であった。

「騒がしい……祭りは終わったはず」

鋭敏な聴覚が捉えた音で、目を覚ました一人の少年が夜の街に自身の影を濃くした。

先を急ぐ影から荒い息づかいが漏れる。未だに逃避行は継続されていた。

追っ手に見つかからないように最善の注意を払い続ける。壁伝いに進んだ先で道を遮断する壁が立ちはだかつていた。完全に行き止まりであった。影は、その場に崩れるように座り込む。

ふと、雲の切れ間から月が顔を出し、下界を照らした。月光に照らされた正体は、整った顔立ちの少女であった。女性らしい身体の曲線が際立つ。

「ちよつと、失敗しちゃったかな……」

明るい声が自嘲気味に発せられる。

その後方から近づく足音が響く。足音からして二人や三人どころではなさそうだった。

少女は追跡者にたち向かおうと、護身用に常備していた木剣を手を持つ。

「へへっ、こんばんわミネルちゃん。探したぜえ〜」

無精髭を生やした、右の頬に爪の痕が浮かぶ男が姿をみせる。その後ろでは柄の悪い男達が双眸を光らせて控え、手にはおのおのがナイフや棍棒を握っていた。

計七名の集団。どうやらこの先頭の、鉤爪の痕を残す男が主犯であるようだった。

「大人しく従ってもらおうか」

そう告げると男は簡単に少女を仰向けに抑えつけた。少女が手にした剣は届かない場所へ飛ばされる。

「きゅあ」

少女　ミネルは男を正面からキツと睨みつける。

「嫌よ。絶対にあなた達に従わないから」

ミネルは頑なに拒否する。こんな男達に従えば何をされるかわかったものではない。

なんとか拘束から逃れようと体を擦るも、一向に緩む気配は見せなかった。

「そういうと思ったよ。仕方ないが、ちからづくだ。既に足は用意してあるんだ。朝、手に入れたばかりのハコビドリさ」

男の手がミネルの上体に伸ばされる。

ミネルは必死に抵抗をみせるが、男達はそれを楽しんでいるようだった。

男たちが卑しい笑いを浮かべる。ミネルは恐怖で身が竦みあがった。

その目に涙が滲み、世界の輪郭をぼかした。

誰か助けて。叶わないだろう願いを祈る。その刹那、

『こんばんわ。女の子相手に随分と大人気ないね』

声が頭上から聞こえた。男達が不審に空を見上げる。

ミネルは行き止まりの壁の上、屋上の縁に足を掛け見下ろす人影

を見つけた。

外套を纏い、その顔をフードの中に隠している。その奥で眼光が放たれ、この状況を吟味しているようであった。

「ちっ見られたからには逃がしておくな。支障をきたす」

男が手下に指示をする。

「助けて！」

ミネルは声を張り上げた。目に溜まった雫が零れる。

だれでもいい。誰でもいいから助けて……、そう繰り返していた。

ズザザザー。壁を滑り落ちる音がし、男たちが武器を構え落下点を囲む。

『動けなくしてやれ!!』

暴力を楽しむように男たちは舌なめずりをした。

訪問者が着地すると同時に男たちが手にした武器を一斉に振り下ろす。さすがにあの状態から袋叩きされれば、避けるのは難しいだろう。

ミネルは顔を背け、目を瞑った。

あたしが助けを呼んだから……。

苦い後悔の味が口に広がった。

無関係な人を巻き込んだ恐怖に支配され、心臓を掴まれたような  
圧迫感が息が詰まる。

ミネルは嗚咽と共に肩を震わした。その後、

ガンツ、カンツ、何か酷く硬いものを叩いたような音が響き渡る。

えっ、何……？

肉塊を叩く鈍い打音を予想していたミネルは、目を睜り暗闇を凝  
視した。

「……うっ！！」「」

訪問者を袋叩きにしていたはずの男達が呻き声を上げ、次々と崩  
れ落ちる。その中心には例の人影が何もなかったかのように佇たたくんで  
いた。

突然の来訪者は突き当たりを覆う闇から外套を纏い姿を現した。  
フードの下に隠れた視線は獲物を探す猛禽類のように男たちに向けら  
れる。

ミネルを押さえつけていた手が離れ、リーダー格の男が腰に吊し  
た鈍色の塊を取り出し、来訪者に向けた。

パアアアアン……一瞬のことだった。突如、乾いた破響音が響き、  
辺りに火薬の匂いが充満した。

ミネルが目を見張る先で男が手にしていたのは、一丁のリヴォル  
ヴァー式の拳銃だった。島の国では所持することさえ違法のシロモ  
ロであった。発覚すれば、禁固五年の実刑である。

「はっ、裏市場での流しもんだか、すげえな」

男は驚嘆の声を上げ、愉悦ゆえつに浸る。しかしその眉が急に寄せられ、訝あやしげに首をかしげる。周りの男達も驚愕きやうがくの声を上げた。

「残念だけど、外れだよ」

少年の苦笑が響く。彼はさつきまでと変わらない位置に立っていた。横に飛んだ形跡はなく、外套にも血の痕は付いていない。

「きちんと狙った筈だ。外すわけが……」

狼狽ろうたいする男はもう一度、前で構える。

訪問者は地面を蹴り上げ、男の手下の間を俊敏にすり抜け、間合いを詰める。その頭からフードが外れ、月光が少年の姿を照らした。少年の後ろに蒼白の軌跡が残される。

ミネルはそのサファイアブルーの眸に息を呑んだ。

綺麗な目……。

ある種の感動に似た衝動が全身を駆け上がる。

「くそつたれ！」

男のリヴォルヴァーが火を噴く。

ギユン、火花が散りミネルは目が眩んだ。男も反射的に眸を閉じ、顔を背けた。

少年が刀を抜きざまに、銃弾を弾いたのだった。その手の中で冷たく光る刃が闇に浮かぶ。囲まれたときに、男達を降したのもこの剣だったのだろうと、ミネルは憶測した。

ふと少年が首を傾げて言った。

「あれ？ その顔……朝の商人さん!？」

「!？」

戸惑う鉤傷の男がその意味を理解するより早く、男の懐に飛び込んだ少年は瞬時に男の鳩尾に柄を打ち込んだ。ドスツ、と鈍い音がし、

「うつ……………くそつ……………たれ」

憎々しげに顔を歪めた男は前のめりに倒れた。

少年は振り向き、次の獲物を吟味するような視線を男の手下達に向ける。

その冷たい眸に男達は竦みあがり、リーダー格の男を皆で担ぐと猛然と逃げ去った。

少年は刀を腰に吊るした鞘に戻す。気付けば辺りに夜の静寂が戻ってきていた。

ミネルは全員が逃げ去ったのを確認し、視線を少年に戻した。気付けば、少年はフードを深々と被り直していた。

「あ、ありがとう」

ミネルはこの恩人にお礼を口にした。足首を痛めたため、少年を見上げるような格好になる。

「いや、別にたいしたこ、こ、こと……………」

ふいに少年の口調がしどろもどろになり、慌てて視線を逸らす。フードの奥の顔が赤くなったように見えた。

「……ごめん。服がはだけてる」

少年に指摘され、ミネルは「きゃあ」短く悲鳴を上げた。迅速に身体の前で腕を交差して、自分の肩を強く抱く。今度はミネルが赤面する番であった。

なんとも気まずい沈黙がしばらく続いた。

「ここでもいいの？」

足を捻挫し自力では歩けなかったミネルは少年に背負われ家まで送ってもらった。道中、終始無言であり、二人とも顔の赤みが引かなかった。

「本当にありがとね。……あの、あなたはまだこの街に滞在するの？」

「うーん……今のところはその予定」

それじゃあ、と早急に去ろうとする少年の後ろ髪を掴むように、

「私はミネル。ミネル・フェイミア。あなたの名前は？」

その背中に問いかけた。形式的な自己紹介ではなく、ミネルは彼のことを知りたいと強く思っていた。

「この街は広いから、きつともう会わないよ。それに僕に関わらない方がいい」

そう警告めいた言葉を告げ少年の姿は闇に溶けいった。いままで一人であったかのような静寂が少年の消えた空間を埋める。

「絶対見つけるからね、後悔しても遅いぞお!!」

ミネルはもう見えない少年に向かって叫んだ。返事が返ってくることはなかった。近所の住人が何事かと慌てた様子で顔を覗かせる。ミネルは「すみません」と言い、自宅の扉を開いた。扉を閉める前にもう一度、少年が去った方角を見据える。

この恩人との出会いをコレっきりにしたくはなかった。そんな強い思いに自分自身驚きながら、扉を閉めた。

## 巡る日常、染まる心3（前書き）

主人公の名前で迷走しました。

セリという字を見つけたら、脳内変換でリントにしといてくださ  
い。

### 巡る日常、染まる心

「ふあゝつあ」

リントは目を覚まし、大きく欠伸をすると窓を開けて外を見渡す。頭上には雲一つ無い晴天が広がっていた。通りでは各々の仕事場に向かおうとする人々が見え、駆動車が通りを走っていた。

森の生活ではありえない光景。いつもと違う朝にリントは気持ちが高揚する。

今日中に調べ終わらせよう。

そう考え、道順を教わろうと宿の主人を訪ねようと思い立った。一階に下りると、主人は丁度受付の所で帳簿を書きまとめているところだった。

「すみません。道を教わりたいんですけど」

「ええ、構いませんよ。どこに行きたいのですか？」

「実は」

主人に教わったりリントはすぐさま宿を発った。

通りに出ると丁度祭りの後片付けの最中で、いたるところで屋台が解体されていた。中には祭りは終わったにも関わらず、店の食べ物売る姿も見られる。

あいかかわらず活気溢れる通りを歩きながら、教えてもらった通りに道を進む。

いや、進んでいたはずだった。

この街は広く、通りも長く続いている。そのうちどこが三丁目だか、どれが目印の建物か分からなくなっていた。リントは気付けば知らぬ街で迷子になっていた。

リントは天を仰ぎ、昨日はよくあの屋台のおじさんの地図で宿に着けたな……そう思った。

このままでは埒が明かないと、リントは昨日もらった紙を取り出す。

とりあえず、誰かに教えてもらおう。

リントは近くで解体作業中の中年男性に、紙に並んだ名前を訊ねようと近づいた。

「譲ちゃん、どうしたんだい。何か困りごとかい？」

尋ねる前にこちらの視線に気付いた男性が立ち上がる。

困りごとが増えたような……。

リントは引きつった笑みを浮かべ、開口一声、

「僕は男です！！」

男性は心底、驚いたようだった。その証拠に数秒間、その開いた口が閉じることはなかった。

『いやー、悪かったね。君みたいにきれいな顔の子は、女の子しか知らなくてね』

頭を掻き、申し訳なさそうに話した男性は丁寧に地図を描き、道を解説してくれた。

お詫びといって小ぶりの林檎飴を渡されたリントは、それを租借しながらここから最寄りであった《紋朱蝶》もとい何でも屋？へ足早に向かった。

何でも屋で調べ物って出来るっけ？

若干の不安を抱きながらもモノは試しとしてリントは自分を鼓舞し、その場所を目指した。

リントは通りを進みながら両端に並ぶ建築を見回す。幼少期に住んでいた町は電力を持たず皆、木造建築であった。けれどもこの街は石造建築が多く立ち並び、近代的な様相であった。通りを走る駆動車が目を引く。

リントは、目的地に辿り着くまで夢中で街を見回していた。

傍から見ればさも旅行者といった風であっただろう。いや……目を輝かせ、軽快なステップを踏むその姿は一人の少女に見えなくもなかった。

この辺りになると思うんだけど……。

しばらく道沿いに歩き、見えた大きな石橋を渡ったリントは、  
「えっ……………」

視線の先に現れた建物をみて、言葉を無くした。

そこに鎮座していたのは、まるで城のような……いや城だった。ただ、歴史書で見たことのあるスケールの大きなものではなく、少

々小さめではあった。といつても十分に城の外見である。そして、城門に《紋朱蝶》と書かれた看板が吊されていた。

「これが《何でも屋》……。

「……騙されたな」

ボソリと呟きつつ、とりあえずここまで来たのだからと城門に備わっていた呼び鈴を鳴らす。呼び鈴を鳴らしたはずであった。

『パツパラツパー！！！！！！！！！！』

突然ラツパの音が高らかに鳴り響く。

「うわっ！！」

リントは身体をビクつかせ、何が出てきてもいいように身構えた。

ガラガラガラ、城門が内側にふた手に分かれ、中から全身茶褐色の毛皮に包まれている、まるでぬいぐるみのような老人が現れた。白を基調の上下服に紅のラインカラーといった服装で、歩くというよりも飛び跳ねるようにして近づいてくる。

リントはその姿とは別なことに驚いていた。

「……小さい」

「聞こえとるぞ」

リントの呟きは、老人の地獄耳に拾われていた。

「あっ、いや、すみません」

慌てて謝罪するリントの視線の先で、老人は「まあ、本当のことじゃしな」そう零した。

「ほれ、ついてこい」

老人に促されるままリントは城門の内側へと足を踏み入れた。後ろで門が閉じる音がし、退路は絶たれた。

帰るといふ選択肢がなくなり、リントは上下する老人の頭を追った。

リントは中に案内されながらも、前を進む老人を観察せずにいられなかった。

リントもあまり身長があるほうではないが、老人の身丈はリントの膝ほどしかなく、頭の比率が大きい。そして、太い爪を備えた異様に長い指は見たところ関節が一つ多く見える。

「お前さんは、モールスモーを見るのが初めてか？」

どこか楽しむ口調で老人が言い、リントは慌てて顔を上げる。

「ワシはモールスモー、獣人の長指系の小熊族出身なんじゃ。身長は、若い奴でもワシぐらいにしかならんのじゃ」

昔からチビチビいわれたやら、かくれんぼは得意だったなど話し、老人は終始上機嫌であった。その間リントは何も言えず、老人の饒舌をひたすら聞かされていた。

城門から伸びる通路を渡り終え、城内に入ると石畳のホールがあり、相談受け付けと書かれた窓口があった。外見とは裏腹に、中は

概ね庶民的であった。

「中は外見と違って、普通のお店みたいですね」

リントは思ったことを老人に話した。それほど内と外とのギャップがあった。

「ふむ、そうじゃな……別にワシの趣味で城の外見になったわけじゃないぞい」

老人は頭痛がするともいいたげに顔を押しさえた。その小さな口からは溜息が漏れる。

「何か、大変そうですね……って、ワシの趣味？」

リントはこの小さな老人を凝視した。

「あ……！ そうじゃ」

「うわっ……！」

驚くリントを尻目に老人は、勢いよく傍に置かれたテーブルに飛び乗った。

「そうじゃった！ 挨拶がまだだった。ワシがここ《紋朱蝶》のマスターのハップルじゃ」

そうして小さすぎる老人　ハップルはえっへんと胸を逸らし、言った。

「……………」

リントは絶句した。何か言うべき言葉を探したが見つからなかった。

えええ、マスターだったんかい！ と心の中でつつこみは入れておいた。

そんなやり取りの最中で、  
『マスター』  
ホールに明るい声が響く。

と同時に他の相談客が色めき立ち「蝶のお姫様だ」とか「プロポーションが抜群だろ」などと言って落ち着かなそうにしている。中には「俺と結婚を考えてお付き合いを！」といった熱烈なアプローチもあった。

人々の視線の先に現れたのは、明るい髪の華やかな容姿の女の子。色めき立つ人々を軽くあしらいながら、こちらに近づいてくる。

横にいるマスターが自慢げに「ワシの娘のミネルじゃ」と言った。

ミネル……なんでだろ、聞き覚えがあるような……。

リントはその名前に引っかけかりを覚えつつ、娘だと言った小さすぎる熟年者を見る。

それがホントなら犯罪の匂いが……。

そんなリントの心境を察してか、マスターは、  
「娘と言っても、本当の子じゃないぞ。ワシの教え子の子なんじゃ。」

今年で一七になるんじゃないか」

そう言って色めき立つ場に困り顔を浮かべ、やれやれといった感じで肩を竦めた。

「いい男が出来ればいいんじゃないかな。悪い男に引つ掛けられんか心配じゃ。」

「余計なお世話よ!」

すぐ隣で声がし、顔を上げるとすぐ目の前に少女がいた。

なんか嫌な予感がしたと思ったよ。

近くで少女を見たリントは肩を落とし、溜め息をついた。

「親として当たり前な心配じゃ! 昨日など不良グループに付け回されたとかで、怪我をしてきたじゃろ。わしがその場にいればもの数秒で追い払って見せたもを」

マスターが親の威厳を見せつける。

「はい、昨日の祭りで飲んだお酒四樽とその他諸々の請求書ね」「すっかり忘れとった!」

親の威厳は娘に一蹴されてしまった。

差し出された豪く長い紙を見たマスターが固まる。

「……………」

なんだか一層小さく見えるマスターに同情しながらもリントは、

確信が揺るぎないものになり溜め息も出なかった。

ふいに突き刺すような視線を感じた。見れば少女がじいじいと見つめていた。

まさか、気づかれるなんて事は……。

鼓動が早鐘をうち、背中に冷や汗をかく。

「……そっくり、いつこの街に来たの？」

リントは、詰め寄ってきた少女にどきまぎしながらも、

「僕は、今日来たばかりだけど」と何とか返した。声が上がらないように堪える。

やばい。怪しまれてる。どうしよう。

打開策はなく、リントは愛想笑いを浮かべるしかなかった。

そんな二人の様子を見ていた周囲の人達がひそめく。だが、あいにくリントにはそれを気にしている余裕がなかった。

少女は引き下がる様子を微塵も見せず、

「似てるんだけどなあ、ほんとに今日来たの？ 昨日の夜には着いてなかったの？」と質問を重ねてくる。いよいよ瀬戸際に立たされたリントは敗走の準備を始める。

「まさか、この少年がお前を助けたって人なのか!？」

マスターが急に元気を取り戻し、話に入ってきた。この状況で二対一は無理だ、とリントは絶望した。

「分かんない。でも、そつくりなんだけどなあ。眸の色が蒼かったのを除けばだけど」

「それじゃ別人じゃろう。きっと他人の空似じゃよ。眼の色が変わる風人なんておらんしの」

よしつ、きたっ！ マスターの言葉に、リントは心の中でガッツポーズをとる。

「うーん、そうかなー」

それでも少女 ミネルは訝しそつに見ていた。

「やっぱ、別人かあゝ。はあゝゝ」

明らかな落胆を見せるミネル。

対してリントは安堵から深く溜息をついた。

それを見て何かを感じたのか、マスターが、

「今日来たばかりなら、この街の名物、ビューの実のゼリーを食べてないのか？ あれほど美味しいものはないぞ」と言った。

「……………」遠慮させてください」

昨日の惨状と自分を襲った苦痛を思い出した。

リントは急に膝の震えが止まらなくなり、ガタガタと身体を揺ら

す。

「お前さん、あのゼリーを喰ったな。身体が拒絶反応を示してる。あんな不味いもんなんか喰うからじゃ」

そう言つと勝ち誇つたように笑う。

「ちなみにゼリーは祭りの日にしか、出回らないから安心して」

隣りで、ミネルが太陽のような笑みを浮かべていた。

それって、まさか。

嵌められたと気づいた時には遅かった。逃げられないように少女が腕にしがみ付く、柔らかいものが腕に当たってリントは心底焦らされる。

結局言い逃れも、力づくの逃亡も出来そうになかったので、リントは大人しくするしかなかった。

後はもう、流れに身を任せて昨晚のことを白状した。ただし眸の件についてはどうにかはぶらかした。

倦怠感を覚え、嘆息が後を絶たない。

まさか、こんな一日で再開を果たすなんて。世界は狭いな……はあ〜。

リントはしみじみと思った。

「此処に来たには、何か相談があるんじゃない」

そう言ってマスターは何か考え込むようにして言葉を続けた。

「よし、ワシが直々に相談に乗ってやろう。お前さんの抱え込んでるもんは、ちと厄介そうじゃ」

マスターはテーブルから降り立つとこちらを見上げ、付いてくるよう指示した。熟年者の男性老人であるものの、その動作はどこか愛くるしい。

「マスター、あたしも付いて来ちゃ駄目かな」

「駄目じゃな」

「うわっ、即答。もう、分かったわよ」

膨れ面を浮かべた少女はリントに視線を戻すと『また後でね』と、満開の花のような笑顔を浮かべて去っていった。

じっ……………。

今頃になってリントは、周りから殺気立った視線を向けられていることに気付いた。恐る恐る見れば、相談客のほとんどが睨みを利かせている。

『あんな軟そうなガキがミネルちゃんと釣り合う筈がねえ』だとか『女みたいな顔しやがって、ミネルちゃんをたぶらかしてんじやねーぞ』と言うのが聞こえる。

中には兵もいて、『俺のストライクゾーンだ』や『性別なんて関係ない』など背筋を凍らすような言葉も聞こえた。

顔を押しさえて溜め息をつくリントの隣では、マスターがミネルの去った方を向いて、「いつになればワシをお父さんと呼んでくれるんじやろつか……」と言うのが聞こえた気がした。

## 巡る日常、染まる心4

「よし、じいじや」

リントが案内された部屋は三階の最奥にあった。

所狭しと彫刻やら生き物を模った木像が並べられ、本棚には厚さが一〇センチを超えるような重厚な本が隙間無く並んでいる。マスターがあの本を取り出せるのか心配になりながらも、リントは勧められた椅子に座った。

「あの……料金はどうなるんですか？」

お金を心配してリントは訊ねた。

「子供からは取りはせんよ。それより、毎日の生活費があるのかの？」

リントは見透かされたような気がして、慌てて「あります!!」と返事を返した。

「そうか……。それじゃあ、お前さんの悩み事でも聞かせてもらおうとするかの」

マスターが座高の高い椅子に納まり、リントと向き直った。

話しても大丈夫かな……。でも、万が一ってことも。

リントは言おうか言わないか、まだ決心が着かずにいた。口を開きかけては、すぐ口を閉じる。パクパクパク……。魚類の如き開

閉をしばらく繰り返すとマスターが苦笑し、

「まあ、ワシをまだ信頼出来ないわな。よし、ちよいと付いて来るのじゃ」と告げ、本が詰め込まれている本棚を横にスライドさせた。

視界に人一人分ほどの穴が現れ、その奥には部屋が続いていた。

すんごい……力持ち。

「早く入ってこい」

驚くリントをマスターは催促した。

リントは慌ててマスターの後に続き、穴を潜り抜ける。

「どつじゃ、この隠し部屋。かくれんぼに最適じゃろ」

自慢げに話すマスターから視線を外し、リントは部屋を見渡す。

先ほどの部屋とは違って彫り物も木像も置かれておらず、代わりに古めかしい文献、日に焼け黄土色に変色した資料などが散雑としている。まるで資料室のようなこの空間。

リントは積み上げられた書籍の背表紙を見やる。世界中の歴史書の数々、多くの資料。

幸いリントは幼少期にバロックから読み書きを教わっていた。人は必要ないと思ったのだが、バロックが生きるために必須だと言いつ張ったのだった。

少なくとも一七年ほど生きてきた中で、幾度となくバロックに感謝することになった。

にしても。

何故こんなにも、資料が多く集められているのか不思議に思った。たとえここが何でも屋だとしても無縁のモノであるように感じられた。

「そんな難しい顔してどうしたんじゃ？ 何か疑問でもあるのか」

マスターが何事もないかのような口調で言う。その手の中には筒状に丸められた羊皮紙。

「ここにある資料はワシが独自に黒歴史、暗黒時代についての調査で集めたもんじゃ。とここでお前さんは現世界情勢についてはどこまで知つとる？」

藪から棒にマスターが質問を投げかけてきた。

その意図が分からずもリントは答えた。

「つい最近まで森で生活をしていたので、五、六年までのことぐらいまでしか」

ふむ、と一言。マスターは手に持った羊皮紙を机に広げる。

現れたのはメルカトル図法で描かれた大陸地図であった。

「まず、ワシらがいるこの街は、隣国の豊草サファリの国との国境近くにある。街の名は東瀛トウエイ。この《紋朱蝶》、一般にはギルドと呼ばれるが、それは街中央区に位置してるんじゃ」

そう始まった世界の話は、マスターが調べてきた暗黒時代についてを踏まえ続けられた。

極東の強国、島の国の属都市として発展してきた東瀛<sup>タルニナ</sup>。現在では地表に都市を形成しているが、その前は地下に潜る円柱状のコロニーであった。今では施設は閉鎖され、機能をしていない。そうしたところに文明退行の片鱗が見られる。

最盛期には人類は空を飛ぶだけでなく、この星から飛び立つことも出来た。それだけでなく恒星間の移動も可能であったという。

また今ではタイラントが兵器として使われるような時代であるが、かつては機械兵器と呼べるものが主流であった。文明退行の直前には、人体兵器や強化人間などの類を生む技術さえ存在したという。

けれども現在では、その多くは闇に葬られてしまった。

一度タイラントとの生存競争に敗北した人類は、アーコロジー同士を結合させるか、それを中心として国を再建し再度の繁栄を辿った。しかしそれも長くは続かず、文献に記載されている災厄の怪物によって到来する暗黒時代で、またも荒廃し野蛮な時代に遡行した<sup>そごう</sup>。

世界各国は『暗黒時代』で失ったものを補うように同盟を設立させることになった。<sup>アライアンス</sup>

島の国もまた同盟の一国であり、首脳国の一つになっている。暗黒時代を無事乗り越えた国は、文明退行前の半数にも減ったとされている。

アライアンスは現在ではその下に《世界生線維持組織》を設立している。

その役割はいまは無き北の強国、雪の国の活動家たちの捕縛と北方地域の嚴重な立ち入り規制である。<sup>ブリックフラット</sup>

雪の国は国土のほとんどが森であったため、対タイラント技術が進み、人体兵器や強化人間などの科学はここで生まれた。現代の負の遺産と呼べるものも多く生まれたのだった。

「 そんな世界の最先端技術をもった雪の国の崩壊は、災厄の獣によって引き起こされたのじゃ。同時期にパーパメントによる忌々しい虐殺も起こったらしく、あまり知らされてはおらんがな」

マスターはペンを持ち、地図に書き込みをしながら話を続けた。

パーパメント  
人型生体武装、その名を聞けば人々は少なからず、良い感情を抱かない。

歴史書に記載される雪の国で多発した惨殺事件 総称、血涙の災禍。その事件の犯罪者であったのはまだ年端もいかない子供達であった。対怪物用兵士として戦うことを運命付けられた生命、その存在理由は兵器としての意味合いが強かった。

血涙の災禍、その事件による殺害者の数は雪の国全人口の過半数をも上回ったとされる。

この事件を契機に人体兵器の開発は凍結され、異能種開発へと一元化されることになった。そしてパーパメントの血を受け継ぐ、ドミニアントチルドレンが現れ、忌諱きげんの対象とされた。

「雪の国消滅の直前にその支配領から独立をした国があつての、皇族が国のトップとして力を付け、民主制から君主制へと変わった」

…「ココじゃ」

リントがペンで示された場所をのぞくと、そこには皇国ツァールストウネと書かれている。

位置は旧雪の国領の下部、島の国とは多少離れた場所に位置していた。

「こいつがちよいと厄介でな。技術力は雪の国のモノが多く発掘され、文明退行以前に迫っており。近年ではココを盟主にギャロップなどという連盟まで出来おった。そして軍備の増強を図り、ヴィンセルト連盟軍などが発足しており、各地で争いさかいが多々起こった。じゃが」

そういいながら皇国の周囲を囲むように二重線を引くマスター。

「現在は連合と連盟で不可侵条約を結んでおるため、どこもあからさまな警戒はしておらん。それに今一番に解決しなければならんことが残っておりゃ」

そうしてマスターは新たに北方に丸を三つ書き足した。

「文明の退行の一因は森の肥大じゃが、その原因は飛来した隕石デフォメトロイドじゃ。そして現在、北方地域には最後の三つが残されておる。その除去が世界共通の目標に掲げられておる。まあ、これらのことは全て書物に記載されたことで、正しいかは分からん」

このちよつとした歴史の講義に一区切りがついたようで、マスターは地図を元のように丸めた。

マスターが話したことはこれらのことには、リントにとって既知の事柄もあつたが初耳のところも多かった。

頭の中でそれらを整理していたリントに対し、突如マスターが放った言葉がその呼吸を止めさせた。

「おぬしが世界中から忌み嫌われる《呪われた血》を流す子供だということ、身体の部位が変化すると聞いて既に気付いた。獣人ならともかく、風人の身なりでそんな異能はありわせん」

え！？

一瞬パニックに陥りそうになったリントに対し、マスターはいたって落ち着いていた。

その目は老熟した観察眼をしていて、責めるような様子は見受けられなかった。

「国際法で各国が人体兵器を所持することは禁じられておる。じゃが、おぬしが言わなければ、力をやたらに使わなければバレることはないのお」

それどころか、そんなことまで言ってみせた。

だからリントは、この街に来た訳を話そうと決心した。この人なら力になってくれる、そんな確信めいたものがあつた。

「それじゃあ、聞いて貰えますか？ 僕が抱えた問題について」

そうしてリントは、いくつか省きながらも大まかな事情を話した。マスターの唸り声が低く鳴る。

「軍との遭遇とペンダントか……。まず、その黒毛の獣はテイクランじゃな。アライアンスもあまり情報を得てはいないらしいんじやが、皇国が大国の技術で創り出した遺伝子組み換え生命体らしいんじや。それを保持する部隊は戦時でも前線に出てくることはなく、情報収集や脅威種などの捕獲の任務をこなしておるらしい。そして、テイクランそのものの強さは王獣種に並ぶと怖れられておる」

そこで一息つくとマスターは言葉を続けた。

「お前さんは運が良かったようじゃな、本来ティ克蘭の体毛は黒に白斑が浮かんでおるんじや。全身漆黒なのは死神と呼称されるバイルのみじや」

「っ！！」

その名を聞いた途端、リントは森での争いを思い出し、身を固くした。

「ティ克蘭の中でも一際凶暴なのがバイルなんじや、アライアンズ側はこれに乗る人物がこの部隊の隊長だと考えておる……さて、次はそのペンダントやらを見せてはもらえんかの？」

「は、はい、構いません。どうぞ、これです」

リントは首から吊るしていた六角柱の鉱石が付いたペンダントを取り出す。その半透明な石を手についたマスターの目が細められる。あの軍人に指摘されてもリントには、この石に失われた科学技術との関係があるとは思えなかった。表面にある突起から日頃、何かの鍵だとは考えていた。

ここに来ても謎は解決されないままかな。

そんなリントの悲愴を打ち消すような声上がる。

『これはもしや……お前さんちよいとコレを見るんじや』

マスターが小さな照明を片手に鉱石を照らしていた。作られたペンダントの影には文字が浮いていた。

「これって……」

映し出された文字を見て二人は黙り込んだ。読み取れた文字はこうであった。

『リントスルハナガカレルコトノナイセカイヲ・ワタシハノゾム。  
ココニ・キボウヲノコス。シュウマツハチカイ・オーヴァニ』

後半部分は不鮮明で読み取ることが出来なかった。

凜とする花が枯れることのない世界を・私は望む。此処に・希望を残す。終末は近い・オーヴァに

リントは知っていた、オーヴァという名前を、その存在を。夢物語のように聞かされてきた名前を。

「どつやら、これは記録のようじゃな。だが、それほど古いものじゃなさそうじゃ。風触があまり進んでおらんしの、文字が刻まれている以外はただの水晶じゃな」

そういつてマスターがペンダントをリントに返す。その顔は何やら難しいことでも考えているかのように深く皺が刻まれる。

「些か信憑性に欠けるものの、古い文献でよく見かけた終末の文字の手がかりになるかも知れん。オーヴァか……じゃがそれより軍がコレについて情報を持っておることと、草原の国との国境沿いに兵を集めておることも気になるのお」

あの連盟が表立った行動を取るとも考えにくいしの。ここが標

的にならんといいんじゃないが。

「ほれ、出るぞい」

マスターに従ってリントは隠し部屋から退室した。本棚が元に戻され、偶像に支配された空間が出来る。

「ところでお前さん名前はなんと言っんじゃない？ さっきからお前さんお前さんじゃ不便で仕方なかったわい」

そういわれて初めて自己紹介をしていなかったことに気付いた。

「リント・ミウネです。この辺りの習わしでいえば、三嶺燐人ですようか」

リント少々気ままずくなりながらも、自分の名を告げる。

『ふう〜ん、リント君かあ〜〜』

明らかかな女性の声が扉の向こうから聞こえた。リントは反射的に扉の方を向く、目に写るのは喋るはずがない堅木の扉。

マスターが溜息混じりに扉を勢いよく開ける。

「きゃあー！」

目の前にいたのは、ミネルであった。突然、体重をかけていた扉が開き、バランスを崩し内側に倒れこむ。

「ミネル。相談中に盗み聞きとはいいい度きよ

」

マスターが倒れこんできたミネルに言葉をなくす。

あぶないっ!!

咄嗟に二人の間にリントは駆け込んだ。直後、胸に飛び込んだ圧迫感と花のような香りが漂い、つかの間の思考停止が懸かる。

「……………あの、大丈夫？」

我に返ったリントはぎゅっとしがみ付いている少女に戸惑いながら訊ねる。

内心では、容姿端麗であるミネルにしがみ付かれるという図に、高鳴る鼓動を鎮めようと躍起になっていた。

「えっ、あっ、いやその……………」

いやその？

赤面し恥じらう少女はすぐさまリントから身を離す。俯きがちななり、目元がチャイニーズレッドの髪で隠れる。

二人の足元ではマスターがやれやれと何か得心顔で肩を竦めていた。

赤面し黙ったままのミネルと戸惑うリントをマスターが急ぎ立て、三人は一階のホールに降りた。朝よりも人が集まってきたようで、賑わいを増している。

どうやら、このギルドは街の人の交流の場の役も担っているよう

だった。

「それで昨日俺がそいつに言っちゃったんだ」

「あそこの料理がこれまた美味しい」

「うちの息子が言うことを聞かなくて」

談笑があちこちから立ち上がっている。

あいかわらず、ミネルファンも増しているようでリントの素性を探るような視線が痛い。気苦勞絶えないといった顔を浮かべるリントに、近づく人影があった。

『おや、マスター直々に面談とは珍しいこともあるもんだ』

見れば、人の良さそうな青年が立っていた。

目にかかる蓬色よもぎいろの髪を持ち、その容姿は摯実しじつさを訴えている。

「何じゃ、リスカル。もう仕事は終わったのか」

「ええ、滞りなく終わりましたよ」

そこでリスカルと呼ばれた青年はリントに視線を戻した。値踏みをするかのような目が注がれる。まるで相手の本質を見抜こうとするかのような目つき。

もしかバれるのではないかという焦燥感が募る。それほどの眼力であった。

「……君、男なのか」

ぐはあつ。

予想外の不意打ちにリントの腰は砕けた。なんとか両手を付かぬよう踏みとどまる。

「はい……正真正銘の男です」

なんとも変な会話になっている。傍から聞いている人には理解されないだろう。

「あつと、俺はリスカルって名前。リスカル・ギャリー。よろしく」

唐突な自己紹介と共に差し出された右手。

「リント・ミウネです。初めまして、リスカルさん」

なんとも人を翻弄するような人だと思いながら、リントはその手を握り返した。

互いに自己紹介が終わるとリスカルは眉を潜めて、三人から少し距離をとるようにしている人物に声を掛けた。

「んで、なんでミネル嬢は赤面してダンマリなんですか？」

そこでマスターもリントも視線を少女に向ける。そこには視線を地面に向けたまま壁の花と化したミネルがいた。

どうやら今まで、ずっとこの状態だったらしい。

「えっ、あつ、ごめん。ぼくっとしてた」

三人の視線に気付いたミネルがハッと我に戻る。そのまま「ホント、なんでもないんだって」と言い張り、足先に出口に向かおうと

する。

「ミネル、暇ならリントに街を案内してやったらどうじゃ？」

「……………」

マスターの言葉で不自然なほどにミネルの身体が硬直する。

リントに向けられる周辺からの視線が敵意剥き出しになる。ここでリスカルが一瞥し、皆を無言で黙らせた。

リントはリスカルに対して頼れる人物だという感想をもった。

初対面で男であるかなど聞かれたため、警戒心は残されていた。

「リントは資料館にも用があつたはずじゃな？　じゃったら、街案内ついでにでも寄ればよいじゃろ」

「僕はそれでも構いませんけど……………」

そこで硬直したままのミネルに視線を戻す。

「……………リント君がそれでいいなら、……………別に断る理由もないわ」

諦めたようにして、振り向いたミネルがそう呟いた。ただ、未だにリントと視線を合わせようとはしない。

「決まりじゃな。リスカル、そんじゃお前さんに別の仕事を頼むかの」

「はあ、まったく娘思いのいい父親ですね」

リントとミネルを残し、マスターとリスカルは去っていく。

「リント君、行こっか」

俯きがちなミネルに袖を引つ張られ、リントはギルドを後にする。  
その背中を恨めしむような、苦やしむような視線と、悲哀の感情に  
押されながら。

## 忍び寄る黒の影

島の国との国境沿いの山脈　豊草サファリの国の領土で黒一色の服装をした人間たちが巨大な機材などを運んでいた。その周囲を警邏する者は皆、突撃銃を構えている。

誰が見ても明らかに異常な光景であろう。

彼らが歩を進める先には、島タルニアの国の領土しかなかった。

一人の男が現場の指揮を取っていた。髪に白髪が混じり、灰色に染まっている。

ブウウウン、ブウウウン。

男から低く、唸るような音が発せられた。

男はおもむろに懐に手を伸ばし、携帯端末を取り出すとボタンを押しした。

「ああ。こちらの準備は整っている。だが情報は正しいものなのか？」

「ええ。諜報員スパムからの確かな情報です」

相手の声はまだ若い男のものだった。

「そうか……。上層部からの返事で既に決行の許可は下りている」「それでは計画を精査しましょう」

回線越しに話された事柄は、都市の住人が聞けば慄然とする類のものだった。

中規模部隊の配置、標的。

使用される火薬の量、銃器の数。

不可侵条約が結ばれた現在において、それらは異形なことではなかった。

「それでは、ガーム大佐。御武運を祈っております」

その言葉で仰々しく、通信は遮断された。

ふうふううー。

白髪の男　ガームは深く深呼吸をした。

つい先日、二度に渡ってハコビドリを盗まれる失態があった。その汚名を挽回するためにもこの任務を遂行せねばならないと心に刻んでいた。

まさか隣国の島の国にいるとはな。

ガームは鋭い視線で曇った空を睨み、まだ見ぬ敵の存在を怨んだ。

「さてと、奴さんやつこは配置ポイントについてるみたいですよ。ぼちぼち準備をしといたほうがいいですね」

国境付近の街、東瀛のはずれで、薄く笑いを浮かべた青年が携帯端末を耳に当てていた。

「あまり連中を等閑視するな。能はなくとも数がいる」

「重々承知しています。あなたのために、この身を捧げます。必ず計画は成就させてみせます」

心底、陶酔したように目を細めて青年は言い、会話が終了した。  
端末をしまった青年は踵を返し、通りの人込みに向かった。

その蓬ふせの髪かみが揺れていた。

## 理想と現実

ミネルは首を傾げ言った。

「へっ？ バロック・ディア・ソニエって言った!？」

心底驚いたようにミネルがときょうな声を上げた。周りの人々が何事かといった顔でこちらに視線を向けていた。

リントとミネルはギルドを出るとすぐに街の散策を始めていた。

気付けば、ギルドではあれほど無口になっていたミネルは、すっかり復調していた。

ただ未だにリントは視線を逸らされ続けていたのだが……。

そんな中、街案内の途中にミネルがリントが資料館へと行く理由を聞いたのだった。

初めは乗り気ではなかったリントだったが、ミネルが興味津々な視線を頻りに向けてくるのに根負けし、白状した次第だった。

「そう言ったけど……本当の父親みたいな人だったんだ……」

リントはその顔に哀愁を浮かべて言った。

その傍らでミネルは黙考していた。

「ミネルさん、どうしたの?」

ふと立ち止まったミネルを不審に思い、リントも歩を休めた。

振り返り、ミネルの顔を直視する。

「っ！」

咄嗟にミネルは赤らむ顔を背け、

「そ、その人がバロック本人である証拠は？ 形見みたいな物は？」

そう早口にまくし立てた。

「バロックを知ってるの！？」

リントは驚いた。

まさかバロックのことを知っている人がいるとは思わなかった。  
何年も一緒に過ごしたリントが知っている素性は、皆無と  
等しかったからだ。

真剣そのものなミネルに対して、リントが取り出したのは簡素な  
黒塗りの鞘に収められた小太刀。唯一といってもいい彼の愛用の品  
だった。

それを渡されたミネルは、眸を大きくした。

「……………本物ね」

ミネルは刀身に彫られた獣の横顔のレリーフを見つけ、呟いた。  
そして、いっそう細い眉根を寄せて唸った。

「だとしたら、もっと疑問よね……………」

ますます真剣になる表情。眉間に痕が残るのではないかと心配になるほど深く深く、皺が刻まれる。

「何がおかしいって?」

全く分からないリントは尋ねた。

それに対して、返された答えは予想もしないものだった。

『だって……バロック・ディア・ソニエ、またを先代剣帝は……一〇年前に亡くなってるのよ』  
「っ!!」

暫くの間、リントの開いた口が閉じることはなかった。

バロックが死んだのは、六年近く前になるはずだし、死んだのは森の中だった。何でその死が知られてる?

明らかな矛盾に直面し、思考が強制的に停止する。

「よし、行くよ!」

突然、意を決意したようにミネルがリントの手を引いた。

その足取りは、確かな目標を目指していた。

「行くってどこに?」

「こうなったら、まず資料館に行って情報収集と整理でしょ!」

リントはミネルに手を握られながら通りを進んだ。ただリントには握られた手の温もりにどきまぎする暇がなかった。

猛進する二人　ミネルが一方的にリントを引いているを、すれ

違う人々が慌てて避け、何事かといった視線を向けてくるのにもミネルは動じなかった。そんな中、半ば強引に引つ張られたリントは、なんとも居たたまれない気持ちであったのだった。

やっこのことで二人が辿り着いた先は、ギルドからは多少離れた場所 街の南東地区であった。

その周辺は駆動車の通りが多く、歩道が広く設けられていた。出勤する人々が波のように絶えず列を成し、背の高い建築物が立ち並ぶ中にあるそれぞれの勤め先へと分散する。

その中を人込みに紛れて歩いていくと、右手に『都立資料館』と明記された看板が立つ建物が現れた。アーチ状の入り口があり、頂点にはドームが浮かんだ三階建ての石造りの建造である。

その周囲が近代的な建築物で囲まれている中で、そこだけが一昔の姿を残しているようであった。

「ここが資料館よ！」

何故か胸を反らして言ったミネルは自慢げである。別に胸を自慢したい訳ではないのだろうが、リントには何が言いたいのかわかりかねた。

そのため口から出た言葉が、

「なんか……ここだけ、時代遅れというか古めかしいというか」

そんな批評の文句であった。

すぐさまミネルがふくれつつらを作り反論した。

「何よー、古いといけないの？ 趣があっといういいじゃん。あたしは

「こういつ昔って感じが好きだけどなあー。特に古風な城が好き」

「どうやらミネルは歴史あるものが好きだったようである。」

ミネルが自慢げだった理由が氷解すると共に、リントはあのギルドの外見が城なのはミネルの意向なのだと確信した。

道理でマスターが頭を悩ましていたわけである。

「ほら、行くわよ」

声と共に手を伸ばしたミネルに対して、またも引きずられては敵わないと、リントは逃げるようにして資料館の中に入った。

入館したリントを出迎えたのは、所狭しと陳列された資料や書籍の数々だった。

万巻の書を擁ようすると言われれば納得出来るほどの所蔵書の量に、ただリントは驚くしかなかった。

「すごい……」

思わずそう口に出したリントの横で、ミネルが花が綻ほらひぶように笑みを浮かべた。

「ほら、既刊資料の展示場所はこっちよ」

ミネルが油断したリントの手を取り、入り口とは正反対の方角へ進んでいく。

身長よりも高い棚の間をすり抜け、ショーウィンドウが並ぶ場所へと辿り着いた。

一番手前の棚に『情報誌・資料』と明記されていた。

どこから手をつけようか悩むリントを尻目に、ミネルは既に作業

に取り掛かっていた。

「大体この辺のはずなんだけどなー」

ミネルが目凝らし漁っている場所は、今から丁度一〇年前の資料棚だった。

慌ててリントもその横で詮索する。

にしても、とリントは感嘆するしかなかった。一〇年前だけでもかなりの数の資料だった。

まさに資料館というだけあって、ここでなら知りたいことが全て分かるようであった。

ただ。。。

この中から、見つけ出すのは一苦労だなあ。

そう思わずにはいられず、溜息をつく。

新聞、情報誌がずらりと並んでいるのを見るだけで、やる気が失せるというか、脱力感が襲ってくるというか……とリントは虚ろな目をして乾いた笑いをする。

重量感のある溜息を吐くと、バロツクのことを知るためだと自身を鼓舞してリントは作業を再開する。

そうしてしばらく無言で二人は黙々と搜索を続けた。

それからどれほどの時間が経ったのだろうか、どちらも収穫はゼロであり倦怠けんたいした様子を見せ始めていた。

ムリなのかな。

そんなリントの心中を察してかミネルが呟いた。

「この中から見つけるのは無理ね」

「だね……」

表情には出さないが、リントの落胆は大きかった。ほとんど知らないバロツクのことを少しでも知れるという期待感が募っていたからだった。

「仕方ないかー」

失意の念で沈むリントの元からミネルがスルリと離れていった。向かった先は近くに置かれた一人用の机。

ミネルが手を翳かざすとA4サイズの端末が開き、真っ黒な画面に光が灯った。

映し出された画面には『検索欄』の文字が並立していた。

えーっと……え？

呆気にとられたリントの視線の先で、ミネルは素早く単語を打ち込んでいく。

「あつた！ ほら何呆然としてるの？ 過去の記事よ。これにちや

んと記載されてる」

先ほどの苦勞は何だったのだろうか、悩む素振りを見せずミネルがリントを呼ぶ。

リントは近づいて画面を覗く前に開口一声  
「初めからこれで良かったじゃん！」

その言葉を発した。急に大きな声を出したことで、近くで書物に目を通していた人が突き刺す視線を向けた。

「資料館では静かにだよ。……だって何か文明に頼ってると負けた気がしない？」

はあ~~~~~、と顔を押しさえ盛大に溜息をついたリントをミネルは不思議そうに見上げる。

何となく、そう言う気がしたよ。城とかが好きだし。

「溜息ついてないで画面を見てよ。ほらココ」

急な脱力感を覚えたリントを急かすようにミネルが画面を指差した。

「一〇年前の記事よ。ここにほら『剣帝死去』って書いてあるわ」

ミネルが指す場所には、一面に大きく黒の太字と一人の写真が載せられていた。

しかし、そこに剣帝の写真として載るのはリントが見覚えのある顔ではなく、片目に眼帯をし、鮮やかな赤毛をもった風人の男であ

った。

リントが知るバロックには両目が有り、黒髪だった。そして獣人であった。

「持病を持ってたみたいで、四五歳で亡くなったのね」

そこでミネルは、リントの横顔に視線を送る。そこには驚きと疑問と安堵が入り混じったような表情が窺えた。

「そんな複雑な顔を浮かべてどうしちゃったの？　もしかして、本当に本人だったわけ？」

「別人だったよ……だけど、本人もここに載ってる」

そう言うとリントは、一面に設けられた、『追悼の辞』という記事を指した。

すぐさまミネルがその部分を拡大表示する。

そこに載っていたのは、『世界生線維持組織：東陸駐屯部隊隊長《スーブニール・レディロック》中将より』というもので、焦げ茶の軍服に身を包んだ猫族の男の写真が載っていた。

「この人が……バロックだった人だよ」

二人は暫くの間、沈黙していた。

リントはこの事実に対する答えを、何度も何度も頭の中で再考していた。

## 理想と現実2

資料館から出ると、街は朝よりも賑わいを見せていた。

通りは駆動車が溢れ、歩道にも人が列をなして歩いている。そして風に乗ってどこからか料理の香ばしい香りが漂い、空腹感を増長させる。

昇った日は天辺の一步手前であった。そろそろ昼どきになるのだろう。

「それじゃあ、予定通りあたしがこれから街を案内してあげる。それといい時間帯だし、まずお昼を食べに行こ。あたしがよく通うパン屋のパンがどれも美味しいんだよ」

目を奪うような明るい笑顔を浮かべ、ミネルはリントと肩を並べて通りを進む。

お昼と言われ、リントは朝から何も食べていないのを思い出した。

ミネルさんが絶賛するパン屋ってどんなお店なんだろう。

リントはまだ見ぬパン屋に思いを馳せた。

たわいのない談笑を続けながら、二人は街をギルドがある方角に向かって歩を進めた。

中央区の方へ来ると、ミネルの姿を見た街の人々が声をかけてくる。やはりこの辺ではミネルは有名人であるようだった。

そんな人々の中にリントは変に殺気を含んだ視線を感じ、身震いした。

見ればこの街の住人、あの目が訴えていることはどうも私情に關することらしい。

『ミネルちゃんと並んで歩きやがって。タダじゃすまさねえ』

そんな心の声達が聞こえるようでリントは溜息が絶えなかった。

その後も街の人と親しげに話すミネルとは対照的に、リントは肩身の狭い思いをしながら歩き続けた。

「ほらあそこだよ！」

ふいにリントに声をかけたミネルが先を指差した。見れば『ベーカーリー』と書かれた看板表示のお店がすぐそこに見えた。

あそこが目的のパン屋かな？

返事をしようと口を開きかけたリントの手を、ミネルが急に繋いだ。そのまま手を引いてリントを店まで引っ張っていく。

「え！？ ミネルさん、どうして」

「そんな溜息ばっかついてると幸せが逃げちゃうよ。ほら行くよ」

リントは、笑顔を浮かべるミネルに問答無用に連れられ、店の目の前まで早足で向かった。

先に店内に入ったミネルの後を追うようにしてパン屋に入る。

同じタイミングで、愛想のいい女性が店の奥から現れた。エプロンを付け頭には三角巾といった身なりであった。

その手には焼きあがったばかりで香ばしい匂いを放つパンが並ぶ

トレイが握られている。

「あら！？ ミネルちゃん、いらっしやい。丁度今、焼けたパンがあるわよ」

「いい匂い。どれにしようか迷っちゃうな」

店に並んだパンはどれも美味しそうで、ついつい目移りしてしまうほどだった。

クロワッサン、デニッシュ、バゲット、カントリーパン、クロワッサン、ピッツァ……値札に書かれた名前の数々、パン屋に馴染みの無いリントは目を輝かせて店内を見渡していた。

すごい、いろんな種類があるなあー、それにどれも安いし。

リントにとって安いものは大歓迎だった。

ハコビドリと引き換えに手にしたお金もそれほど多く残っているわけではなく、節約していかなければ先が不安だった。

「その君の名前は？」

先ほどまでミネルと話していた女性がリントに視線を向け言った。

「あ、僕はリント・ミウネです。昨日この街に来たばかりなんです」

リントは慌てて自己紹介をして、改めてこの女性を見た。

うら若な女性だった。後ろで一束に纏めたまとこげ茶の髪に赤みがかった頬をしている。

「リント君ね。へえ、昨日来たばかりなんだ。この街は随分と

いいところだから、リント君も気に入ると思うよ。でもね、一番はうちの店をご贖<sup>ひじき</sup>してもらいたいね」

そう言っところ笑った。

この女性は随分と社交的な人だとリントは思った。一方的に話をされても悪い気はしなかった。

「フィアット、だからあたしが街案内をしてあげることになったの」  
横からミネルが話しに割り込んだ。

「ふーん、そうなんだ……へえー」

ここで女性 フィアットが何か探るような視線をリントとミネルの二人に送った。

「な、何？ フィアット」

「別にー、何でも無いよ。ほら、焼けたてが冷めないうちにパンを選んじやいな！」

「うー、何か考えてるでしょ」

リントはミネルとフィアットの仲つまじいやり取りを傍観し、まるで実の姉妹みたいだと思った。

そんな二人から視線を外し、店内を回る。

お世辞にも広いとはいえない店内は四方を棚で囲まれ隙間無く、パンが並んだトレイが置かれている。

そのどれもが美味しそうで本当に悩む。いつそのこと全種類を買い込んでしまいたいという衝動を押さえ込む。

「お昼で私がよく買うのは、このクロワッサンとかだよ。私的私観だと、クロワッサンの良し悪しでそのパン屋の力量が分かるわね」

リントの横に並んだミネルが指差す先には、菱形で間にハムやら瑞々しい野菜が挟まれたクロワッサンだった。

「その横にあるのも、同じクロワッサンって名前がついてるけど？」

リントは横に並んだ三日月を見て言った。

「クロワッサンは菱形のはバターが織り込まれてて、主に食食用。んで、三日月の方はマーガリン使用のおやつ用。まあ、フィアットの受け売りだけどね」

そう言って笑うミネルはすでにパンが三つ載ったトレイを手にしていた。

「トレイに乗ってる、そのハムとかがはさんである奴は何？」

「これはカスクルトよ。薄切りにした具材をプリーツ状にはさんだパンなの。結構具が入ってもしつこくなくて食べやすいよ。あとは」

結局リントが選んだのは、勧められたクロワッサンにカスクルト、それにベーグルだった。

本当に究極の選択だったとリントは思った。ここに滞在している間に他の奴も食べようと決意を固めた。

「はいどうぞ。どれも焼き立てだから冷めないうちに食べてね」

リントは袋に包装されて渡されたパンを前に抱えるようにして持った。横にずれ、会計の順番をミネルに譲る。

「はいはい。いつもご贖戻してくれてありがとねー」  
「だって、この店のが一番美味しいと思うんだもん」

ミネルの買ったパンを袋に入れながら、フィアットは最初に見せた瀬踏みする視線をミネルに向けた。

「それにしても、ミネルちゃんが男の人を連れているなんて珍しいわねー、なんてね。今までこんな事あったかしら？ それに店に入るまで手を繋いで満更でもない感じだったねー」

そうフィアットに言われたミネルは慌てて、

「見てたの！？ ……てか、そういう関係じゃないし！ ただ道案内を」

「そういう関係って何だろうね」

そう言うフィアットは、してやったと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべた。

「っ！！」

ミネルの顔が急速に赤らんだ。

何か言いたそうに口を開閉する。ただ空しく言葉は出てこなかった。

「ほんとに街案内をしてもらってただけです。この街に来たばかり

で右も左も分からないので……」

リントは助け舟を出して、ミネルを見やる。

リントの視線に気づくとミネルは慌てて顔を逸らした。顔の代わりに向けられた耳が同じように赤く染まる。

リントはミネルのこの拳動に戸惑った表情を浮かべて、どう対処すれば良いか自問した。

ただし、リントは女性との交流が毛頭ないため、無意味であった。

「青春だねー……」

カウンターではフィアットが二人に暖かい視線を送っていた。

ただし、当の本人達はなんとも気恥ずかしい空気は無言である。

そのまま無言のうちに二人は店をでた。

そうして通りを進むも暫く会話がなかった。リントの三歩先をミネルが振り返ることなく歩いている状態が維持される。

場の空気に耐えられずリントが声をかけようと口を開きかけると、それを制す形でミネルが突如振り向いた。

「ねえ、リント君……」

言葉を紡ぐミネルの顔は未だ赤らんでいるも、その視線はリントにしっかりと向けられている。

リントが不思議がっていると、ミネルが言葉の続きを吐き出した。

「あのさ……君付けじゃなくて呼んでもいい？」

ミネルは隠れた前髪からリントの様子を窺うように上目遣いを送

る。

前で組まれた両手が忙しく開閉を繰り返していた。

うっ……。

リントはその仕草に胸をドキッとさせられた。

「べ、別に構わないよ」

自分の顔が火照るのを感じた。リントは照れくさくなり、視線を逸らして了承した。

たちまち少女は表情を明るくし、

「あたしのこともミネルって呼び捨てで呼んでよね」

声の調子を一段高くして言った。そして軽やかにくるりと反転し歩みを再開する。

その足取りはまるでスキップするかのようには軽快だった。

「分かったよ。それじゃ、引き続き街案内を宜しく、ミネル」

朱に染まる顔に周囲を明るく笑みを浮かべ、

「任せてよ」

ミネルは心地よい笑い声を上げた。

そうしてそれから視線を故意に逸らすことなく、朝よりも親しげに会話が弾んだ。

そうこうするうちに二人は開けた場所にたどり着いた。

「ここでお昼にしょ」

そうリントが告げられた場所は、都市に設けられた公園のようだった。手入れされた芝生が一面を覆い、囲むように木が植えられている。その空間では子供達が複数で駆け回ったりして遊ぶ姿や、木陰で読書を楽しむ人の姿も見受けられる。

「こんな憩いの場所があるんだね」

ずいぶんと近代的な街だと思っていたリントは、感心するように言葉を発した。

この長閑な空間にいと心が穏やかになるような気がした。

「ほら、あそこの空いている場所に座ってパンを食べようよ」

ミネルに言われるままに芝生の上に腰を下ろし、紙袋を開けると香ばしい匂いが立ち上った。触ればまだパンはほんのりと熱を発していた。

「それじゃあ、いただきます」

リントがまず選んだのはクロワッサンのサンドだった。その端を一口食べる。

ホントにおいしい。

率直に素直にそう思った。

外側はパリッとしていながらも、中はフワフワとしている。その食感にはさんである具材ともマッチしていた。

「すごく美味しいね」

「でしょ。リントに気に入ってもらえて良かった」

ミネルがカスクルートを片手に安堵するような様子を見せた。

二人は、時折談笑を挟みながら、パンを食べ終わると芝生の上に寝そべった。

「はあー、絶好のお昼寝日和だね」

そんなことをいうミネルは、もはや寝そつである。

実際天気も良く、気を緩めればすぐにでも意識が飛びそうであった。

けれど森でしばらく過ごしていたリントは常に警戒する癖で、そうする気は毛頭なかった。代わりにミネルが寝ないように声をかける。

「ミネル、寝られると街案内してもらえないんだけど」

「じゃあさ、あたしが寝ないように何か話をしてよ。はい、リントはどこ出身なの？」

どうやら今すぐに、起き上がる気は無いらしかった。

リントもそこまで鬼になりたくないのです、ミネルの希望に答えることにした。

「うーん、小さい頃のこと覚えてないけど、昔は潮の国エケナシアに住んたかな。そこから各地を点々として島の国に来たんだ」

潮の国、国土の一部が海に面し、透き通ったコバルトブルーの海が有名な国である。

観光など商業分野において発展しており、連合の加盟国になっている。

「へえ、潮の国かあ。白塗りの町並みに青々とした海が有名よね。それに海の幸が豊富だし」

「そうだね。まあ漁業よりも遺跡や島巡りなどの観光業が盛んな国だったかな」

「いいなあー、旅行で行ってみたいなあ」

意気揚々と話すミネルに対しリントは詫びる思いを抱いていた。

「ごめん、嘘ついた。ボクのご事は詳しく話せないんだ。」

リントは、表には何気ない風貌を装って横で寝そべる少女を見下ろしていた。

「それじゃあ、とりあえずここまでにしとこうか。もう夕暮れ時だもんね」

街の中央区と東区の間を流れる河川にかかった石橋の上でミネルが言った。

公園で一休みをした二人は、その後再開した街歩きのひと段落を迎えた。

見上げた空はリントが森でよく見た茜色に色づいていた。

地上に視線を戻せば、帰路につく人々が朝とは逆流して通りを練り歩いている姿も見られる。

「今日一日ありがと、ミネル。結構この街のことは分かったよ」

「うん、どういたしまして。まだ全部は案内出来てなくて、おおまかな案内だったけどごめん」  
「十分だよ。本当にありがとう」

結局一日、一緒に街を歩いたのか。はあ、ボクはあまり人と深い関わりを持ってはいけないうちに。

じゃあ、また近いうちに会えたら と足早に、リントは挨拶をして別れようと手を上げた。

その口から別れが飛び出す前にミネルが言葉を続けた。

「いつでもギルドに来ていいんだからね。あたしが相談に乗ってあげるから」

虚をつかれ、リントはミネルを正面から見た。

その言葉の真意がギルドとしての文句なのか、ミネルの意思であるのか確かめようと思った。が、知る前にミネルは手を振って離れていった。

この上げかけた手のやり場は……。

リントは小さくなる背中に、相応に小さく手を振って反対に歩き始めた。

## 理想と現実2（後書き）

パンの名前をどれにしようか迷いました。そのうち書き換えるかもです。ほんとにパンってたくさんあるんですね……。どっかにパン屋に並ぶパン一覧ってないかなあ。

### 理想と現実3

翌日の東瀛<sup>トウエイ</sup>も昨日と変わらない街並みであった。

人々は同じように勤め先へと出向き、駆動車が通りを埋めていた。

賑わう街、仕事に勤しむ人々。

とは間逆に、人気の無い早朝の資料館で、一人少年が端末の画面を凝視していた。

明かりが灯り『検索欄』の文字が並ぶ枠の中へと、悪戦しながらも単語を打ち込んでいく。

「こんなモノが出来てたなんて知らなかったな……あ」

呟きながら、文字を打ち間違える。

少年 リントは苦虫を噛んだかのように顔を歪めた。そうして髪を掻き乱す。

「あああもう！！……はあ、打つのも精一杯とか」

それでもなんとか必要な言葉を打ち終えると、画面の矢印<sup>カーソル</sup>を検索に運ぶ。

瞬時に画面が切り替わり、ズラリと並んだのは『スーパニール・レディロック』という名前を含んだ記事の数々。

一番上の検索結果を開くと、リントの眸に太字黒塗りの言葉が飛び込んできた。

『レディロック中將の部隊含む三隊、消息を絶つ』そんな見出しだった。

今から一〇年前の記事であった。

確か剣帝が亡くなったのも一〇年前である。

そうして知った事柄をリントは用紙に乱雑に書き込んでいく。後でこれらを精査すれば何か分かるような気がしていた。

一旦両腕を天に突き刺すように伸びをして、リントは他に目新しい情報がないか検索を継続させる。

出身、年齢、家族構成、職務、人となり、どれも初見の事柄ばかりであった。

それほどまでに、バロック スープニールは己を語ることをしなかった。

リントはただ寡黙に端末を食い入るように見ていた。

そのため経過を忘れ、気付けば資料館の閉館時間を通知する曲が流れていた。

「やっぱ、もうこんな時間に!？」

どうやらもう夕刻になっていたようである。リントは文字で埋め尽くされた用紙を四つ折にして、ズボンのポケットに突っ込むと、脱兎の如く出口へと向かった。

『館内では走らないでくださいよ』

そんな声の主を見ずに心の中で手を合わせると、慌てて館の外に走り出た。

館外に出て、外の暗さに舌を巻いた。やってしまったと言わんばかりにリントは頭を掻いた。

「うー、お腹が空いたなあ」

グ~~~~と、くぐもった音を上げるお腹を抱えるようにしてリントは通りを歩いた。

朝から何も食べずに情報収集に没頭していたのだ、それは至極当然であった。

空腹を満たすために、どこか食事が出る場所を探そうと思いつつ。

『あ！ 見つけた』

そんな時に、まだ資料館が見える距離で声がリントのすぐ背後から上がった。

その声に聞き覚えがあった。振り返ってみれば、人込みの中に赤みがかつた髪をした少女が息を切らしていた。

「ミネル、どうしたの？」

「……ギルドに来るかなと思ってたのに結局来ないから」

どうやら一日、リントのことを待っていたらしかった。何か粗相をしたような気がして、リントは気まずそうに後ろ頭を掻いた。

「昨日、いつでもって言ったからさ。それじゃあ今日はいいかなって……」

「よくない!!」

ええええええ!?

何故か叱責されたリントは、返答に窮した。



「じゃあ、どれくらい？」  
「……………」

リントは押し黙るしかなかった。確かにお金は持っていたが……  
ゆとりはなかった。

そのためミネルが言った言葉に我が耳を疑った。

「もししばらくこの街にいることになるんだったら、ギルドの手伝いをする？」

「へ？」

つい頓狂な声を上げたリントは、何を言い出すのかといった顔でミネルを目視した。

「今のままだと金銭的に困窮するでしょ。ギルドの仕事をするれば報酬で俸給が入るし」

ミネルが話す内容は、一時的なギルドメンバー加入の相談であった。

「お金が底を尽きると困るし、稼ぎ口を紹介してもらえるのはいいんだけど……………」

あまり人と接すると、軍に知られてしまうような。

そんなリントの心を見透かしたようにミネルが言葉を続けた。

「あとマスターが、<sup>おそ</sup>懼れは怖れを招く、とか言ってたよ」

「マスターが？」

「そう。昨日ギルドに戻ったら、マスターにリントがお金に困ってるかもって話してくれたんだ。んで、ギルドにでも働かせてみないかって」

リントはあのマスターの慧眼すいがんに感嘆した。

でもあの見た目でも随分な年寄りなんだよね……。

年相応に見られなくて大変そう、などと徐々に憐れむような気持ちになっっていく。

「それじゃあ、これからギルドに直行ってことで」

唐突にミネルが留守になっていたリントの手を引いた。

ああまたこのパターンかと、苦笑しながらリントは大人しく従った。

ふと見上げた荒涼とした夜空には、恒河沙の如き星々が瞬いていた。

ギルドに辿り着いた二人が中に入ると、マスターはギルド二階で席に着いてなにやら食事の真っ最中であつた。見ればテーブルには島の国の郷土料理らしきものが置かれている。

マスターは器用に箸を使い料理を咀嚼そしゃくしていた。それだけでなく、どうも飲酒しているようであつた。料理の盛られた皿の脇には既に空の瓶が数本転がされていた。

「およ？ リントか、うちの娘とよあそびはいかんぞい。若気の至りであつてものお、一線は越えてはいかんぞい」

マスターがリントに気付いた。全身の毛皮で判別しにくかったが、どうも既に酔っているようである。毛皮から覗く鼻先が見事な赤鼻に染まっていた。そうして饒舌に呂律が空回りの言葉紡ぐ。

「マ、マスター何言ってるのよ!！」

顔だけでなく全身が急速に赤くなったミネルが慌てた様子を見せた。ボンツ、と音を立てて蒸気が出そうな勢いであった。

「なんじゃ？　じゅぼしか」

目を丸くしたマスターの手から箸がすり抜ける。カチャン、軽快な音を立てて箸が床を転げる。

「だから、違うって!！」

「何じゃ、つまらんのー」

リントのギルド加入などそっちのけであった。一人蚊帳の外でリントは事の成り行きを見守っていた。それよりもテーブルに並べられた料理に意識は集中していた。

お腹減った~~~~。

「ていうよりリントを連れて来いって言ったのは、マスターでしょ

「!」

「……………そうじゃった」

マスターは目を睨り手を叩いた。どうやらこちらは一段落着いたようである。

「しつかりしてよね。それじゃあリント、つてもしも〜し」  
「え?」

如何せん空腹に悩まされているリントは、全く会話に参加していなかった。ふいにミネルに声を掛けられ慌てた素振りを見せる。ジト目になるミネルは腰に手を当てて、溜息をついた。

「よし、はなしはあとじゃ。ほれ、リント。どれでも喰ってかまわんぞい」

横からマスターが割り込み、新調した箸をリントに寄越した。リントはこのご厚意に預かろうと思った。さすがに空腹でこの誘いを断る意思は存在していなかった。

「はあ、リントは朝から何も食べてなかったって言ったもんね」

諦めた様子で、ミネルは微笑んで置かれた椅子に腰掛ける。

リントは夢中で料理を食べていた。目の前に並べられた島の国の料理は、主に米が主な主食としてあった。他に野菜と一緒に煮込まれた麺類料理もあり、どれも食欲をそそった。

「いい食べっぷりじゃの〜」

「マスターは飲み過ぎよ!」

「酒は飲んでも飲まれるな〜、じゃろ?」

「既に飲まれてるし……」

破顔させたマスターは、暫く酔いから覚めることはなかった。やっと本題に入った頃には夜が深まっていた。

「とりあえず、すっかり日が暮れとるから明日の午前中に来とくれ」  
やってしまったとばかりにマスターは頬を掻き、申し訳なさそうにしている。

その横では溜息が絶えないミネルが額に手を当てており、ついつい食事に夢中になっていたリントも視線を下に向けがちでいた。

「えーっと……それじゃ、こいつを見といてくれ」

そう言われリントが手渡されたのは、一枚の案内用紙。加入試験の主な内容などが書き込まれている。

「やっぱり、何か試験をやるんですね。でも、実技って何するんですか？」

用紙を見て、リントは訊ねた。

「剣術の基本などの。ギルドの仕事は人助けだけじゃないってことじゃ。タイラント退治なども請け負ったりしとるからの」  
「なるほど……」

結構大変そうだなあ。

リントは街案内や、街でのトラブル解決など戦闘行為は無いことばかりだと考えていた。

「安心していいわよ。入って早々、討伐の依頼は任されないので」

どうやらリントの不安は顔に出ていたようで、ミネルが指摘した。

それでも、人との交流があることを考えれば、あまり安心して  
もいられないのがリントの実情でもあった。

「そう暗くなることじゃないぞ。意外にも仕事をこなしているうち  
に、自分が悩んでいることがちっぽけに思えてくるかもしれんぞい」

バシッバシッとマスターがリントの背中……ではなく脹脛の辺り  
を叩く。

「うっくん。やっぱり小さい」

「じゃから、聞こえとるぞ……」

「……ぶっ」「……」

沈黙のあと堪えきれないといった風で、リントとミネルは吹きだ  
す。マスターは小声で「もう少し大きければ威厳が滲み出るじゃろ  
うか」と呟いた。

なんとも和やかな場がリントには心地よかった。少なくともこの  
時間は何も悩まずに、笑っていられた。

そうしてそんな温まる気持ちのままに、リントはギルドを後にし  
た。

## 遙か上空から

『おいおい、ホントにハコビドリ一羽に二人乗りって平気かよ!』

風を切る音に混じって、臆するような声が上がる。

頬を打つ風がうずく痛みを伴い始めているだろう。

頭に角を生やした少年が前方に座る男に声を荒げていた。

「なんとかなるのを信じるしかないんじゃないの?」

なんともあいまいな返事を返したローズグレイの長髪の男の視線は、常に前方に向けられている。まるで何かを探しているようであった。

眼下では目に止まらぬ速さで、森が後方へと流れていく。

「てか東瀛ってどこにあるか知ってんのか?」

「分かってるんだが、あとどれくらいの距離かは知らん。だいぶ日も暮れちゃったしな」

ハコビドリに無理に二人乗りをしている者　ペールとヴァンの

二人は無事に森を脱していた。

今は軍から再び拝借したハコビドリに飛び乗り、リントの後を追う道中であった。

「ペールがこんなんじゃない、リントの奴……無事に辿り着けてんのかな」

曇らせた表情でヴァンが呟いた。暗い顔を隠すように片手で覆う。

その鬨りの原因は単に心配をする気持ちだけでなく、森での一件を引きずっていたためであった。ヴァンは森でリントを置いて逃げたことをずっと後悔していた。今までの思い出を忘れ、恐れたことに恥じ、悔いていた。

早く会ってきちんと謝罪したいと願う思いは日増しに強くなっていた。

はあく、リントに何て言って誤りやいいんだ……。話をきいてくれっかなあ……。

ずうううんと重いオーラを纏うヴァンに、ハコビドリが重たいと言いたげに二度三度嘶いなないた。

この二人を運ぶ健闘を見せているハコビドリもまた、軍の所有物である。

リントを逃がした後、厳しくなった警備や周辺の搜索をパールとヴァンは苦勞してかいくぐった。だいぶゴリ押しな部分があったのが事実で、計画では二頭のはずが結果、一頭で終わっていた。

それでもその後の軍の追跡をかわしながら、ここまで飛翔を続けてこれていた。

二人とも「どうか無事に着けますように」と、ハコビドリを応援するしかなかった。

「……あ！ ほら左斜め前方！ あれがそうだろ！？」

ヴァンの眸は遙か前方に、上空から見て楕円に輝く街を映していた。

パールもヴァンが指差す先を確認し、ハコビドリの手綱を操る。

緩やかに曲線を描いてハコビドリは進路を変える。

あそこが目的の街か……ん？

「なあ、ペール。なんか、下の森が近づいてるような気がねえ？」

ふとヴァンが疑問を投げかけた。ペールは無言のうちに眼下を見渡す。

確かに下に広がる黒々とした森が近づいていた、というよりも二人の高度が下がっていた。

どうやらハコビドリが休息を取るつもりらしい。ここまでほとんど跳びつばなしであるため、当然といえば当然であった。

街までの距離を考慮すれば、ハコビドリの回復を待った方が早いか。

ただこのままいくと、降り立つのが森の中に確定しそうである。安全が確認されない夜の森に入るとは、死ぬことと同意であった。

少しでも森の外側に飛んでくれ。

なるべく森の外を望むのは、身の安全の確保だけではなかった。

目的地が目の前に見えている故に、早く辿り着きたいと気持ちが急いでいた。

「がんばれよトリ！！ もう少し、あと少し森の外に！」

ヴァンがついに声援を送り始めた。

ここでハコビドリが最後の頑張りの如く、力強く羽ばたき高度を上げた。ぐんっと、視線が高くなる。

がすぐさま滑空の体勢へと変わり、森への着陸が決定した。

「「おお!? おおお………」」

一瞬沸く声はすぐさましぼんでいった。

『トリのバカヤロー!! 根性なしー!!』

ヴァンの怒鳴り声が空しく響いた。

「まあ、存外楽に抜けたからいいんじゃないの?」

ペールはそう言って後ろを見やる。そこには未だにブツブツと文句をたれるヴァンがいた。

森の外には、背の高い雑草が茂る草原が広がり、虫の音が聞こえる。なんと開放的ともいべき空間であった。

ペールの背後から現れたハコビドリが草むらの上に座り込み、動かない宣言をした。どうもここでの野宿を所望らしい。

夜の森では、おちおち寝てもいられないために二人は、ハコビドリを引っ張って森の終わりを目指したのだった。

ハコビドリに続く形でヴァンはそれに抱きつくように倒れこんだ。心底迷惑そうなハコビドリが、ぐわっと巨大な口を広げる。

髪を掻き<sup>むし</sup>違ってペールも、その横に仰向けに寝転んだ。

予想よりも手間がかからず、街へ辿り着けそうであった。このぶんであれば、あと数日のうちであろう。

「……そういや、街の近くになると木のサイズが奥に比べて、ずいぶんと矮小になってんのって何で？」

唐突にヴァンが問いを口に出した。

「何でだったか……、確か抑制作用の植物ホルモンとかを散布したりしたんじゃないかったか？ 簡単に文明の力ってやつだな」

自信がないといった風にペールが答えた。

人類が一度奪われた生活の拠点を奪還したのは、地表を覆う森を切り開き、その侵食を防ぐ科学に起因する。今なお森の侵食に怯えることなく過ごしているのもその恩恵だ。

そうして発展の足がかりを創り、人類は再度の繁栄をした。

だが街が形成され、世代が変わることに、そんな事実は人々の知識から薄れていった。

## 始まりの生活

『落第点ギリギリってところじゃな』

苦笑したマスターが手にした記録用紙に書き込みをする。

今現在リントは、ギルド加入の試験最中であつた。

紋朱蝶は公認された民営治安維持組織であるらしく、意外にも世界各国にその支部がある。本部は同盟最大国家であり世界首脳国家の一国、沙の国ヘルベキスタンに存在する。そうした事情から、正式な形での入会が必要になつていた。ある程度信頼できる者をメンバーに取り入れなければ、市民からの信頼を得られない。

ただどの支部でも言えることだつたが、この試験を受けられる者はその場所のマスターに気に入られるか、特逸した能力が必要のようだつた。

リントの場合は前者とも後者ともどつちつかずであつた。少なくともリントとしては前者であつてほしかつた。

やっと知識問題の試験を終え、リントは一息ついた。大きく伸びをすると、軽快な音をたてて身体の骨が鳴る。普段、じつとする機会がないために肩が凝つていた。

ふうふううううう乗切つた、大きく深呼吸してテーブルに突っ伏する。

筆記の試験会場はギルド二階の空き部屋が当てられ、部屋にはリントとマスターの二人だけであつた。

眸に映るのは、日に焼けたテーブルと妙に座高の高いイスのワン

セットのみの簡素な部屋である。

マスターはどこか別室から座布団を持参し、その上に胡坐をかいていた。

「にしても、試験を課さねばならんとは難儀じゃのう。わしの推薦状だけで決められんのかのー」

つつい愚痴をこぼすマスターが、いじましいと言いたげに口を尖らせる。リントも釣られて相槌を打った。

「これで、残りは実技試験ですよね？」

「そうじゃ、場所はギルドの裏じゃ。そこに演習場所が設けられておる」

先を歩くマスターを追って、リントが部屋を出るとミネルが待っていた。どうやら試験結果が気になっているらしい。

「筆記試験は落第点ギリギリだったさ。あとは実技次第かな」

「頑張つてね。リントなら実技は余裕よ。なんたって、不良七人相手に余裕だったんだから」

うつつ、なんかすっごい期待されてる。それに不良っていったって、戦闘はズブの素人だし。

ミネルの期待は正直嬉しくあったが、変にプレッシャーとなっていた。

「ミネル、きちんと仕事もこなしておくんじゃぞ……」

マスターがジト目になって、ミネルに苦言を呈した。

「わ、分かってるわよ。それじゃあねリント」

後ろ髪を引かれる様子でミネルはこの場を立ち去っていった。

リントはその姿に背を向けるとその表情を切り替えた。

最終試験の実技。筆記のような見るも無惨な結果に出来るはずがなかった。

リントが辿り着いた場所は、広い空き地のような空間だった。周囲を塀が取り巻き、周りからは見えないうちにされていた。下は剥き出しの黄土色の地面であった。

「それで最後の実技なんじゃが、わしとの手合わせでどうじゃ」

「えっ、手合わせですか!？」

リントは驚いて目の前の老体を凝視した。さすがに成り立つのだろうか。

「この体格さで……。」

「何か失礼なことを考えとるな」

「いやいやいや、まさかそんな、失礼なことなんて考えてませんよ」

慌てて首を横に振るリントにマスターはいぶかしむ視線を向けた。その手の疑念を忘れさせようと話題を振った。

「それで、武器の使用は禁止なんですか？」

「あー、武器はこちらで用意した木剣を使用してもらうぞ。とりあえずリント、おぬしが腰に下げている得物はその棚の上に置いて

おくが良いじやる」

外套の下で人目につかないようにしてたのに分かるなんて……。

瞳目とつめくしてマスターへの評価を改めた。素直に腰の小太刀を鞘ごと抜き去る。

一瞬、リントはマスターの眼がまなじりが細められたように思った。が、もう一度見直した時には何もなかったようであったため、杞憂きゆうだと思いました。

リントは外套を脱ぎ平服の身軽な格好になった。その状態で柔軟運動を行い身体を慣らす。

小太刀を安置して元の場所に帰ると、マスターより木剣を渡された。振ってみれば丁度刃の長さは片腕分ほど、扱いなれた愛用の得物に近い間合いであった。

「あれ……、マスターは剣じゃなくて、棒術ですか」

リントの視線の先でマスターが操っていたのは、五尺ほどの棍棒。マスターの身の丈の倍以上はあった。

「……さすがにこの体格さを埋めるには、得物で稼ぐしかないじゃろ」

やっぱりそうだよな。でも、この身長差はどうもやりにくいな。

あはは、とリントは乾いた笑いを浮かべつつ、マスターを見据えた。視線の先でマスターは手の中で、棍棒を転がしては自在に操ってみせる。

「遠慮はいらんぞい。わしが満足するまで続けるからの」

「分かりました。胸を借りさせてもらいます」

「ふっふっふ、最近運動不足じゃったからの、感覚を取り戻すには丁度良いかの」

そう言っつて、手合いは始められた。

ギルド加入試験最終項目、技量審査。試験内容は各支部に一任されており、武術やら操術、体力測定など多岐にわたっている。ここ東瀛支部ではマスターとの模擬戦であった。

一塵の砂煙が舞い、マスターは一気に跳躍し距離を詰める。すかさずリントは初撃に構えた。マスターの矮躯から繰り出されるのは、突きの連撃であった。リントが木剣の腹で防ごうとするも、数発を身体で受けてしまう。

「くっ、った」

鈍い痛みが走り、リントは顔を歪める。その眸はマスターが矢継ぎ早に横薙ぎの一撃を繰り出すのを捕らえた。咄嗟に後ろに跳び、無様に転がりながら寸前でかわす。

「ほう、避けおったか」

全然元気じゃん！ 何が運動不足気味だよ！！

心で悪態をついたリントは、攻めに転じようと木剣を構えなおす。マスターが突き出した棍棒を見定めて、木剣でそれを大きく弾く。

そうしてがら空きになった腋目掛け、木剣を佩いた。それをマスターは難なく跳んでかわし、その状態から棍棒を地面に突き立てて、リントの頭を越えるという芸当を披露してみせた。

「なっ……」

言葉を失くしたリントの背後に着地すると、マスターの棍棒が逆にリントの右脇腹を捉えた。

まずいつー！

間一髪、リントは剣の腹を滑り込ませる。そうして受け止めたところを支点にマスターの勢いを逸らした。マスターが体勢を崩し、絶好の機会を得る。

そのままリントは踏み込みから肩口目掛け袈裟切りの一撃を放った。半ばかわされることを予感しての一撃。すでに次の行動を考えていた。

これで決める。

マスターが咄嗟に跳ねてかわした瞬間、リントは大上段から切り落としを放った。

そうしてその一撃がその老体の身体を弾く寸前で止めた。

「あゝやられたわい。ふうむ。随分と剣の扱いには慣れとるようじゃの。さすがじゃ、なかなか見所がある」

全く疲れた様子を微塵も見せず、マスターは悔しそうな表情を浮かべた。

「マスターも随分と棍棒を自在に操って、正直慣れない相手に満足に出来るか不安でした」

照れ隠しに謙遜して、リントは服の土ぼこりを払う。

「ふっふっ、よく言うわい。それじゃあ、もう一戦いくかの」

「えっ!? まだあるんですか」

「わしが満足するまでと言ったじゃろ」

「……………確かに、てゆうより疲れてないんですか」

随分と快活なご老体にリントは苦笑を隠しきれなかった。

カチャカチャカチャカチャ…………、小気味よい音が聞こえてマスターを見れば、その手の中で棍棒がその形なりを変えていた。

細かく分裂し、一つ一つが鎖で連結した棍棒 多節棍。  
マスターの不敵な笑みに自分の心配を憂慮ゆうりょしなれなと思った。

結局続けられた居合いは一戦だけで、先ほどのが陳腐に思えるほどマスターの動きが飛躍した。どうも先ほどは手加減をしていたらしく、多節棍による融通無碍な動きもあいまって、最後にダメ押しの遠慮ない一撃を喰らったリントは地面に仰向けに転がった。

マスターは相当な腕の持ち主であった。

「はあー、大人気ないですよ、マスター」

「ギルドの長が負けていては示しがつかんじゃろ」

「やっぱりそれが本音ですか…………。はあ、あつ、今日は雲一つないな。」

リントは大の字に寝そべって、空の蒼さを眺めた。ぐうぐう、と突如腹の音が鳴る。

天辺に近づいた太陽を見れば、そろそろ昼時なのだと分かる。

今日の昼はどこで済まそうかと考え出したリントの耳に、少女の声飛び込んできた。

「リントもマスターもまだ此処にいたんだ。そろそろお昼にしようよ、もう準備出来てるから」

ミネルが扉を開けて、姿を現した。どうも二人を呼びに来たらしい。なんとも丁度いいタイミングであった。

「ミネル……、おぬしはちゃんと仕事をしたのかのー」

いぶかしむ粘着質な視線をミネルに向けるマスター。ミネルは慌てたように首を横に振った。

「ちゃんとやったに決まってるでしょ！ ほら、試験が終わったなら中に入ってよ」

ミネルの背中を追ってリントがギルドの二階へ行くと、空腹感を増長するような料理の香りが漂っていた。一室に入ると、テーブルに並べられた料理が目止まる。

「随分と豪勢な食事だね」

リントは息をのんで、盛り付けられた料理を見渡した。リントの後に続いて入室したマスターも驚いた様子をみせる。

「まだちゃんとお礼をしてなかったから。祭の日にリントが私を助

けてくれたことのお返しに、あたしの手料理を振舞おうかと思って

ほんのりと赤らめた頬を隠すように顔を俯きがちにしてい、ミネルは言った。

「……………？ 今なんて言った？」

「え……………？ 私を助けてくれたお礼に……………」

「いや、その後の……………」

「あたしの手料理を振舞おうかと」

えっ、ええええ！？

照れるミネルとは対照的に、リントは驚いていた。別にミネルが料理出来ることが意外だったのではなく、並べられた料理の完成度が卓越していた。

料理屋顔負けの仕上がりであった。

「リントは幸せもんじゃの〜」

マスターはやれやれと首をすくめた。



「まあ、た、バチルナの悪癖あくへきが出たな。ふむ……リントだったな、役得だと思って耐えてくれ」

猫科の生物を彷彿させるような顔立ちの獣人の男が、困ったように告げた。

「何が悪癖よ、可愛いものが好きだけよ。ちなみにあなたは論外よ。マスターは許容範囲内」

そう言つて鼻を鳴らす女性　バチルナ。鼻白んだ様子で獣人の男はそっぽを向いた。

そんな様子を見て、はしゃぐ子供　どうも双子らしい、が笑い声を上げる。

「ドンマイ！　ベルモント、仕方ないよ。君はおっさんだもん！　！」

壺にはまったように笑い転げる二人に、獣人の男　ベルモントは不愉快そうに呻いた。腕を前で組み、双子を睨む。

「マスターは爺ジジイだろうが……」  
「……聞こえとるぞ」

ベルモントは飛び上がるほど驚いてみせ、マスターは頭痛がするかのように頭を押さえる。

「おぬしらは自己紹介せんのかの〜」  
「バチルナさん！！　リントから離れてよ。いつまでくっついてるのよー！！」

マスターの声を掻き消して、ミネルの声が響く。そしてバチルナの腕からもぎ取るようにリントを引き寄せる。当のリントはまるで玩具おもちゃにされていた。

「何よ〜ミネル。いいじゃない」

「駄目！！バチルナさんに預けたらリントが毒されるもの」

リントを挟んで火花を散らす二人。そんな二人の様子に一層沸き立つ双子はお互い交互に声援を送る。

「ガンバレ〜、いつけー！。やっちまえー！！！」

もはや何がしたいのかわからない。途中から野次へと変貌している。この場は何とも一種のお祭り騒ぎへと発展していた。

ベルモントは顔を押しさえて、重量感のある溜め息を吐き出した。いつの間にかその鋭角的な耳がピタリと伏せられている。その理由はものの数秒で判明した。

『おぬしらしい加減にせんか！！！！！！』

稲妻がこの場に落雷した。主にマスターに。

直後、全員が身体を硬直させた。

「おぬしら、減給されなくては自己紹介を済ませるんじゃない」

その言葉に全員がしまったといった顔をした。一方、リントは解放されて、マスターの隣に佇立させられた。すぐさまそれを囲むように皆が半円状に並んだ。

「んじゃ、まず私から自己紹介」

最初に啖呵を切って、身を乗り出したのはバチルナと呼ばれた風人の女性。気品ある出で立ちで、品位の高さを窺わせる。

ちなみにリントに初対面で飛びついた人物である。早々に礼節を度外視していた。要注意人物に指定。

「わたしはバチルナ・ベル。ギルドではお姫様って呼ばれてるわ」

あれ？ お姫様はミネルじゃなかったっけ。

再び疑問符が浮かんだリントの耳に双子のひそやかな？ 言葉が聞こえた。

「「お姫様じゃなくて、女王様だよね」」

実に器用な双子である。寸分違わず、同じ台詞を言ってみせる。どうも声を潜めているつもりらしいが、普通に聞こえた。

「同感だな。それに姫って言えばミネルだろうに。あいつの歳で姫は無理があるだろう」

深く頷いてベルモントも同意する。

「あら？ 何か……言ったかしら三人とも？」

頬をひきつらせて、バチルナは双子とベルモントに鋭い双眸を向けた。拳が小刻みに震えている。

「「「いや、何も……」「」」

「まあいいわ。リント君、困り事があれば気兼ねなく相談してね」

手を振ってバチルナは身を引いた。ふうふうと、周囲から溜息が零れる。

「「それじゃあ次は僕達だね」「」

言うのが早いか、双子がリントの周りを回り出した。と、急に飛びついてきた。

「「何かお兄ちゃんって懐かしい匂いがするんだよね」「」

その言葉に冷たいものを覚えたが、双子の表情は何とも明るいものだった。

「ええつと……」

元気な子達だなあ。

そんな第一印象だった。リントから離れた双子は仲良く、二人手を繋いで目の前で和気藹々（わきあいあい）としている。「「それじゃあ、自己紹介するよ」「」双子は共に口を開いた。

「「僕がシュウで、僕がミュウ」「」  
「……………」

暫し双子を除いた全員は沈黙した。

「自己紹介まで同時にやらなくてもいいわよ」

やれやれと肩を竦めて、ミネルが双子に告げた。

「僕がシュウだよ」

挙手して自己アピールした方は、全身水色の黄色星形模様の服に身を包んでいた。

「僕がミュウだよ」

後から反対の手を上げた方が、そう言った。こちらは全身黄色の水色水玉模様の服に身を包んでいた。

服装の違い以外は見分けがつかないほど、瓜二つな双子であった。一卵性双生児というのであつたらうか。

『ちなみにミュウは女の子よ』

ミネルが解説を付け足した。ミュウと名乗った子も「そうだよ」と気の抜けた返事を返す。

「やっと、俺の番だな」

暇を持て余した様子の獣人が口を開いた。見るからに恰幅のいい体躯。軍人であつたとしてもおかしくはなさそうだ。リントの頭四つ分も上に頭があるほどの巨漢だった。

「俺はベルモント・ガックス。見ての通りの獣人で、化狐族出身だ。まあ、もう分かつたと思うがギルドの連中は頭が柔らかい奴ばっかりだからな、畏まる必要なんてないさ」

白い歯を覗かせて、ベルモントは笑った。随分と人当たりの良さ  
そんな雰囲気醸し出していた。

「さてと、挨拶が済んだところで、リントに仕事の紹介を兼ねて、  
指導してもらいたいんじゃないか」

早速本題の仕事のノウハウについての話になる。ここですかさず  
手が上がるが、マスターは無視した。

「ベルモントは午後は依頼が入っておったな」

「ええ、銃器密売の現状捜査です。いかなりこれに連れて行くのは  
ハードですよ」

「じゃな」

視線をバチルナに向けたマスターは、相変わらず拳手された手を  
無視する。

「バチルナは午後の依頼では、市場のトラブル解決じゃったな」

バチルナは困ったように首を横に振った。

「それが、離街道で立ち往生してる行商人がいるみたいで、森に向  
かわなきゃならなくなったのよね。」

惜しいことしたわあ、せっかくリント君に手取り足取りご教授し  
てあげられたのに」

心底残念そうにバチルナは天を仰いだ。頬に手を当て、リントを  
見る。

対照的に一人、ガッツポーズを取った人物がいた。

「ふむ、シユウとミュウでは用が足らんしの」

そう零すマスターの視界で、拳手された手が左右に振られる。

だがマスターはことごとく無視を決め込んでいる。いよいよ我慢の限界が来たらしい。

『なんで無視するのよ!!』

あつ、キレた。

ミネルが頬を膨らませ、マスターに詰め寄っていた。

「ミネルじゃ私情を挟みそうじゃしの」

「ちゃんとやるわよ。バチルナさんとは違うもの」

「何でわたしの名前を出してくるのかしら」

青筋を浮かべてバチルナが身を乗り出した。一触即発のムードに一変した。

「いい加減、話を進めさせてくれんかの……」

マスターは心労に目頭を揉んだ。なんとも個性豊か、愉快的なメンバーとの仕事はこうして始まりを迎えた。

リントは確かな喜びが胸にあるのを感じていた。

## 始まりの生活2（後書き）

すみません。登場キャラたくさん増やしました。

文章で読んでいて変とか、読みにくいとか、全然駄目なら教えてください。

## 始まりの生活<sub>3</sub>（前書き）

ここまで書いてきて、何だか自分の文体というか、書きかたとい  
うのがかわったよう……。う

まあ、好きなようにやります。個人的には今のほうがいい気がし  
ます。

はい。

そのうち、過去の方も大幅に書き直すかもです。

### 始まりの生活3

快暖な気温が心地いい。絶好の秋晴れ、昼過ぎの東瀛トウエイの北西地区の住宅街。

昼食を摂ったであろう人々が談笑をかわし、通りを歩いている。既に駆動車の通りはなく、随分と穏やかな軒並みが続いている。

石畳みちの路をリントは軽快な足音をたてて歩いていた。

その首下には、水晶と共に朱い翅の蝶の形をしたペンダントがかかっている。

王獣種に群がる生態をもつ奇蝶　スワロウテイル。それを模した蝶の装飾。ギルドメンバーの暁に渡されたものだ。

現在リントの両脇には双子が、すぐ前方には容姿端麗な少女が歩を進めている。双子は実にはほのぼのとしており、クセのあるブロンドの髪が揺れている。一方少女は困り果てたように顔を押しさえしている。

あれ、何をしようとしてたんだっけ。

そう思わずにはいられない。別に散歩を楽しんでいるわけではない。ただ、目的地を探しあぐねているだけであった。

ギルドでの議論の結果、何らかの私情を挟みかねないミネルと、二人いても一人分にも満たないらしいシュウとミュウ、新入りのリントの三人で依頼の解決に向かわされていた。依頼内容は迷子の捜索。

それゆえに人数が要れば即解決であろうという、マスターの判断であった。

ひとまずは事情聴衆ということになったのだが、残念ながら未だ依頼主に出会えていなかった。

眠気たっぷりシユウとミュウが口元を押さえて欠伸をする。

「今日はポカポカ気持ちいいね。絶好の光合成日和だね」

「光合成が出来たら、食に困らなそうだね」

『そこ！！ 真面目に返さない！！』

ミネルが視線の先で、リントに指を突き立てる。唯一ミネルだけが目的を忘れずにいた。

「てか、どうしてこうも大雑把な地図なの？ 依頼主の自宅までの道が一本線じゃ意味がないわよ！！」

そのとおりであった。ミネルが片手に持つ用紙には依頼内容と、依頼主の住所の代わりに地図が書き込まれていた。

ちなみに地図を書いた人物は依頼主本人である。

「どうする？ この辺りなら住人に聞き込みして、教わるんじゃないかな」

リントが問いかければ、ミネルもやむなく同意した。

依頼主はどんな人であるだろうか。リントはつついそんなことに考えを巡らせる。

さきほどミネルに聞けば、どうもリント自身面識のある相手であるらしかった。

ギルドでの初仕事。何か暗澹あんたんたるものを感じていた。

「で、ここが目的地だと……」

リントは目の前の一般住居を凝視した。近辺住民の助けで辿り着いた場所。視界に映る住宅に何もおかしい所はないはずだ。庭先に植林された木々の幹に『ビューの木』と書かれているのは目の錯覚であるはずだろう。

ピーーーーーンポーーーーーン。

豪く伸長されたチャイムの音が住宅内に反響し、『は〜い。今行くわ』そんな声がリントの耳に飛び込んできた。

ガチャリ、という金属音に似た音を伴い、扉が開かれる。その間から漏洩した激甚な芳香に思わず咽せて、咳き込む。シュウとミユウは失礼にもあからさまに鼻を掴んだ。ミネルさえも片目を瞑り、顔を背けた。

「ああ、やっと来てくれたのね。待ちわびたわ」

姿を露にした人物を見て、リントの表情が無表情に凍った。

何故彼が此処にいる。

リントの眼前では、例の女装癖おじさんが不敵な笑みを零していた。

客間にとおされた四人の前に出された半透明な黄緑色の劇薬いや、ゼリー。

あの日の悪夢が再現されようとしている。

「丁度良かったわ〜。消費期限が切れそうだったのよね。ほら、遠慮しなくてもいいわよ。祭でしか食べられないはずのビューの実のゼリーが、まさかこんなところで食べられるなんてあなたたちは幸運よ」

嬉々とした様子のおっさんが食を促す。傍迷惑な話である。

ビューはこの惑星の原生林の一種である。デフォメトロイドによる汚染を受けずに残った数少ない種であった。

「あら、そういえば君、あの時屋台に来てくれた男の子ボーイじゃない。また巡り合うなんて、運命かしら」

やめてください。許してください。男に戻ってください。てか近づくなー!!

リントは唇を突き出してきたおっさんの顔を側面から挟み、押し返す。慌てたミネルもそれに加勢して何とかこの場を治める。深々

とイスにもたれ、胸をなでおろした。

「あら？ 双子ちゃんはどこにいったかしらあ」

おっさんの言葉にリントが横を向けば仲良く鎮座された人形、顔には『へのへのもへじ』と描かれていた。双子は何処へ。

『双子の特技。一人隠して二人隠さず』

そう言っつてミネルが苦笑して、指を下に向ける。視線を落とせば、テーブルの下にうずくまるミュウ。それと全く同じ格好で身を晒すシュウがいた。

「ゼリー要らないよ。それ食べもんじゃないよ！！」

そう愚痴る双子にリントは強く同意したかったが生憎、女装癖おじさんの視線が注がれる中では憚られた。

「それで、依頼の件なんですけど、迷子というのは息子さんですか？」

ゼリーを食べたくない一心で、依頼の話を進めるミネル。

「そうよミネルちゃん。私が女手一人で真心込めて世話をしていた一人息子なの。昨日から家に帰って来てないのよお」

あなたは男だ！！ と叫びだしたいのをなんとかリントは反駁する。

「心中お察しますが、息子さんの特徴は何ですか？」  
「アッシュブロンドの美しい髪と一目で相手を射止めるエメラルドの眸よ」

このおじさんは酷く怖ろしい形相の持ち主と同時に風人である。  
そして、茶髪に黒目であった。

そこまで似ない親子かあ。

女手一人を男手一人に脳内変換したリントは、半ばその話を鵜呑みにしていた。

「ちなみに、名前はアレクサンドリアで《サイベリアン》よ」

サイベリアンとは確か北方由来の猫の種であった。

人じゃないのか。名前も長過ぎはしないか。リントは倦怠感を覚え、頭を押さえた。

世界の全生命体が巨大化を成し得たわけではなかった。  
森に住み、その影響を大いに受けた種、海原に流出した汚染物質を取り込んだ種に顕著な影響が現れた。

人との共生を選んだ種は、かつての姿のままに存在した。

同じく北西区の空き地で、一人の青年が何者かとじゃれていた。  
『お前かわいいな。デブいけどな』  
その言葉に不服そうに鳴声が上がった。

始まりの生活3（後書き）

10・15に

巡る日常、染まる心4にパーパメントについて足しました。  
マスターが世界情勢について話す辺りです。

## 始まりの生活 4

昼下がり、陽気な気候。絶好の光合成日和だと言った双子の顔が浮かぶ。

さすがにどこかで昼寝をするわけではないか。

リントは頭を振って疑念を掃う。そうして『迷子の一人息子（猫）の搜索』という依頼に集中する。

シユウとミュウ、ミネルとは別行動、三手に分かれ搜索に当たっていた。

猫が向かうような場所とはどこであるだろうか。少なくとも、今日のような日にはどこかの日向で眠りに付いていることだろう。一つの朗報としては、彼の一人息子（猫）はどうやら行動範囲が狭いらしかった。とはいっても北西区を出るところまでの行動力があるようで、度々遠出を計画していたらしい。

なかなか無謀な気がしなくもないんだけど。

というよりも猫であれば、どこ吹く風で帰宅するのではないかな？  
そんな疑問が浮かぶ。

いや、ギルドが何でも屋といわれるが所以は、その寛大な依頼受託に基づいているのだ。

そのために人々からの信頼をも勝ち得ている。  
自然解決ばかりを望んでいれば、必ずや人々の足も遠ざかるだろう。

リントは住宅街の規則正しく均等に仕切られた土地の塀の上を逐一確認しながら、視線を巡らす。

可能性が高そうな場所をしらみつぶしにしていく。

だが生憎、今のところは他の猫さえも見かけていない。

「ふう〜。そろそろ、集合時間になるかな。もしかしたら他の三人が見つけたかも知れない」

依頼遂行開始の前に、ミネルによって時間が決められ、そこで一旦集まる算段になっていた。戻ろうと思い、リントは次の曲がり角を右折した。

右手に閑散とした空間が突如出現する。住宅が建てられていない空き地であった。

不審にも、その空間の一画で見覚えある青年がしゃがみこんでいるのが見える。

リントは首を傾げて、その後ろ姿に接近した。

「何してるんですか？ リスカルさん」

リントの呼びかけにリスカルは「肥満児とじゃれているところさ」と言った。

「ほら、こいつ」

リスカルが振り返った。その手には抱き上げられた肥満体型の猫が収まっていた。

なんとも仏頂面に不機嫌そうな表情。横に広がった腹部は丸かった。

『おい、早く降ろせよ』

無言でそう不満を訴えるように眉を寄せている。

アッシュブロンドにエメラルドのサイベリアン、迷子の一人息子

(猫) アレクサンドリアであつた。

「すみません。その猫の持ち主が搜索依頼を出しているので、渡し  
てもらつていいですか？」

「あつそうなん？ じゃな、デブ助」

随分な渾名あだなであつた。確かに肥満であるのでリントは苦笑する。  
リスカルから手渡しされた彼を抱きかかえると、思いがけない重  
さにつんのめる。

さすがに行動範囲が狭いわけだ。

「そついやリントは試験で合格したんだつてな。おめでとさん」  
「ありがとうございます、つて！！」

一礼するとそのまま倒れこみそうになる。慌てて足を突っ張る。  
視線の先でリスカルが腹を押さえて吹きだしていた。「まあ、が  
んばれよ」そう言つて肩を叩き離れていく。

「アレクサンドリア、少し痩せた方がいいと思つよ……」

リントの言葉にアレクサンドリアは、『余計なお世話だ』と言  
い  
たげに鳴声を上げた。

空き地から離れたリスカルは携帯端末を取り出し耳に当てた。

『リリティナです。託たくけを預かつてます。三日後、実施だそうです』

通信越しの声には感情の隆起が見られない。ひどく事務的な会話。  
あと三日か。自分も仕事を済ませなければだ。

「了解。あの方の計画を途絶させるわけにはいかないからな」

『私も明日には入る予定です』

「んじゃ、美味しいパン屋を紹介してやるよ」

「別にいいです。私の仕事とは無関係です」

通信の向こうの相手は相変わらずの冷めた口調だった。変わらな  
いなと言ってリスカルは通信を切った。不通音を鳴らす端末を閉じ、  
足を中央区へと向ける。

残り三日。

リントには悪いが、実行させてもらう。

リスカルは一瞬、悲しい表情を見せたが、すぐさま何もない様子  
を取り繕った。

## 始まりの生活5

『ありがとねえ、ほらアレクサンドリアちゃんもお礼を言いなさい』

女装したおじさんの手にがちりホールドされた、アレクサンドリアが相変わらずの仏頂面を下げている。しきりに鼻先がヒクつかせているのが目に止まった。あの顔から察するに『匂いがきつぞ。おっさん』とでも思っているのだろう。

リントはおじさんから視線を外し、両脇に構える三人を見た。

椅子に座り込み疲労の色を濃くしているミネル。うな垂れて正座させられたシユウとミュウ。

依頼は無事解決出来ていたが、彼らの気持ちには暗澹たる霧あんだんがかかっていた。

理由は、リントが案じたとおりに双子が、陽気に誘われ眠りの国へと旅立ったこと。

つまり、仕事を放棄して昼寝に勤しんだことである。

そして、集合時間になかった二人の搜索に何故か目の前のおじさんまでも参加し、当初の目的を果たしたにもかかわらず、第二搜索が始められた。

結局、双子が見つかったのは、余所の家の軒下。仲良く寝息を立てていた。

そこでのミネルの一喝はなかなかの迫力があつた。ギルドでのマスターの雷に匹敵するのではないだろうか。

リントこの世の美しい容貌をもった女性への考えを少し改めさせられた。

美しいものにも、鬼は住む。

そう考え、一人首肯した。アレクサンドリアが視線を向け、首を傾げた。

「それじゃあ、あたしたちはこれで帰ります。また何か困り事があれば気兼ねなく相談にいらしてください」

そう言ってミネルが腰を浮かせる。リントもそれに便乗した。シユウとミュウはお互い手を握り合って、震えていた。小動物的な愛くるしさがあるが、リントは助けられないと同情を禁じえなかった。

「ほら、シユウとミュウ。早くしなさい!」

ミネルの言葉でバネのように跳ね起きると、双子はリントにしがみ付いた。両側から羽交い絞めにしてくる。

「シユウもミュウも、痛いってッ」

そう言ってみせるも双子はより一層力を込めるだけであった。

「リント兄から離れると食べられちゃうよッ!」

誰にだよ!! と思ったが双子の視線がミネルに集中して合点した。なるほど。

「……何よリント、その納得した目は」

ミネルが口を尖らせる。

こめかみがヒクついているのは目の錯覚ではないのだろう。リントは逃げ出したい気持ちでいっぱいになった。残念ながら左右に等身大の重りが装着され、思うように身動きは取れない。

リントが頭を押さえ嘆息すると、背後から「じゃあゝまたねえゝ」というねっとりとした口調が首を逆撫でて思わず身震いした。振り返ればウインクと投げキッスの二段攻撃。

咄嗟に姿勢を低くしてかわす。リントの頭上数センチを不可視危険物質が通過した錯覚。

ふうううゝゝと息を吐き出して安堵した。

「何で避けるのよおゝゝゝ、照れちゃってえ。そうだ！ ビューのゼリーをお土産に差し上げるわよ」

照れてないです。ホントに。勘弁してください。

リントは双子を引きずってミネルの前を通過、この家の玄関から逃げるように飛び出した。

そのまま止まらずに疾駆する。

「「いつけえー！！ リントミサイル」」

シユウとミュウが歓喜していた。

「いくぞおー、リントミサイル！！」

「あっ、リントが壊れた!？」

ミネルを置いてきぼりにして、二人を引きずって一人の少年は通

りを進む。

ギルドでの初仕事はこうして無事に終えた。

余談であるが、ギルドに戻った四人を待ち受けていたのは、腕を組み難しい顔をしたマスターであった。四人は耳が疼痛とつこつを発するほど説教され、その後一時間は魂が抜けたようにテーブルに突っ伏した。

ギルドでの活動を始めて二日目。リントは改めてその仕事の多様に舌を巻いていた。

ただ、リントに与えられる依頼の大半を占めるのは、街の見回りや荷物の持ち主捜し、迷子>猫<の捜索などだった。比較的簡単であり、戦闘のない仕事と給料。

リントにとっては今の状況は考えうる最良の状態であろう。

少し雲のかかった青空に突き出す形で伸びをする。身体の節々が軽快に鳴る。

現在、リントは街の見回りをしている。宛てがわれた場所は街の北東区であった。

見渡せば、通りを埋める露天商のテントの数々。朱、黄、蒼、翠……色彩豊かに思い思いの格好をしている。

店に並ぶ品揃えも千種万様。同じ商品は驚くことに見受けられない。

祭り当時に迫る活気がこの場所には存在した。

東瀛トウエイの行商区画、北東区。

この街の玄関口といわれ、街最大級の入り口が位置している。通

りには渡り商人だけでなく、石造りや木造建築の店頭を構える商売人も顔を揃えている。

リントが最初にこの街に足を踏み入れたのもこの地区であった。

あれ？ どうしたのかな。

目に止まった年端もいかぬ女の子。

活気から遠ざかるようにして、建物に身を預けている。

精巧な人形のように整った顔に綺麗な金髪をもった少女だった。

身につけるのは美しい黒一色のドレス。人前に出れば一度、ひとたび人々の視線を集めるだろうと思った。

あまり人とのかわりを持ちたくないリントだったが、ギルドメンバーとしての職務のためその少女に近づいていった。

「何か困りごとでもあるの？」

リントは腰を低めに落とし、少女の目線で問いかけた。

ミネルに教えられたことで、なるべく相手が話しやすい状況を作るのだった。

小さな子にはそれ相応の視線の高さを用いて会話をするといったように。

「……………」

問いに対し返ってきたのは沈黙だった。慚然と無表情を決め込む少女はリントを一瞥した。俯き加減で金髪に半分隠れたその顔からは、その心の内は読み取れそうになかった。

「えーっと」

どう対応すべきかリントは悩む羽目になった。  
暫し自問して、言葉を紡ぐ。

「僕はギルドの手伝いをしてる者なんだけど、困りごとがあるなら手伝うよ」

首にかかった蝶のペンダントを提示して、相手の警戒心を解くようにリントは話した。

少し顔を上げて、リントを見る少女。ライトグリーンの眸が覗く。そうして顎に手を当て、何やら思索する面立ちになる。

やっと開いた小さな薄紅色の口から出てきたのは、

「その顔で男なんですか、何とも無駄ですね。メリットの二つも見つかりそうに有りませんね。ああ、

ご愁傷様です」

罵詈雑言の羅列だった。

これにはリントは完全に言葉を無くすしかなかった。

少女は金髪を揺らし、鼻をならした。

幼い少女にマセた毒舌を浴びせられ、リントの顔には完敗の文字が見えるようであった。

「い、いきなり失礼じゃ」

「ないですよ」

少女がリントの言葉を制す。感情表現に乏しい顔に明らかな嘲笑が浮かぶ。

「……………」

リントは惨めだった。何とも居たたまれない気持ちが大きくなる。宿の自室に逃げ込んで、毛布にくるまってこの日のことを忘れたく思った。

「じゃあね、かわいいおにいさん。楽しかったわ」

そう告げ、ずうううんと撃沈したリントを置き去りにして少女は人混みに消える。

彼女は何者であつたらうか。

後に残されたリントを道行く人が避けていた。

リントは傍にいただけで周囲を不幸にするような、オーラを纏っていた。

「はああああああああああ……」

幸福を全て吐き出すような盛大な溜め息を一つついた。

そうして少女が居なくなつて暫くして、リントも人混みに紛れ込んでいった。



## 始まりの生活6（前書き）

始まりの生活の6まで来ました。

内容的には、壊れはじめる日常って感じます。

リント……まだ二日しか、ギルドで働いてないのに、  
同情にたえないです。

## 始まりの生活6

「「ひつどいカオだねー、リント」」

顔を上げれば振り二つな風人の双子。満面の笑みを貼り付けている。

その手には棒付きキャンディーが握られていた。

「「元気だしなよー!」」

「シユウとミュウぐらいなのに、何であんなに冷酷だったんだろ…

…」

「「……………??」」

シユウとミュウは何のことだか判然しないといった様子で首を傾げた。

そして用事を思い出したように手を叩いた。

「「そうだ!! リント兄は戦えるよね? 悪者をぶっ飛ばしてよ

!」」

「はいッ?」

突然の展開にリントは絶句した。

もしか軍がここを嗅ぎつけたんじゃない。

青くなるリントに対して、シユウとミュウが続けた。

「「眼つき悪いガキが禿げ頭を虐めてるんだよ」」

眼つきの悪い子供が禿頭くまうを虐める……。不良がおじいさんに絡

んでいるッ!?

禿頭をおじさんと変換することはあまりに失礼ではあったが、素早い頭の回転でリントは双子の言わんとすることを理解した。

「場所はどこッ!?!」

相手が不良であれば、何らかの口論、乱闘が避けられないだろう。それでもリントは双子に訊ねていた。

「北東区の門のトコ!?!」

「分かった」

自分は何故自ら暴力沙汰に首を突っ込もうとしているのだろうか。ミネルを襲った不良達のことを思い起こしたからかもしれないな、馬鹿だよあんたは。リントは自身を笑った。

人々の間を縫うようにして駆ける。

幾人もの通行人が目を剥いてこちらを見てくるが、構いはしない。ひたすらに目的地を目指す。

辿り着いた街の玄関口。

ある露天商を囲むようにして人だかりが形成されていた。

彼らの見た目は、粗暴さを訴えていた。三角に吊り上げられた目、逆立てられた頭髪や耳にピアス、刺青の施された二の腕。一般客と  
いうよりは、裏道を徘徊していそうなガラの悪い男達。

見るからに危険そうな雰囲気のリントは、穩便に済まないだろう

ことを知った。

「良かった、リントも、来てたんだ。一人じゃ、心許なかったんだあ」

その声に振り向けばミネルが息を切らしていた。その頬を伝って汗が滴る。

リントと同じくここまで走ってきたのだろう、その顔には既に疲労の色が浮かぶ。

「騒動を起こしそうな連中ね。少なくともあの商人のおじさんは完全な被害者でいいわね」

ミネルの言葉にリントは視線を商人に向けた。  
なるほどシュウとミュウが嬉々しそうなほどに、見事な禿頭である。

「いやいや、そうじゃないって。うん、確かにあのおじさんが一方的に絡まれてる。」

視線の先で畏縮してしまっている露店商人は、鳥売りであった。  
店先に並べられた籠には美麗な羽毛を有した鳥類達が収まっている。

「どうですか、キレイな鳥に興味はありませんか？」

細目の商人が見るからに不良な男達に声を掛けている。

『興味あるよ。おっさんさ〜、どこからこの鳥持って来たのかな〜？ ちよつと話を聞かせてもらえないかねえ〜』

その言葉を皮切りに目の前で、とうとう不良達が次々と鳥籠を蹴り飛ばした。

ガシャンという金属音と鳥が慌てて羽ばたく音、商人の悲鳴が雑多になる。

扉が開き、籠の中の鳥が逃げ出したと思いきや、鳥達はミネルの元に集結していく。

「きゃあッ。何、どうしたの？」

ミネルが慌てふためく。男達の注意がミネルに集まっていく。リントは不穏な空気を感じ、ミネルを後ろに隠すように立ちはだかると深くフードを被った。

ミネルを傷つけさせるわけにはいかないから。ペール、ごめん。

今はいない友人の名に謝罪の言葉を述べた。

『シイー、シイー』

集団の先頭に立つ天然髪の青年が蛇に似た威嚇をする。

リントはまったく相手にせず男達を見渡した。その眼はいつのまにかサファイアブルーに染まっていた。

じりじりと男達が後退る。

「おいおい、何こんな小僧ガキにビビってんだよ！！」

角刈りの巨漢が前に出てくる。

「小僧で悪かったね。……ふう、ギルドの者です。街での乱闘沙汰は遠慮してもらえませんか？」

リントは冷たく男に視線を向けた。

「くそつ、何だ？ 身体の震えが突然……」

男から困惑した声上がる。けれども、そこで怯まず、男は刃物をちらつかせ距離を縮めてくる。

リントはこめかみを押さえ溜息をつく、両手は空のままにして近寄る。

「リント！ 気をつけてよね」

ミネルが声援を送る。

「ごめん。」

「度胸があるのは認めてやるが、彼女の前でかっこつけようなんて馬鹿なこと考えたな。へへっ、彼女かなりの上玉じゃねーか。おめえが死んだら俺のモノにしてやるよ」

「……良く喋るね、あんた」

リントはそう短く告げ、風切り音を伴って男の利き手を刃物ごと蹴り上げた。男の手から離れたナイフが地面を転がる。

「てめえ、調子にのんなよ！！」

男は苦痛に顔を歪めるもすぐに、太い腕が横薙ぎフリマッの打撃を放った。リントは自身の首元を捉えようとした一撃を屈みこんでかわし、男の左脇腹に左足を軸に強い蹴りを打ち込んだ。

「ぐふッ、あぐッ」

「さて、この場は収めてもらえませんか？」

ドサツと音をたて俯せに倒れた男には目をくれず、リントは他の不良達に向き直る。

『化けモンだ。ヤマさんを蹴りだけで倒すなんて』『まさか、有り得ない』『こいつ呪われた子供か』と口々に言う男の表情には怯えの色が濃く出ていた。

「さあどうだろうね、僕が呪われているか知りたいなら出てきなよ」

リントは言い放った。

不良達は顔を見合わせると、『すみませんでした』と一言いい、ヤマさんと呼ばれた男を両脇で担ぎ逃げて行った。

## 始まりの生活7（前書き）

終わりの生活の始まりです。  
きつと。

リントがんばれ。そう応援しときます。

## 始まりの生活7

「ありがとう、助かったよ。彼らは豊草の国出身みたいでね、私が扱っている野鳥が彼らの国の特有であった故に目を付けられてたんだ。かれらはどうも過ぎた愛国主義者パトリオットみたいだよ」

禿頭の商人が事情を説明し、興味深いと言いたげにミネルを見る。

「それにしてもここまで鳥に好かれる人は見たこと無いよ」

リントが横を振り向けば、今もなおミネルは頭や肩や手の上に鳥達を乗せていた。当のミネルはくすぐったそうにしている。なんとも不思議な光景であった。

「あの、どうにかしてもらえませんか？」

「ああ、ごめんごめん。そこの君も手伝ってくれ」

「分かりました。ミネルじつとしててよ」

ミネルが助けを求め、おじさんとリントは離れたがらない鳥達を苦勞して籠に戻した。

商人のおじさんに別れを告げ、ミネルとリントはギルドへの帰路を辿る。

いつの間にか足下の影は長く伸びていた。

前を歩くミネルが急に止まり話を切り出した。

「リントがさ、呪われてるって言ったのは冗談だよな」

あたりまえな疑問であろう。リントの中ではこの問いに対する答えは既に出されていた。

「……………眼の色が変わる風人なんていないよ」

「……………うん、そうだよ。何となく分かった。リントが隠そうとしてた事」

ミネルは振り向き真っ直ぐに無垢な眸でリントを見つめる。リントは視線を逸らせなかった。

「でもあたしはリントを恐れたりはしないよ」  
「ッ!」

ミネルの言葉は心を温かな気持ちで満たした。願わくばこのまま平穩無事に過ごしていたかった。

「嬉しいけど、やっぱり僕は一人の方がいいみたいだ」

そうミネルに告げ、周囲に潜む存在に声を掛けた。

「隠れてないで出てきなよ」

「くそッ、何で気付かれたんだ?」

リントの声で脇道から姿を現した悪相の男達総勢一三人。その中にリントは見覚えある巨漢を見つけた。

「あれ? ヤマさんもいるんだ」

興味なさげな視線を巨漢に対して向ける。男は明らかな怒りの形

相になる。

「てめえには借りを返さなきゃ気が済まねえ」

角刈りの男は唾を飛ばして憤慨した。

「ミネル、先にギルドに戻ってて。僕は彼らの相手をするからさ」

ミネルの背中を押し、リントは集団と対峙する。その背中に「……あたしはリントを待ってるから」と告げたミネルの足が小さくなっ  
ていく。

「今日用があんのはてめえだけだからな」そう言ったヤマさんが周囲の男達に二言ばかり命じる。

どうやらこのグループでもヤマさんはリーダー格らしい。

リントを囲むようにして男達が展開する。手には刃渡り十五センチの刃物や棘付き棍棒、黒塗りの拳銃など物騒なものばかりが握られている。どうも盛大に歓迎してくれるらしい。

リントはフードを被ることなく自身に変化を生じさせた。

### 第一能力解放、《八咫眼》<sup>ヤタノメ</sup>。

漆黒から蒼に変わった眸。幾何学模様の浮かんだ碧眼が見る者を戦慄させる。

「……ごめん」

リントはそう言葉を呟く。その声は誰の耳にも届かず消えた。

「うわあああああッ、助けてくれ」

いつのまにか心が麻痺したように何も感じなかった。耳に飛び込む悲鳴が頭をすり抜けていく。

刀は使わない。ただ素手でのみ、相手を倒すだけだった。悲鳴を上げる節々を無視して、拳を振るった。鈍痛と痺れる衝撃、暖かな血が拳を濡らした。

擦過音を伴って飛び交う銃弾を身体を逸らすのみでかわす。蹴り上げた足裏が男の顎骨を激しく叩く。そのまま相手を叩きつけるように踵落としを繰り返す。

「ギャアアアアッ」

耳をつんざく奇声にも動じない。リントはただ機械的に男達を相手にした。

まるで消耗戦のような抗争が終わった頃には、無造作に転がされた不良達が足元を埋め、周囲には野次馬が集まっていた。

その中心で無数の切り傷や青痣を作ったリントは立ち尽くしていた。

満身創痍であるというのはこのことをいうのだろう。

「帰るかな、宿に」

リントは歩をギルドに向けなかった。向けられなかった。

自分自身が怖かった。

リントが足早に去った現場の跡には、紋朱蝶、スワロウテイルを模しているペンダントが置き去りにされていた。

その頃ギルドでは、マスターは一人で紋朱蝶に残っていた。その目の前には二人組みの人間がいた。

ギルドの一階ホールには来客の姿があった。

一人はローズグレイの長髪の男で服から覗く肌が鱗に覆われている。もう一人は少年でサンシャインイエローの頭髪の間から覗く双角が人目を引いた。

「こいつぁ、懐かしい顔じゃな」

「ご無沙汰してます、ハツプルさん」

「元氣そうじゃな、ペール。それとそっちの小僧は新顔じゃな」

マスターの視線の先にいたのは、ペールとヴァンの二人だった。どうやら無事に街に辿り着けたようであった。

「ああ、こいつは」

『ヴァン、ヴァン・カザホークって名前。えーっと、ハツプルさんだっけ?』

「はっはっは、そうじゃ、ハツプルじゃよ」

「こいつの口の悪さは気にしないでもらえると助かります」

どこか申し訳なさそうなペールに対して、ヴァンには相手への敬意が感じられなかった。

代わりにハツプルを興味の間で見ると見る。

「不思議じゃろうが、わしはこの形で、随分なご老体じゃからな」

「えっ!?!」

心底驚いたヴァンの様子にハツプルは笑みをこぼした。慌ててヴァンは赤らんだ顔を背けた。

「そうじゃ、ペール。お前さんはどうして急に此処に顔を出したのじゃっ。」

急に真剣な表情を浮かべて、ハップルはペールに鋭い双眸を向けた。

「森での生活は上手くいったんですが、共同生活を送っていた一人の少年がどうも軍の探しモンでこの街に逃がしたんですよ。で、俺たちもそれを追うように来たって訳なんです。それにヴァンがどうしてもそいつに謝りたいって願うもんで……」

ペールが横目でヴァンを見れば、その顔に翳りが窺えた。

後悔させたままにしておきたくないと思う気持ちがペールにはあった。

「なるほどじゃ……もしや、その少年の名はミウネ・リントか?」

「「っ!」」

弾かれたようにペールとヴァンはハップルに視線を集中させた。

「どうしてその名前を? もしかして此処に来たんですか」

ペールは少し熱の籠った口調で訊ねた。その横ではヴァンも熱い視線を向けている。

「いや、なに。現在はちょっとギルドの仕事を手伝ってもらっただけじゃ」

ハップルは暫し考えて、口を開いた。

「確かリントは街の見回りに出かけたはずじゃな。そろそろ戻ってくるんじゃないか」

「ペールッ！！ 明日にしようぜ。なあ、俺はまだ会う決心がつかねえ」

首を全力で横に振るヴァンの様子に、ペールは後ろ髪を掻き乱した。

「仕方ないか。ハップルさん、それじゃまた日を改めて伺います」「そうか、分かった。リントには伝えておいたほうがよいかの？」「駄目！！ 絶対に駄目だ！！」

ヴァンが大声でがなった。

「うむ。では黙っておこうかの」「帰ったわよ」

少女の声がギルド内に響く。

ギルドの入口を見れば、ミネルが丁度帰ってきたところであった。「お嬢さんも随分、大きくなりましたね」「そうじゃろ、そうじゃろ。っといかな。ミネルが帰ってきたならリントも時期に戻ってくるじゃろう。鉢合わせたくないならば、ここを離れたほうがよいぞ」

その言葉に真っ先に反応したのはヴァンであった。

脱兎の如く、飛び出していく。ペールもその背中を見失わぬように追いかけた。

その様子を見てほくそ笑むハップルの表情は、すぐさま難しい顔に変貌する。

視線の先でミネルが鬚りを纏っていた。

「……リントに何かあったのか？」

ハップルの言葉にミネルは「大丈夫よ」と返して笑った。何か強がっている素振りなのが一目瞭然であった。

その次の日、リントはギルドに姿を現さなかった。

## 始まりの生活7（後書き）

文章が変とか、読むに耐えない箇所があれば教えてください。

## 綻ぶ事実

「ミッションスタート任務開始、目標は魔女の血族だ」

ヴィンセルト兵に指示を出す軍服の男　　ゲームは葉巻を啜えた  
口端から紫煙を吐き出す。

皺の刻まれるその面貌は険しかった。

目の前に存在する白塗りの外壁に囲まれた街に睨みを利かせた。

その左右で兵士達が銃を手に、タイラントを従えていた。

豊草の国管理下のヴィンセルト兵士。

ヴィンセルト連盟軍はその加盟国ごとに管理された軍隊の集合体だ。

豊草の国の兵士などは皇国を中心とした枢軸国の軍隊と同じ括りにされているものの、扱いは別格とされて低い地位にある。

そんな彼らには戦果を挙げ、その名を知らしめん限り富みある生活は待っていない。

俺も同じだ。大佐という肩書きであるものの、その権威はない。指揮官として豊草の国に留まり続ける人生だ。

ゲームは進軍する兵士の後ろ姿を見つめ、目を伏せた。

「守りたいものほど守れない。言葉は出遅れ、先走った思いが日常を壊す。ルールにされたルールは錆びて、世界は外れる。一步外へ、枠の外へ。目指した理想に辿り着いて、後悔を知る」

美しい漆黒のドレスから覗かせる雪のようなきめ細かい白さを、  
光り輝く金髪をたたえる風人の少女は歩く。

そのはるか上空では鳥類であろうか、黒点が浮遊している。

よく晴れた日であった。既に肌に触れる空気には秋の冷気はない。  
少女はふと立ち止まり、首を傾げ人差し指を口元に当てた。その  
視線の先には城の外見をした建築物が鎮座していた。ギルド、紋朱  
蝶である。

くすり、と笑みを零して少女はその前を通り過ぎる。その懐から  
取り出した漆黒の携帯端末。

それを耳に当て、少女は通達する。

「時間です。私は例の血族の回収に当たります」

『了解。ああ、俺の友人でもあるから、殺すなよ』

「心配なく。隊長からは命は刈り取るなど指示されています」

『こつちも済ませたら、合流するさ』

「分かりました」

通信中、少女は終始無表情であった。感情表現に乏しい顔貌で空  
を見上げ、右腕を突き上げる。

空を掴むように伸ばさんとした。

不意に大地を揺らす轟音が鳴り渡る。遠くの空に黒煙が上がった。

南東地区の行政区あたりであろうか。

困惑する通りの人々は『何かの実験だろうか？』などと口々に意  
見を交わしている。

少女は思わず、仮面を落として笑みを浮かべてしまった。

そんなことがあるはずはないだろう。この街の住人は平和呆けた下等人種でしかないのか。

嘲笑を浮かべ彼らを観察した。

根拠のない妄想話に華を咲かせて騒ぐ住人達ばかりだ。誰も彼も最悪の場合を想像してもいないらしい。

だがそんな彼らにも恐怖は存在したようだ。

『兵隊が攻めて来た！！ 向こうは火の海になってる』

通りから走ってきた人々が言った台詞が混乱に陥れた。

さて、舞台は揃ったようだ。自分も仕事を始めよう。

少女は人込みに紛れ、人知れず目的を追い始めた。

## 綻ぶ事実2

響く轟音、昇る黒煙。混濁する人々の悲鳴。

僕のせいだ、後先考えず力を使ったから……ッ！ギルドのみんはは！？ミネルは！？

今更ながらにこみ上げる後悔で息苦しさを感じる。

焦る気持ちに急かされるようにリントは、逃げ惑う人々でこった返す通りを人の波に逆らって走った。

何度も人にぶつかり押し戻されながらも、間を掻き分けギルドのある、中央区へと結ぶ石橋にたどり着く。

嘘だ、こんなの……まるで戦争だ。

目に飛び込んだ光景に絶句した。

ギルド東瀛支部トウエンがあった都市の中央区一帯が真紅に染まり空を焦がしていた。

橋の下を流れる川も朱く輝き、神秘的とも言える風景を造り出す。リントは止まらない足の震えを忘れようと走り出した。

「どうして、こんなことをするんだ！ どうして、みんなを傷つけるんだ！」

無意識に口を出た言葉は建物が燃え、木材の爆ぜる音にかき消される。

黒煙が漂い、熱風が吹く中を進んだ。煙が目沁み、熱された空気が喉を焼く。

幸いに辿り着いたギルドは未だに火の手から免れていた。

ギルド周辺では、残された人々を誘導している幾人もの人影があった。

ただその中には、見覚えあるギルドメンバーの姿もミネルもマスターの姿も見られなかった。

ギルドへ近寄ろうとしたリントの耳に、恐怖と怒りを含んだ声が聞こえる。

『キヤー』『逃げろ!!』『邪魔だ! 退けよ』

見れば、火の海と化した方角から逃げる人々の後ろを追うように、黒服の男達が現れたところだった。

一目で軍人だと分かる黒一色の正装と片手に握られた長剣。

既にその刃が濡れているのが分かった。彼らの歩いた道には倒れこんだまま動かない人々が点在した。

リントは憎しみに歯を軋ませ、ギルドに背を向けると男達を見据え疾駆した。走りながら柄に手を伸ばす。

無力な人々を傷つけるなんて……、赦せない。

「ふざけるなああああ!!」

人々の間を縫って兵士達の目の前に飛び出す。

「おい、何か来た!」

「うおおおおおおお」

リントは柄に手を置いて、その刀身を抜き放った。

男達が反応する前に相手を刃背で打ち倒す。

ゴキッ、バキッ、ドスッ……。

『『『ぎいやあああ！！！！』』』』

骨が折れるような鈍い打破音と大きな奇声が響き渡り、男達がその場に崩れた。

そうして刀の切っ先を動きを封じた男達に向けたまま、兵士三人に睨みを利かせた。

この合間にも火の手は迫ってきていた。煙がこの一帯を囲い始める。

「なんで、街を襲っているんだ。目的は何なんだよ！！」

いや、きつと彼らの目的は自分なのだろう。それ以外の答えは考え付かなかつた。

収まらない震えを止めたい一心で刀の柄を硬く握り締めた。

「お前らは何も知らずに暢気に暮らして死んでいくんだ」

腕を折られた長躯の男がリントの問いに哄笑しながら答えた。

「世界の頂点に君臨するのは皇国ただ一国」、「アライアンスは崩壊するんだ」

他の男二人も釣られるように後にけたたましい笑いを続け言い放つ。

彼らは何を言いたいのだろうか。

「……あんたらは人を探してるんじゃないのか？」

リントは彼らの戦闘行為の目的が掴めず、男達に質問を重ねた。

「はあ？ つぎゃあ！！ 糞野郎、骨にヒビでも走ったな。こんな小僧に遅れをとるなんてよ」

右腕を抱えるようにした無精ひげの男が悪態をつく。頬を伝う汗が地面に飛んだ。

「目的は人探しじゃないのかって聞いてるんだよ！！」

リントは声を荒げ、男の首筋に刀身を当てた。うつすらと血が滲むのが見えた。

頬を引きつらせ、最初に言葉を発した背の高い男が肩を震わした。

「命令には人探しは含まれていなかったぜ。魔女狩りだ。へへっ、こんな嘘塗れな連合なんてな……崩壊しなければいけないんだ」

この男たちは各勢力が互いに結んだ不可侵条約について、知らないはずがなかった。

そのためこの数十年、平和が訪れていたはずであった。にもかかわらず、彼らは侵略という行為に及んでいた。

反省の色の見られない様子にリントは、怒りに任せて刀を振るおととした。

『やっと見つけたわ、かわいいおにいさん』

リントは、突然鼓膜を揺らしたその声に聞き覚えがあった。張り詰めた弦のような鋭さを伴い、殺気を感じさせることを除けば。

「何故君が……」

振り返ったリントの視線の先で黒のドレスに身を包んだ少女は、先日リントに罵詈雑言を浴びせたまさにその人だった。リントは同時に恐怖を覚えた。少女の肩越しに見えたギルドの周りを黒服の男達が囲んでいた。

みんなが危ない。

リントはギルドに向かおうと、片足を浮かせた。

『おにいさん。まずは自分の身を守れなきゃ』

全身に戦慄が走った。森で黒い獣に遭遇したときと同じく動悸が早まる。

風切り音が大きくなり、少女の髪が突風でなびきだす。

「どうして、何で君が……」

上空から降下してきた黒い影。牙を剥き出し、唸り声を纏っていた。

全身を覆う艶やかな黒毛には白い斑毛が浮かんでいた。

ティ克蘭 皇国の精鋭隊の軍用獣。

「くっ！」

リントは無意識に歯を軋ませ、臨戦態勢をとった。刀を正中線に沿って構える。

「な、何故、死神の行進がここにいるんだよ。こんなの聞いてないぞ！」

リントの背後で倒れたままの兵士が怯えた様子で言葉を漏らした。

何か様子が変わった。両者ともに同じ連盟の兵士であるはずだった。

「そんな怯えないでくださいよ。今回は懲罰令は下りてませんでした。私たちの目標はこの少年です」

蔑視の目で男達を見る少女の口元には歪んだ笑みが作られている。少女は手を懐に忍ばせると、音も立てず逆手剣を抜き放った。刃の腹に皇国軍の紋章が刻まれている。

リントは倒れたままの男三人を背に、少女とテイ克蘭に対峙した。

少なくとも動けない彼らより、この少女の方が遥かに危険だった。

「少年だと？　そうか、お前たちの目標のために俺たちを使いやがったな！　ガームさんに知らせ　ごぶッ」

肉を切る音が立て続けに聞こえ、男の言葉の最後は吐血と共に消えた。

「悪いが、お前らガーム隊には最後まで破壊行為を実行してもらわなきゃ困るんだ」

リントは咄嗟に体を横にし、敵を左右に見れる体勢になる。

視界の端に映った刺客は蓬色の髪をしていた。片手に長剣を構え、たたずんでいる。

その目には以前見た暖かさの欠片もない。いや、一瞬だけ視線を落としたのは　気のせいだろう。

「久しぶりだな、リント。随分元気そうじゃん」

「リスカルさん……あなたも兵士なんですか？」

リントは視界の左端で、口元に冷笑を浮かべる青年に問いかけた。その足元には赤く染まった三人の男が不恰好に倒れたままになっている。答えは聞かずとも明らかだった。

「あなたもつてことは、リリティナと見知りなのか？」

リスカルは面白そうにリントをはさむようにして立つ少女に視線を向けた。

リントの右側でイクランを従える少女　リリティナは興味の無い声で言い放った。

「つい先日、たまたま声をかけられただけです。それより例のモノは手に入ったのですか？」

「ああ、じいさんのトコから拝借してきた。じいさんには逃げられたが、ブツはすでに配達済みだよ。てかりリティナ、街の中までイクランを連れ込むなよ。こいつらが警戒する」

リスカルはブーツのつま先で冷たくなりつつある男達を突っ突いた。

例のモノってなんだ？　それにじいさんって、まさかマスター！？

リントの全身に悪寒が走り、その双眸に明らかな敵視の色を浮かばせた。

「まさか、リリティナの任務がリントの捕縛と聞かされた時は信じがたかったな」

リスカルが失笑しながら歩む。その手には炎の揺らめきを反射する刃が握られたままだ。

「いつ、僕の捕縛は決定されたんですか？」

やはり例の不良達に完全でなくとも力を使ったせいだろうか。

「まあ、ハコビドリに付けられていた発信機で特定出来てたんだが、こちらにも都合があつてな。いつだったか……」  
「ターゲット  
目標に情報を与えないでください」

リリティナがリスカルをたしなめた。リントは内心ショックを受けていた。

始めからバれていた……。

それでも今此処で素直に捕まるわけにはいかなかった。

「僕は捕まるつもりは無いよ」

そう言い放ったリントには圧倒的に不利な状況を打開する策などなかった。

短い間であつたが親切にしてくれた人々が暮らす街だった。それ故に守りたかつた。

肩の力を抜き、眸を閉じる。

深く息を吸い込み、眸を見開く寸前、懐かしい声が張り詰めた場に響いた。

『この場は俺に預からせてもらつぜ、リント！』

驚いたリントの視界は竜人の男が颯爽と近づいてくるのを映した。

「ペール……」

自然と口からその名が零れた。森を出て以来の再会だった。

懐かしさに胸が熱くなる。リリティナとリスカルの存在に動ぜず、ペールが横に立った。

「久しぶりだな、リント。にしても随分と大変な事になったな……まさか連盟がこの街に手出しをするなんてな」

ペールは辛辣そうに言葉を紡ぎ、掌でリントの髪を掻き乱した。

「リント。ハップルもその娘さんも無事だ、安心しろ」

「どうして、二人の名前を？」

「後で説明してやっから、早くギルドの方に行け」

そう早口に告げ、ペールがリントの背中を押した。

「でも、一人で二人とティクランを相手になんて……」

踏みとどまって心配そうにペールを見上げた。だがその表情には確固たる自信が窺えた。

「心配すんな。ほら準備は万端だからな」

ペールが取り出して見せたのは、中に何かが詰められた包みだった。

それには見覚えがあった。

「了解。みんなの元に向かうよ」  
「おうー!!」

リントは振り返らず、ギルドに駆ける。  
その背後でティクランが飛び掛ろうと身構える。が、氣勢を削ぐように白い濃煙が周囲を覆い、獣の視界を奪った。

ありがとう、ペール。

リントは声に出すことはせず感謝した。少なくともその心には、彼が負けることはないという確証の無い確信があった。

『仕方ない一時離脱するわ。コククリ』

そんな声と共に空気が動く気配。風が煙を薄め、視界に燃え盛る建物の輪郭を映し出す。

「どうやら、お仲間はいなくなったみたいだな」

煙の晴れたこの場には二人のみであった。

ペールはリスカルに話しかけた。

あくまで表面上は友好的に、相手の出方を窺うかのように。

「くくく、だからといってこちらの不利にはならないさ」

先ほどと変わらず冷酷な視線、冷笑を浮かべたりスカルはペールを見据えて言い放った。

ペールは腰に手を当て、目の前の青年に神経を集中させた。

「たく……ハツプルを襲った辺り、一連の騒動には別の目的があるんだろ？ 子供一人に一個中隊が動くとは考えにくいしな」

「ふーん、蛇にも考えるだけの脳はあるんだな。まあ、あんたはすぐに跡形も、骨も髪の毛の一本であつても残らなくなるから」

哀れむような表情を浮かべたりスカル表情は、すぐに面白がる顔に豹変する。

愉悦に浸るような笑い、獲物を嬉々として追い回す狩人のようであつた。

ペールはこの表情が示す人物像が、この男の素なのだろうと直感した。

「髪の毛までつて、あの黒毛の獣がいないのにどうやるってんだ？

お前が食うとかシャレになんねえからな」

笑みを零したペールの視界で地面が歪むのが映つた。

ッ！？

咄嗟に飛びさつたペールは驚愕に言葉を失くした。

先ほどまで、ペールが立っていた場所には地面から顔を覗かせる頭殻があつた。

鋭利な刃物を連想させる鋭い双牙が並んだ、節足動物であつた。

よりにもよつて、ゲイボルウム騎甲殻虫かよ！！

心の中で悪態をついたペールの目の前で、騎甲殻虫は再び地面へと潜伏する。

騎甲殻虫 体長は二、三メートルほどの中位種である。名前の通りに全身の体表は固い外皮で覆われ、金属刃であつても弾かれるほどである。また頭部には鋭い鋏のような牙が生え、顔の中央に三

つの集眼が並んでいる。

数多にいる虫類の中でも特に危険視されている存在の一つである。しかしペールにはどうしても解せない疑問があった。

「虫類使役の技術はこの国にも存在しない。失われた技術だ。ロストギミックなものにどうしてお前は、そいつを使役出来ているんだ？」

虫類はその生命力の強さから、それを服従させる技術の開発が急がれていた。だが開発は難航したのが事実であった。そして操者を襲わぬように学習させることは事実上不可能とされ、どの国も研究が頓挫していたはずだった。

けれども今、目の前の男は確かに騎甲殻虫を操っていたのだった。

「皇国の、いや雪の国の技術力の賜物だよ」

苦渋に顔を歪ませるペールを嘲笑うように、リスカルが話した。その眸には自身が負けるはずが無いという確信の色が窺える。

「親に縋る子供って奴か……。世の中の手厳しさを教えてやらなきやな」

ペールは腰に吊るした刃の柄を握り締め、抜き放った。

## 綻ぶ事実2（後書き）

ゆっくりまったり更新していきます。

ゾウガメのようにドスン、ドスンと……？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4093x/>

---

嘘と獣の終末論

2011年10月21日09時11分発行